

自由民主党浜松視察報告書

井田博康

視察日程 令和7年1月28日(火)～1月29日(木)

視察先 奈良県下市町・大阪府堺市

視察内容 ・廃校活用・官民連携・ファシリティマネジメント・地域づくりの取り組みについて
・「真・体験」により気づき、学び、実践を通し、災害時本当に必要とされる意識と技術について
(堺市総合防災センター現地視察)

視察議員 瀧美 誠、花井和夫、松本康夫、齋藤和志、井田博康、露木里江子
中野和幸、辻村公子

視察日 令和7年1月28日(火)

視察地 下市町役場・旧下市南小学校「KITO」現地視察
奈良県吉野郡下市町

調査内容 廃校活用・官民連携・ファシリティマネジメント・地域づくりの取り組みについて

説 明

下市町「元気印集落」事業について説明を受けた。この事業は支援事業として、地域みんなで話し合い、試行錯誤を1年程度重ね、地域資源の発見や思いを共有しつつ、まずやってみるという方針のもと補助率：10/10、20万円限度で町職員が支援員として話し合いに参加して行う。

推進事業として、地域の具体的な取り組みに幅広く助成し続けることが大切として、補助率：3/4、200万円限度で事業を行う。

平成27年には、人口71人の平原地域に集会所を有効利用した地元産食材を利用したピザハウスを地域交流の場として設置した。平成28年には人口35人の才谷地域に移住促進ゲストハウス山桜を「清流に包まれたお宿」をコンセプトに集会所を有効利用して設置、平成29年には人口22人の草谷地域に移住促進ゲストハウス風の谷を「昔暮らしを楽しめるお宿」をコンセプトに集会所を有効利用して設置し

た。

また、町内唯一のガソリンスタンドを「ならコープ下市コミュニティスタンド」として燃料確保のためとして国の補助を受け、新たなガソリンスタンドとして、コミュニティカフェ・日用品販売・観光情報発信などの地域交流拠点としても活用されている。

廃校利用の事業としても旧秋野小学校を活用した吉野杉の割箸製作や、吉野杉 x 鮑（かん）の家具工房や旧広橋小学校を一般社団法人に無償貸与し、ゲストハウス、ワークショップ、合宿、寄席などに利用し様々な活動を実施している。

廃校利用の代表的な事業として旧下市南小学校での「観光客の誘導と新たな来訪客を呼び込む拠点」事業の説明を受けた。

令和5年4月～空き校舎となる予定のこの小学校のサウンディング型市場調査を実施し、観光客の誘因等の拠点施設として整備方針を定め、令和4年1月～活用事業者の募集を行い、令和4年3月に優先交渉権者を㈱パルに決定し、設計・工事が行われ、令和6年7月から「KITO」として活用が始まった。ショップ、カフェレストラン、ベーカリー、キッズスペース、マルシェなどを備える「もうひと手間をあそぶ」をテーマとした体験型複合商業施設で、下市町の地域資源を使ったオリジナル商品を開発提供している。

下市町の賑わいまちづくりとして秋野川沿いに各拠点施設を作り誘客を狙った配置も考えた一連の事業である。

令和6年7月から活用が始まった「KITO」を現地にて視察をさせて頂き説明を受けた。パルグループはレディース・メンズアパレルから服飾雑貨、生活雑貨まで、自社で企画した様々なブランドを通して、多様なファッションライフを創造する手伝いをしていて、年間1600億円を売上げ、48ブランドを立上げ、従業員は6,060名である。パルグループの創業者の井上英隆氏は下市生まれで下市小学校、下市中学校を卒業して1961年に㈱スコッチ洋服店を設立し、1973年10月に㈱スコッチ洋服店のカジュアル部門を分離し、株式会社パルを設立した。

創業50年を機に何かするのならば、創業者の■■■■氏の地元下市から始めようとアパレルとは違う事業である「下市地域再生プロジェクト」を始めた。

この下市町は奈良県のほぼ中央に位置し、大阪から電車で約1時間、平安時代のころから吉野の入り口として栄え市が立つようになった。日本で最初に商業手形である下市札が発行されるなど、吉野地方の主要商業地として栄えた。豊かな自然に恵まれ、三宝や割箸づくりの木工業桃やカキなどのフルーツを生産する農業も盛んな町である。歌舞伎の舞台として知られ、また、日本最古の神社、丹生川上神社な

どもあり歴史文化にも魅力にあふれた町である。

このような背景の中、キッズスペースに利用している体育館を利用して合宿できる宿泊施設との連携も考えている様である。他にも神社や歌舞伎にまつわる施設を誘客に繋げる事も考えているとの事です。今のところは年商1億円を目指している。

所 感

下市町「元気印集落」事業については住民との対話も必要であるが先ずは小さな事からでも始めて行こうとする行政の過疎化を極力抑える気持ちが前面に出ているように感じた。住民たちが自分たちの出来る事を行い、町民みんなで自分たちの地区の良さを生かし、地区ごとに誘客を図ることによって町内各地区だけでなく、町外の人たちを呼び込むことに繋がり活性化がなされている。各地区が離れていても町民の気持ちが一つになって盛り上がっていくように感じた。ただ、説明の中で行政の担当者が住民の話し合いなどに、そこまで関わってやってるんだと感じるものがあり、担当者の本気度が住民にしっかりと通じていると思った。

また、町内唯一のガソリンスタンドを「ならコープ下市コミュニティスタンド」として国の補助を受けながら、コミュニティカフェなど多様に活用したり、旧秋野小学校を活用した吉野杉の割箸製作などの家具工房に利用したり、旧広橋小学校を一般社団法人に無償貸与し、ゲストハウスなどに利用する活動や「KITO」に至るまで、行政の横串を刺さないといけない事であると思いましたが、政の規模が小さく所管業務を兼務している事と国県等の補助を含めた予算建てについても都市計画法や設計に関してもあらゆる知識を持った行政マンが居てこそそのなせる業であると感じた。

今後は、「KITO」の施設を中心に事業展開が広がって行けばいいと思いました。また、この町から大阪など都心に出て行った方々のUターンに繋がることを期待します。

視 察 日 令和7年1月29日（水）

視 察 地 堺市総合防災センター

調査内容 「真・体験」により気づき、学び、実践を通し、災害時本当に必要とされる意識と技術について

説 明

全国各地で集中豪雨や台風などの自然災害が多発し、堺市においても南海トラフ巨大地震や上町断層帯地震等の大災害の発生が懸念される中、本市の防災に関する中核拠点として、自助・共助・公助の連携によって地域の防災力の向上を図り、災害に強い都市形成を推進することを目的として整備することが決定した。平成27年度に土地を取得し、平成29年2月に整備計画を策定。土地がため池であったため、平成29年9月から敷地造成工事、令和2年3月から建設工事を開始し、令和3年10月に竣工、令和4年4月から「堺市総合防災センター」として運用を開始した。

建設地の特性及び位置については南海トラフ巨大地震及び上町断層帯地震に対するリスクが低く津波による被害リスクがない事。また、消防本部から離れており、被害リスクを分散できる。大阪中央環状線を軸に、複数の基幹道路が内外を結んでおり緊急工数路が確保されている。

事業方針としては、地域防災力向上のための「地域の連携強化・地域防災を担う人材育成」、消防職員・消防団員の資質向上や人材育成を目的とした「消防・防災力の強化」、大規模災害発生時の「円滑な受援体制の確立」の3点を挙げている。

展示設備として、全国的に起こる災害や、堺市に起こりうる災害などから、災害特性を学ぶことができる「ガイダンスシアター」（映像による災害学習）や最大20名が乗り、震度1から7まで体感できる起震装置で、前面の壁と床に映像を投影しリアルな体験が可能な、「災害体験コーナー」、本型のグラフィックにより10の災害特性と災害の備えについて学ぶことができる「防災情報コーナー」、総合訓練等の1回の所室を利用して、煙の怖さ、避難姿勢などをクイズ形式で学ぶことができ、ここで避難姿勢を学んだ後、煙暗闇避難体験を行う「ガイダンスルーム」、火災受信盤、避難誘導灯の模擬装置を展示し実際に操作しながら、学ぶことができる「消防設備体験室」が配置されている。

本施設は南海トラフ巨大地震などにより沿岸部にある消防本部が被災した場合などにおける代替本部としての機能を有している。防災啓発施設は各機関からの応援隊（約240隊の車両と約960名の隊員）が集結し、活動拠点とできるよう計画されていて、停電時にも非常用自家発電機能に約4,000ℓの燃料を備えており、72時間は給油なしに施設機能の維持が可能である。車両の集結スペースは円滑な災害対策活動ができるよう一筆書きの車両動線とし、その動線上に備蓄倉庫や自家給油取扱所

が配置され、ガソリン5,000ℓ、軽油15,000ℓが保管されている。

また、自然エネルギーの積極的活用や省エネ型設備の採用、訓練用水の循環再利用、肺炎・排水処理設備、災害時の自立性の確保など環境に配慮した対策をとっている。維持管理費用は、年間7,000万円来館者状況は令和4年度は49,176人令和5年度は57,868人で増加傾向にある。

所 感

建設地の特性及び位置について大阪府第2の都市とも呼ばれるこの地域にこのような規模の敷地、災害リスクが少なく基幹道路が市内外を結んでいて緊急交通路が確保されている場所を見つけたことに驚きました。元々ため池だった土地を利用する事にも驚きましたが、条件が揃っていたから地盤等の調査もして決定したのかと思いました。

説明の後、場内施設を見学させて頂いた時、まず目を引いたのは、近隣都市の消防隊員の訓練でした。説明によると、あらゆる事態を想定し、それに対応する道具や設備を使う訓練を行なっているという事であった。この施設は住民の防災意識を養い、啓発するだけではなく消防隊員の訓練にも役立つ重要な施設であると感じました。また、備蓄の内容をきいて、確かに南海トラフ巨大地震などにより沿岸部にある消防本部が被災した場合などにおける代替え本部としての機能を果たすのだろうと実感しました。

展示設備の中で色々と経験させて頂く中で、「煙、暗闇避難体験」は、初めて経験させて頂きましたが、暗闇の中での誘導灯の効果を実感することができて凄くよかったです。普段建築の仕事の中で消防法通りに気軽に配置していましたが誘導灯が得る見えないで大きく違う事や安心感が違う戸を実感として学ばせて頂きました。

本市では、南海トラフ巨大地震などにより沿岸部にある消防本部が被災した場合などにおける代替え本部としての機能を果たす施設と備蓄施設はどの様に整備されているのか確認しておこうと感じました。

(様式 11)

令和 7 年 1 月 31 日提出	
(あて先) 会派名 浜松市議会 自由民主党浜松 代表者 会長 倉田 清一 様	
報 告 書	
出張年月日	令和 7 年 1 月 28 日 (火) ～ 1 月 29 日 (水)
出張先	下市町役場 旧下市南小学校「KITO」、堺市総合防災センター
出張の理由	廃校利用と地域づくり、総合防災センターの訓練機能と市民啓発
出張者 氏 名 印	露木 里江子
【1 月 28 日 下市町役場 奈良県吉野郡下市町大字下市 1960 番地 担当 松原氏】 平安時代から吉野の入り口として栄えたこの地区は、歌舞伎「義経千本桜 三段目 すし屋の段」の舞台として知られ、「秋野川沿いの下市の町なみ」として奈良県景観資産に登録されている。8 町村での合併も協議され、新名称も「吉野市」と決定したが、決裂し、現在に至る。割り箸が特産であり、かなり減少したといえ、割りばし工場が目についた。農業では、吉野地方がこんにゃくの発祥地であるため、こんにゃくをはじめ、大根など、小規模農業ではあるが、魅力ある作物が生産されている。山林 8 割の町であり、人口減少も大きく、廃校となった校舎を利用して地域づくり、地方創生を模索。 【KITO forest market shimoichi 奈良県吉野郡下市町善城 6 6 4-1 】 2024 年 7 月、複合型商業施設「KITO forest market shimoichi (KITO)」がオープン。運営は、雑貨店『3COINS』等を手掛けるパルグループであり、会長が下市町出身であることからふるさと応援である。廃校になった小学校がリノベーションされ、「木と共に、きっと出会える場」として生まれ変わった町の新拠点となっている。館内には、クラフトビールの醸造所もあった。旧下市南小学校は、複合型商業拠点に、旧秋野小学校は木工工房に、旧広橋小学校はゲストハウス、地域体験の拠点などと、3 小学校、1 中学校のリノベーションなど、この規模の町でこれだけの統廃合が行われたことにまず驚きを感じた。木工製品やアート作品、地域の魅力を最大限に発揮できているのは、民間の力であると感じた。ここまで力を注ぐのは、パルグループがの会長の故郷であるからであり、地を離れても、このように故郷へ貢献しようとする気持ちは、ある方も多いのではないかと感じた。本市も、このような気持ちを受け止める制度をつくる必要もあるかもしれない。	

【堺市総合防災センター 堺市美原区阿弥 129-4】

近年の台風や集中豪雨などの自然災害、南海トラフ地震など大規模災害の発生が懸念される中、堺市の防災に関する中核拠点施設として、消防職・団員の教育・訓練のみならず、地域の連携強化・地域防災を担う人材の育成、大規模災害時における全国からの応援部隊の集結場所や備蓄支援物資の集積配送拠点など、自助、共助、公助の連携による地域防災力の向上を図り、災害に強い都市の形成を推進することを目的として整備された。

(1) 地域防災を担う人材の育成

ツアー形式での体験により、堺市の地域特性に応じた実災害に近い災害体験を行うことができる体験型学習施設である。火災の際の煙など、スモークハウスなどより格段に実感できるものであり、外部からも様子が見え、客観的にも認識できてよい。

(2) 消防・防災力の強化

高度な訓練施設による実際の災害現場を想定したリアリティの高い環境で、さまざまな災害特性に対応する専門性の高い教育・訓練を実施している。消防職団員の資質向上や人材育成を図っている。備蓄倉庫内に雨天荒天時にも訓練が可能な器具や場所が確保されている。

(3) 大規模災害時の円滑な受援体制確立

大規模災害発生時などに、全国からの緊急消防援助隊等の集結場所、消防局庁舎などが被災した場合における代替機能、支援物資の配送拠点機能を持つ広域的な災害応急対策の拠点施設となっていて、視察当日も、様々な自治体が訓練に参加していた。普段から様々な自治体との連携の訓練ができることで災害時の受け入れの訓練にもなっていると感じた。



この日も6自治体が合同訓練

防災センターには、来館者の皆様の交流スペースとなるカフェがあり、飲食提供のほか、防災用品・非常食の店頭販売も行っており、授乳室、キッズスペースもあり、親子をはじめ、多世代の居場所としての機能もあると感じた。

自由民主党 C 班視察報告書

中野和幸

視察日程 令和 7 年 1 月 28 日（火）～1 月 29 日（木）

視察先 ・下市町役場（K I T O）（奈良県）

・堺市総合防災センター（大阪府）

視察内容 奈良県

・廃校活用、官民連携、ファシリティマネジメント

地域づくりの取り組みについて

大阪府

・「真・体験」により気づき、学び、実践を通し、災害時本当に

必要とされる意識と技術について

視察議員 渥美 誠議員 花井 和夫議員 松本 康夫議員 斎藤 和志議員

井田 博康議員 露木 里江子議員 中野 和幸議員 辻村 公子議

員

視察日	令和7年1月28日（火）
視察地	下市町役場 民間活用中の旧下市南小学校「KITO」現地視察 （奈良県）
調査項目	・観光客の誘客方法は？ ・賑わいづくりの取り組む事業者、団体へのヒト・コト・モノに 関してどのような支援をしたのか？
目的	・廃校活用、官民連携、ファシリティマネジメント 地域づくりの取り組みについて
説明	奈良県吉野郡下市町は、奈良県のほぼ中心に位置し、東西9km、 南北11.5km、面積61.99km ² の町。北には明日香村、東には吉野 山で有名な吉野町、南には大峯山や洞川温泉を有する天川村、世 界遺産 大峯奥駈道といった全国的な有名な場所に囲まれてい る。

小中一貫義務教育学校「下市あきつ学園」の建設により小学校・中学校が空き校舎となることから、2つの校舎の利活用について役場内に全職員の約2割がメンバーであるファシリテイマネジメントプロジェクトチームを立ち上げたところから、事業者決定、空き校舎をにぎわい拠点として事業者と連携したまちづくりへの進展、にぎわい拠点が誕生する中で産・学・官・地域が連携し、下市町全体の賑わい創出に取り組む「下市町賑わい創出協議会」設立を行い、6施設を民間活用を行った。

所感

今まで通過するだけの下市町であったが、施設を民間活用に行うことで、立ち寄ってもらえる町になった。

この事業を担当している町役場の職員は、国・県・市の補助金等の事を把握して、うまく活用させていた。

職員曰く、「人口約4000人強の町であるため動きやすい」との事であったが、町全体でいろいろと考えているのが羨ましく思えた。

視察日	令和7年1月29日（水）
視察地	堺市総合防災センター （大阪府）
調査項目	・「真・体験」により気づき、学び、実践を通し、災害時本当に必要とされる意識と技術について
目的	東南海地震は周期性があり、21世紀前半にも次の地震が発生する可能性が高いとされている。政府の地震調査研究推進本部の予測によると、2018年（平成30年）1月1日時点の発生確率は30年以内で70 - 80 %、50年以内で90 %程度以上とされているので、実際に体験を行い、知識を高めるため。
説明	近年、全国各地で台風や集中豪雨などの自然災害が猛威を振り、堺市においても南海トラフ地震や上町断層帯地震など大規模災害の発生が懸念される中、本市の防災に関する中核拠点施設として、消防職・団員の教育・訓練のみならず、地域の連携強化・地域防災を担う人材の育成、大規模災害時における全国からの

応援部隊の集結場所や備蓄支援物資の集積配送拠点など、自助、共助、公助の連携による地域防災力の向上を図り、災害に強い都市の形成を推進することを目的とし、当センターを整備しました。

所感

まずは映像による災害学習を行い、視覚で災害の怖さを学び、次に起震車における地震体験を自分の身で感じ、起震車の場合は、地震がくることが分かっての体験であるが、それでもあれだけの怖さを感じ、その後、煙・暗闇避難体験を行い、真っ暗の中での移動の怖さ、非常灯の明かりがあるだけで周りが判断できるのには驚いた。

実際体験することにより、学ぶことが多い。

東南海地震が起きるのではないかと予想されている浜松市も、多くの市民の人が実際体験できる施設の必要性を感じた。

自由民主党浜松 C 班視察報告書

辻村 公子

視察日程 令和 7 年 1 月 28 日（火）～29 日（水）

視察先 奈良県吉野郡下市町 下市町役場・KITO

堺市 大阪府堺市総合防災センター

視察事項 ・廃校活用・官民連携・ファシリティマネジメント地域づくりの取組について K I T O 現地視察

・災害時本当に必要とされる意識と技術について施設内見学

視察日 令和 7 年 1 月 28 日（火）

視察地 下市町役場 地域づくり推進課

奈良県吉野郡下市町大字下市 1960 番地

『K I T O』

奈良県吉野郡下市町善城 664-1

視察の顛末

奈良県のほぼ中心に位置している。人口 4,000 人の下市町。

小中一貫義務教育学校「下市あきつ学園」の建設により小学校・中学校が空き校舎となることから、2つの校舎の利活用について役場内、全職員の約 2 割をメンバーとし、ファシリティマネジメントプロジェクトチーム（部局横断型・人事異動に影響されない・施設整備まで実施するチーム）を立ち上げ、事業者の決定に至った。空き校舎を賑わい拠点として事業者と連携したまちづくりへの進展、にぎわい拠点が誕生する中で産・学・官・地域が連携し、下市町全体が賑わい創出に取り組む「下市町賑わい創出協議会」が設立された。

「KITO」を運営する民間企業のパルグループは創立 50 周年を迎えるアパレル会社。創業者の■■■■氏が下市生まれということもあり、今回のプロジェクトの一つの大きな柱としての運営が始まった。パルグループは地域の小さなコンテンツの魅力に気づき、クリエイティブな価値観の楽しさを知り、伝え、たくさんの人がその場所を好きになる。そのための入り口としての、集客力、発信力のある『場所』を起点にあらゆる人がつながる、小さな経済圏をつくることをビジョンとして掲げている。

所 感

下市町役場では今回のプロジェクトの立ち上げから、現在の状況に至るまでの説明を受けた。人口 4,000 人余りの下市町は、隣町に通過する町と言われることが多かったようだが、そのイメージを覆すため、今回の事業を行い地域ぐるみで町の活性化に動き出した。下市町『元気印集落事業』では将来をイメージしながら住民が自ら考え行動する事を応援する事業を立ち上げ、各地域の自治会の集会所をゲストハウスやビザハウスなど有効な活用を始めた。自治会がこのような事業を行うことは全国初の取組であるということから小規模の自治会ならではのアイデアが素晴らしく感じたが、一番大きいのはやはり地域力である。『継続することを目指す事』と『地域に住んでいる人が地域の良さを活かすという事』を大切に、行政と地域住民が一体となって取組んでいることが地域力の向上につながっていると感じた。

人口が少ないからこそ知恵を出し合い、地域の維持やコミュニティの継続、移住や定住など地域の歴史、文化、コミュニティ等を次の世代にバトンタッチができるような体制づくりは、人口や地域に関係なく必要な事である。

また令和 2 年に立ち上がったファシリティ・マネジメント・プロジェクトチームでは様々な知識、考えを持ったメンバーが集まり、同じ方向を目指し、スピード感ある意思決定により未活用の施設が今現在の活用に至っているのは、各分野のスペシャリストの意見が集約した結果である。

『KITO』も現地視察をさせていただき、木のぬくもりたっぷりの校舎で、季節に合わせた様々なイベントが開催されて、特に休日は多くの人でにぎわっているようだ。

本市としても人口減少に伴い、今後廃校になる学校や幼稚園 利用されなくなった施設なども増えてくるということも考えなければならない。下市町のように民間の事業者へのサウンディング調査など利活用の方法なども考え、にぎわいの拠点とするまちづくりが出来るような取り組みも今後の課題として考えなければならない。

視察日	令和7年1月29日(水)
視察地	堺市総合防災センター
	大阪市堺市美原区阿弥 129-4

視察の顚末

全国各地で集中豪雨や台風などの自然災害が多発し、堺市においても南海トラフ巨大地震や上町断層帯地震等の大災害の発生が懸念される中、堺市の防災に関する拠点として、自助・共助・公助の連携によって地域の防災力向上を図り、災害に強い都市形成を推進することを目的として整備された。堺市総合防災センターは一般向けの体験学習では令和6年度は6万人を超える来場者があり、地域防災力の向上のために大きな役割を発揮するとともに、消防署も併設され、消防士の本格的な訓練場としても活用されている。実火災訓練室を始め震災救助訓練場、水深8mの浸水プールでの水難訓練などの施設も設置されており、実働に近い現場の施設として全国各地からの消防士の訓練も行われている。

所 感

前回の視察先である伝承館では東北の震災の映像や被災した展示物に大きな衝撃を受けた。前回の視察に引き続き、今回も防災や減災について考えるいい機会となった。ここ数年毎年日本各地で起こっている地震、規模は様々であるが、能登の震災においては復旧にかなりの時間がかかっている。いつ起こるかわからない災害に私たちはどのように対応すべきか。この施設を子どもから大

人まで体験することで、災害の特性についても学ぶことができ、一人一人の防災力の向上につながる。また令和6年度の来館者数は6万人を超えるという。来館者の内訳として、小中学校が3割、自治会や自主防災組織が1割、福祉施設が1割、企業が1割そして個人利用が3割ほどと個人で利用される人が多いのが意外であった。本格的な設備が完備されているが、子どもたちのためのパネルを使ったクイズなどもあり、小さなお子様でも興味が持てるような工夫もされている。本市でも各地域において避難訓練や防災訓練は常に行っているが、このような施設での体験を合わせてできると、さらに防災に対してもっと意識できるようになる。

最後に見学させてもらった備蓄倉庫はかなり充実した空間であった。災害時に何台ものトラックが横づけでき備蓄倉庫から食料を運び出せるようになっており、また雨の日は消防士が訓練もできる設備もあり、備蓄倉庫が有効に使われている。備蓄品もどこに何があるか一目で分かるようにもなっており、フォークリフトも自由に走らせるスペースもある。本市にも拠点となるこのような備蓄倉庫があると支援もスムーズに行えるのではないか。災害時を想定した備蓄品もしっかりと備え、市民が安心して避難生活ができる対策を今一度考えなければならない。

会派視察

■令和7年1月28日 「廃校活用・官民連携・ファシリティマネジメント(FM)・地域づくりの取り組みについて」 ～奈良県吉野郡下市町

本市でも中山間地の廃校や閉鎖施設の有効利用について公募型プロポーザル方式による募集を行っており遊休資産の利活用が課題となっている。全国においても少子化に伴う児童生徒数の減少等により、全国では毎年約450校程度の廃校施設が生じているとのことであり。廃校施設は地方公共団体にとって貴重な財産であることから文部科学省でも「みんなの廃校プロジェクト」として、全国の活用事例の紹介や支援制度の紹介等を行っている。今回、下市町での廃校をリノベーションした複合型商業施設などの取り組みについて視察した。



奈良県吉野郡下市町は、奈良県の中央部に位置し、大阪まで電車で1時間の距離にある。面積は61,99k㎡で8割が森林を占め自然豊かな地域で人口は4,487人(R6.7)で昭和39年のピークには15,000人が

いた。平安時代のころから吉野の入り口として栄えており、市が立ち吉野地方の主要商業地として栄えていた。また、吉野杉・檜の産地で林業が盛んであり、それらを活用した割りばしや三宝の産地となっている。地域づくり推進課の松原氏から「下市町のファシリティマネジメントと賑わい創出」について説明を頂いた。



移住定住を促進し地域の文化を守るための施策を実施してきた。自治会の運営により集会所を利用したゲストハウスも全国初めての施策である。草谷地区のゲストハウス「風の谷」では、昔暮らしを楽しめる宿として、かまどを利用した

り薪の風呂などが楽しめる。地域資源を活かしたゲストハウスもあり、地元食材を使ったビザハウスやハーブを使ったハーブティーなどの生産も行われている。交流やコミュニティづくりなど地域力の向上を目的に行っており、町は運営費の補助は行わず初期費用やプロモーションなどの支援を行ない継続することを目指している。廃校舎などの施設利用について都市計画法など規制が厳しい。令和2年にFMプロジェクトチームを立ち上げ、財政や教育、建築土木など様々な職種の18人の若手職員が参加し、施設の活用方法などを検討してきた。旧秋野小学校では地域おこし協力隊の二人が別々に木工の拠点として工房を運営し、割りばし製造や家具製造を行っている。旧広橋小学校では、無償貸し付けにより移住してきた方がゲストハウスとして利用し、ワークショップや寄席の開催など活動を行っている。元銀行の支店建物ではコープの宅配や暮らしを支える拠点としてコミュニティづくりの拠点として活用されている。また、小中一貫校の下市あかつき学園の整備が行われ、小・中学校の2校が廃校となった。サウンディング型市場調査を実施し活用案を募集、公募型プロポーザルの選考により事業者を選定し利活用が進められた。下市中学校は、高齢者も含めIT力の向上をはじめとするDX施設として整備する方針で事業者の募集を行った。その結果、リングロー(株)が事業者に決定し、下市集学校としてIT活用した地域交流の拠点として整備され事業が行われている。旧下市南小学校は、観光客の誘引と新たな来訪者を呼び込む拠点として整備する方針で事業者の募集を行った。その結果、(株)バルが事業者に決定し、「KITO」としてショップやカフェなど体験型複合施設として整備され、地域資源を活かしたオリジナルな商品開発にも力を入れている。

整備にあたって、国交省の社会資本整備交付金を活用し空き家活用として補助金メニューを活用した。事業主体を自治体にすると国費と自治体が1/2づつ負担となるが民間主体の場合は1/3、自治体1/3、民間1/3の負担となり(株)バルの場合は後者を選択し事業を行った。



町の後方支援として町有林を活用した交流事業が行われ、町有林に隣接する「KITO」は吉野杉の製品活用に積極的であり下市スモールフォレストとしてトレッキングしながら竹や広葉樹、針葉樹に触れ芸術作品が並ぶ森を創り満足度の控除に繋げている。

平成28年から休館していた下市町アメニティセンターは、令和3年5月にサウンディング調査を行い感事地域交流を促進する拠点施設として整備する方針が決定され、地域食堂や地域産品の販売またリモートワークスペースとして事業が行われている。

旧阿知賀小学校では、市街化調整区域内にある施設として課題もある中、農福連携によるフルーツを活用した交流・農業振興の拠点として事業者が決まり、イチゴや果樹の農福連携によるフルーツガーデンやBBQ、ふれあい動物園として令和7年度オープンを目指し事業が進められている。

こうした利用している施設を「賑わい拠点」と呼び、この拠点を核として下市町の賑わいづくりを行っており、昨年5月にオール下市で「下市町賑わい創出協議会」を設立し、お互い連携し賑わいづくりを目指し活動している。協議会に「賑わい創出コーディネーター」が置かれ、賑わい創出に向けた取り組みの企画立案や実行に取り組んでいる。「関係人口を増やし、更に身近にかんじる町へ」をテーマにオール下市でにぎわい創出に向けた取り組みを行っており、SNSでも積極的に発信している。

この後、(株)バルが「KITO」としてショップやカフェなど体験型複合施設として事業を行っている旧下市南小学校に伺い説明を聞き、内部を案内頂いた。「KITO」の名称には「木と共にきっと出会える」という意味が込められている。

「木と共にある下市町の暮らし」、「ここに来たらきっと何かに出会える」という意味が込められている。事業者の(株)バルは、大阪市に本社がありアパレルから生活雑貨などを扱い、グループ全体で売上高1600億円、ブランド数が48ブランド、従業員数6060名、店舗数954店を誇る。創業者の■■■■氏が下市町出身でありバルグループと下市町がつながりを持っている。事業開始にあたってタウンミーティングを開催し、下市町はどんな街か、施設にどのような役割を求めるか等々ヒアリングを行った。下市町は通り過ぎる町であり寄ってもらえる施設が欲しいとの意見があり、下市に人を呼び込む「下市に来たくなる理由」を創ることがミッションとして捉え、30~40代の女性で家族がいる層をコアターゲットに絞った。

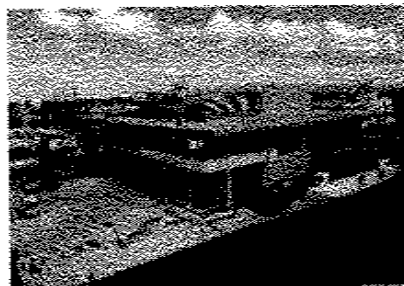


込んだ。衣食住遊働学健の複合型所業施設をコンセプトに置き整備を行った。吉野杉など地元産木材を使った館内を案内頂き、木と触れ合えるウッドパークとして活用されている体育館、自家醸造のクラフトビール、地産地消のレストラン、ワークショップなど体験できる旧理科室、工芸品や作品の展示コーナー、地元農家が作った野菜や割りばしなど木工品地元産品が買えるマルシェを視察した。

遊休施設の利活用について、役所の組織の縦割りの弊害、法律や補助金など規制の壁を打ち破るため庁内の若手によるFMプロジェクトチームにより既成概念にとらわれない活用を検討し町長以下執行部がスピード感ある意思決定を下す体制は小さな町だからできるとはいえ実績を上げており素晴らしいと感じる。説明頂いた■■■■氏をはじめ人材も重要な点であり、地域と民間そして行政との連携や協働もできている。運営においても賑わい拠点をはじめあらゆる団体との連携などオール下市町で取り組む賑わい創出協議会の活動も盛んであり参考となった。地域資源を活かした地方創生に向けて参考となるものであった。

■令和7年1月29日 「真・体験により気づき、学び、実践を通し、災害時本当に必要とされる意識と技術について」 ～堺市総合防災センター～

南海トラフ地震の発生が、今後30年以内に7～80%の確率で発生することが想定をされており、毎年のように集中豪雨等で自然さてがいが頻発し防災減災への対策や市民の意識向上は急務となっている。本市でも政令市移行以前に消防防災総合訓練センターの建設は、大規模かつ複雑多様化する災害へ対応や消防職・団員や自主防災隊の人材の育成に必要であり市民の防火防災意識の高揚に向けても必要な施設として検討されたことがある。今回、政令市である堺市が整備した総合防災センターの内容や役割等を見聞し防災減災対策の充実強化に繋げるため視察した。



堺市総合防災センターは、2022年に美原区阿弥に建設され、堺市の防災拠点として、地域防災力の向上を図り、大規模災害に対する緊急の対応や政令指定都市として必要とされる災害対応力の強化を目的に造られた。センター建設は政令市に移行するにあたって新市建設計画に搭載された事業であり、17年を経て建設された。平成27年に土地を取得し、29年に計画を策定し工事に着手され、もともと溜池であつた造成工事が

行われ、令和2年から建築工事が始まり令和3年10月に竣工し、令和4年4月1日から運用が始まった。美原区は旧美原町と堺市が平成17年に合併してできた区である。建設場所の選定あたっては、地質や津波被害など南海トラフ地震のリスクが少なく消防本部から離れていて被災リスクを分散でき緊急交通路が確保されている点で決定された。事業方針として「地域の連携強化・地域防災を担う人材の育成」「消防防災力の強化」「円滑な受援体制の強化」3点が挙げられている。総工費は、54億円を掛けている。維持管理には年間7000万円掛かるとのことである。

また、消防本部が被災した場合の代替施設としての役割もある。大規模災害時に関係各機関から応援隊が終結し活動拠点となるよう計画されており、非常時の発電機能は72時間補給なしに機能維持できるようになっている。

敷地面積 18,899.08 m²、建築面積約 4300 m²、延べ床面積約 7,800 m²があり、敷地内には5つの施設と訓練場がある。

【防災啓発施設】RC・S造2階建て延べ1682.36 m²

体験学習施設がある。

【水難救助訓練棟】RC造3階建て延べ584.80 m²

水難救助訓練が実施でき、水深8mの潜水プール、屋外プールがある。

【総合訓練棟】RC造地下2階地上6階建て延べ1721.65 m²、

燃焼実験室や訓練用エレベーター、煙中熱気訓練実験室などがあり実火災訓練や煙中・熱気訓練など高度な訓練を実施できる。

【災害活動支援棟】S造2階建て延べ2882.42 m²

平時は常駐隊の施設、備蓄倉庫であり、災害時は備蓄物資の配送拠点、緊急消防援助隊の集結場所となる。

【救助訓練棟】S造6階建て延べ911.70 m²

ロープ渡過やはしご登はんなどの訓練場所

あと、放水訓練や消防団の操法訓練などを行う屋外訓練場がある。

体験参加やイベントなど来館者は、令和4年度で49,176人、令和5年度で57,868人を数え、令和6年度前半で3万人を超え、6万人以上が予想される。

防災啓発への取り組みとして

- ・真・体験コース(1時間30分) 映像による学習、地震体験、消火体験など
- ・災害種別コース(1時間15分) 水害、火災、救出救助、避難所生活の各コースがある。
- ・その他コース(55分) キッズコース、要支援者避難コース
- ・団体コース(2時間) 一般、学生、キッズ団体の各コースがある。

環境に配慮した施設となっており、訓練で使用した水の循環利用、排煙・排水処理設備などがある。

この後、各建物内など施設内を懇切丁寧にご案内頂き解説し、体験もさせて頂いた。

南海トラフ地震や毎年のように発生する豪雨災害を始め、どんな災害がいつどこで発生するか分からない時代である。自分の命は自分で守り地域でお互いに助け合う自助・共助が重要であり、こうした訓練を実際に体験できる施設は必要である。視察当日に関

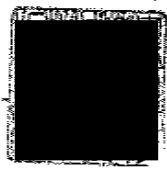
西地区の消防隊が集結し大規模な救助訓練が行われており、今日、災害の内容も複雑多様化しており消防技術の向上や体得、各隊の連携はより一層大事になっており、総合的に各災害に応じた訓練ができる場所であり消防防災力の強化に大きく繋がるものである。



花井和夫

(様式6)

A0105

旅 費 支 払 証 明 書																						
出張年月日	令和 7 年 1 月 25 日 (土) 13:30~17:00																					
出張先 (目的)	静岡市 常葉大学 瀬名キャンパス 【常葉大学造形学部・教育学部】 浜松市出身学生の卒業後の進路調査																					
出張者氏名	藤田 典良																					
旅 費 額 内 訳																						
項 目	金 額	備 考																				
交通費	4,736 円	自家用車利用 浜松市中央区 - 常葉大学 往復 @37 円×128km ※地理的、時間的要因のため自家用車使用																				
"	2,360 円	有料道路利用料 浜松IC - 焼津IC (往復) (ETC @1,180 円×2)																				
日 当	1,500 円	@ 1,500 円 × 1日 × 1名分																				
合 計	8,596 円																					
<table border="1" style="margin: auto; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td style="padding: 5px;">金 額</td> <td style="padding: 5px;"></td> <td style="padding: 5px;">百</td> <td style="padding: 5px;">拾</td> <td style="padding: 5px;">万</td> <td style="padding: 5px;">千</td> <td style="padding: 5px;">百</td> <td style="padding: 5px;">拾</td> <td style="padding: 5px;">円</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;"></td> <td style="padding: 5px;"></td> <td style="padding: 5px;"></td> <td style="padding: 5px;"></td> <td style="padding: 5px;">¥</td> <td style="padding: 5px;">8</td> <td style="padding: 5px;">5</td> <td style="padding: 5px;">9</td> <td style="padding: 5px;">6</td> </tr> </table> 上記の金額を政務活動費として支払ったことを証明します。 令和 7 年 1 月 28 日 代 表 者 会 長 倉田 清 					金 額		百	拾	万	千	百	拾	円					¥	8	5	9	6
金 額		百	拾	万	千	百	拾	円														
				¥	8	5	9	6														
〈詳細〉 有料道路市有料 利用証明書 別紙添付  ※自家用車使用 東名高速道路 浜松市中央区自宅 ——— 浜松 IC ——— 焼津 IC ——— 常葉大学 ——— 焼津 IC ——— 浜松 IC ——— 自宅																						

ご利用ありがとうございます。

利用証明書



料金所(自) 浜松
料金所(至) 焼津
25年 1月25日 12時47分
割引前料金 ¥1,690-
割引△ ¥510-
通行料金 ¥1,180-

(ETC利用) 車種 1

※通行料金の消費税率は10%です。
※通行料金は確定しておりません。

取扱番号

※本利用規約若しくはETC利用協定サービスで印字されたものです。

019

ご利用ありがとうございます。

利用証明書



料金所(自) 焼津
料金所(至) 浜松
25年 1月25日 17時39分
割引前料金 ¥1,690-
割引△ ¥510-
通行料金 ¥1,180-

(ETC利用) 車種 1

※通行料金の消費税率は10%です。
※通行料金は確定しておりません。

取扱番号

※本利用規約若しくはETC利用協定サービスで印字されたものです。

019

(様式8)

令和 7年 1月 24日

会派名 浜松市議会 自由民主党浜松
代表者 会長 倉田 清一 様

申請議員 藤田 典良

出張届

下記により、政務活動のため、出張することになりましたので届け出ます。

記

1 出張者

藤田 典良

2 期間及び出張先

令和 7年 1月 25日(土) 1日

静岡市内 常葉大学造形学部 瀬名キャンパス

3 目的

常葉大学教育学部または造形学部 に在籍する浜松市出身学生の、卒業後の進路について昨年に引き続き継続して調査する。

視察依頼書送付願

令和 7年 1月 24日

浜松市議会議長 鳥井 徳孝 様

会 派 名 浜松市議会 自由民主党浜松
代表者氏名 倉田 清一 ㊞

上記のとおり、所属議員が政務活動のため、出張することになりましたので、視察先あての視察依頼書の送付をお願いします。

(様式 11)

A0105

令和 7 年 1 月 27 日提出	
(あて先) 会派名 浜松市議会 自由民主党浜松 代表者 会長 倉田 清一 様	
報 告 書	
出張年月日	令和 7 年 1 月 25 日 (土)
出張先	静岡県葵区瀬名一丁目 22-1 常葉大学 瀬名キャンパス
出張の理由	浜松市出身の常葉大学教育学部・造形学部在学学生及び既卒生の卒業後の進路についての調査
出張者氏名印	藤田 典良 
(出張の顚末)	
別紙 報告書の通り	
(備考)	

出張報告書

自由民主党浜松
藤田 典良

- 出張日 令和7年1月25日(土)
時間 13:30～17:00
出張先 常葉大学:瀬名キャンパス
静岡県葵区瀬名一丁目22
(教育学部・造形学部在籍学生、教育学部・造形学部既卒生)
- 対応者 常葉大学造形学部長 [] 教授
常葉大学教育学部 [] 教授
常葉大学造形学部 [] 講師
- 調査内容 常葉大学教育学部または造形学部にて在籍する浜松市出身学生の、卒業後の進路について昨年に引き続き継続して調査する。
- 結果 浜松市を含む県西部地区からの入学生が減少傾向にあり、浜松市の教員採用試験を受験する学生が年々減少傾向にある。
常葉大学教育学部や造形学部にて在籍する学生で、教職を希望する学生がどのような視点で採用試験を受験する市町を選んでいるのか意見を聞いた。
政令市である浜松市は、市独自で採用試験を行っており、教職員の給料は市費負担となっている。現状としては静岡県採用の方が、給料が高く、静岡県教員採用試験を受けようかと考えている学生がいることが分かった。
浜松市の教職を希望する者は、体育科の割合が多く、前年度の倍率は23倍となっている。同じ常葉大学であれば、瀬名キャンパスや草薙キャンパスではなく、運動系部活動に注力している浜松キャンパスを選ぶ学生が多いのではないかという意見であった。また、教職の授業を履修している学生の意見として、先生を目指したいが仕事内容と給料のバランスがとれていないというイメージが先行していることに加え、採用されて間もなく体調不良を理由に休職したり退職したりする先輩の話聞き、不安が大きく教職への道を断念する学生の声も聴かれた。
- 課題 浜松市の教員の給料を、静岡県の教員の給料と同額まで引き上げたい。
教職員の働き方改革の具体化と推進。
教員採用試験の在り方の検討。
常葉大学浜松キャンパスでの学生確保(人口流出を食い止める)の施策。
- 視察行程 自宅(浜松市中央区鴨江一丁目)——常葉大学:瀬名キャンパス(往復)
交通費:7,096 円(自家用車使)
交通費内訳:128km×37 円=4,736 円+高速料金:2,360 円(浜松焼津間往復)
※11:30まで浜松市私立幼稚園協会との教育懇談会が行われていたため、JR草薙駅から静鉄バスの乗り換え、瀬名キャンパスまでの連絡時間を考慮し、13:30に間に合うよう、自家用車と高速道路を使用した。また、帰路についても次の予定に間に合うよう高速道路を使用した。

A1201

A0109

旅 費 支 払 証 明 書

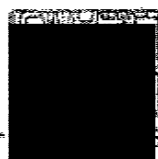
出張年月日	令和6年12月22日(日)～令和6年12月28日(土)7日間			
出張先(目的)	インド【アーメダバード市・デリー市・ハイデラバード市】			
出張者氏名	柳川樹一郎	瀧美 誠	松本 康夫	
	小野田康弘	鈴木 裕之		(計5名)
旅 費 額 内 訳				
項 目	金 額	備 考		
国内交通費	34,500 円	12/22・28 浜松西IC-中部新空港 E-wingバス往復 @6,600円×5名 12/22-28 駐車場代 @500円×3台分=1,500円 / 遠州鉄道(株)		
中部空港 施設使用料	16,000 円	中部空港使用料・保安サービス料 @3,200円×5名分		
航空運賃	2,012,000 円	中部国際～シンガポール～インド～シンガポール～中部国際 @357,200円×5名 インド国内 アーメダバード～デリー～ハイデラバード空港運賃 @45,200円×3名分		
"	90,000 円	航空券手配手数料 @18,000円×5名分		
現地空港税	72,500 円	(シンガポール@10,100円+インド4,400円)×5名分		
視察・交通費	158,582 円	12/22-25 アーメダバード 79,063円・12/25 デリー 20,394円 12/25-27 ハイデラバード 59,125円 【借り上げバス代 5名分】		
現地ガイド 通訳費	4,400 円	音声ガイドシステム @880円×5名分=4,400円		
宿泊費	253,500 円	12/22・23・24 3日間(@16,900円×3日間)実費@50,700円×5名分		
"	169,000 円	12/25・26 2日間(@16,900円×2日間)実費 @33,800円×5名分		
日 当	150,600 円	日当(内)(@5,100円×3日間+@2,550円×4日間)=@25,500円 12/27 夕食代 @7,700円×0.6=@4,620円 ∴ 30,120円×5名		
保険料	64,480 円	12/16 保険料 A6タイプ@11,400円×3名分+E3タイプ@15,140円×2名分/遠州鉄道(株)		
雑 費	107,500 円	インド査証 @21,500円×5名分		
"	1,100 円	阪急阪神ビジネストラベル社請求分 / ①旅航費+②現地バス借上げ費・通訳機器代 上記①12/9+②1/21 振込手数料 / 静岡銀行 浜松営業部 【@550円×2回分】		
合 計	3,134,162 円	12/2・18支払 遠州鉄道社 33,000円+64,480円・12/9・1/21振込手数料 550円+550円 静岡銀行 12/9・1/21 振込 阪急阪神ビジネストラベル社 2,720,500円+162,982円		

金 額	¥	3	1	3	4	1	6	2	円
-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

上記の金額を支払ったことを証明します。

令和7年1月21日

代表者 会長 倉田 清一



(詳細) ※E-wing往復バス料金 / 遠州鉄道社【12/2支払】

尚、国内交通費を新幹線を利用せず、往復バス利用にすることにより安価の運賃支出の為、視察期間中の西インターICバス停 駐車3台分の駐車料金をも政務活動費として支出を認める。

■インド視察におけるホテル宿泊費について

・出張中に必要となる調整や、突発的なトラブルによるリスク等を踏まえ、静岡県ミッション団と同じホテルへ宿泊。

同施設に宿泊しなければ業務が遂行できない為、当該施設への指定宿泊とし、請求明細書満額を宿泊料として請求する。

海外出張届出書

令和 6 年 11 月 8 日

浜松市議会 議長 鳥井 徳孝 様

会 派 名 浜松市議会 自由民主党 浜松

代表者氏名 会長 倉田 清一

(署名又は記名押印をしてください。)

下記により、所属議員が会派の政務活動として、海外出張することになりましたので届け出ます。

記

1 出張期間

令和 6 年 12 月 22 日 (日) から 令和 6 年 12 月 28 日 (土) まで

2 出張先

インド共和国【アーメダバード市・ハイデラバード市】

3 出張者

柳川樹一郎 議員、 渥美 誠 議員、 松本 康夫 議員
小野田康弘 議員、 鈴木 裕之 議員

(計 5 名)

4 目的

12/23(月) スズキ・モーター・グジャラート社 訪問
マンダル工業団地, 国際金融技術都市 (GIFT シティ) 視察
12/24(火) アーメダバード市政府訪問/グジャラート州政府 訪問
アーメダバード経営者協会 (ジャパンセンター) 訪問
12/25(水) 全日本空輸 (株) デリー支店訪問
12/26(木) インド工科大学ハイデラバード校との覚書締結式
スズキイノベーションセンター, アップルパームスタジアム視察

5 実施の方法

成長著しいインドにおいて、当市地域企業や教育機関間の交流は、産業振興や人材確保、また、教員や学生の交換留学、共同研究・開発など、ビジネス展開だけではなく、教育・文化・スポーツあらゆる分野での発展に不可欠なものと捉えている。事前勉強会を経て、インド政府との協力関係の構築・現地調査を目的とし、海外視察実施を会派総会にて決定した。

視察行程、内容、料金等を鑑み、阪急阪神ビジネストラベル社にて渡航する。

(様式2)

団体名 浜松市議会 自由民主党浜松

提出日

海外渡航の概要

1 渡航者

別添1のとおり

2 渡航目的

本市と現地政府との協力関係構築のため、またインド高度人材受け入れのため企業・教育機関間交流の更なる推進と産業振興などの最新事情について視察調査し、今後の市事業推進や施策立案に役立てたい。

3 日程

別添2のとおり。

4 渡航先国及び訪問予定政府関係機関等

インド共和国 【グジャラード州政府・アーメダバード市政府】

5 便宜供与依頼事項

(1) 訪問約束の取付け

12/23 (月) スズキ・モーター・グジャラート社 訪問

マンダル工業団地 , 国際金融技術都市 (GIFT シティ) 視察

12/24 (火) アーメダバード市政府 (市長表敬訪問)

グジャラード州政府 (州首相表敬訪問・文書交換)

アーメダバード経営者協会 (ジャパンセンター) 訪問

現地関係者とのネットワーク構築会

12/25 (水) 全日本空輸 (株) デリー事務所 訪問

12/26 (木) インド工科大学ハイデラバード校覚書締結式

スズキイノベーションセンター , アップパールスタジアム 視察

(2) 各国事情の説明

なし

(3) 通訳のあつせん

6 旅券の種類

一般数次旅券 インドビザ申請

7 旅行代理店

店 名 株式会社 阪急阪神ビジネストラベル MICE 営業本部
住 所 大阪市北区梅田2丁目5番25号 ハービス OSAKA 内
担 当 者 XXXXXXXXXX
電話番号 03-6745-7680
ファクス

8 海外渡航事務担当者

所 属 浜松市役所 浜松市議会 自由民主党浜松
氏 名 鈴木 裕之
電話番号 053-457-2495
ファクス 053-457-2494
アドレス

9 その他

「たびレジ」へ登録済み

(様式3)

渡 航 者

	職 名	氏 名	読み仮名	連絡責任者	備考
①	浜松市議会議員 (city council member)	柳川 樹一郎 Yanagawa Juichiro	やながわ じゅいちろう		
②	浜松市議会議員 (city council member)	渥美 誠 Atsumi Makoto	あつみ まこと		
③	浜松市議会議員 (city council member)	松本 康夫 Matsumoto Yasuo	まつもと やすお		
④	浜松市議会議員 (city council member)	小野田 康弘 Onoda Yasuhiro	おのだ やすひろ		
⑤	浜松市議会議員 (city council member)	鈴木 裕之 Suzuki Hiroyuki	すずき ひろゆき	○	
⑥					
⑦					
⑧					
⑨					
⑩					

【浜松市団】12月インド渡航概要

浜松市産業部産業振興課

1. 浜松市団概要

■ 参加者属性：浜松市長、浜松市議会議長、浜松商工会議所会頭・副会頭産業支援機関他

2. 行程（案）

DAY	日付	曜日	場所	内容
1	12/22	日	日本→ アーメダバード	10:20 中部国際空港発【SQ671】 16:15 シンガポール着 18:40 シンガポール発【SQ504】 21:50 アーメダバード着 ＜アーメダバード泊＞
2	12/23	月	アーメダバード	・スズキ・モーター・グジャラート社訪問 ・マンダル工業団地視察 ・国際金融技術都市（GIFT シティ） ネクスト・バーラト・ベンチャーズ 開所イベント（夕食） ＜アーメダバード泊＞
3	12/24	火	アーメダバード	・アーメダバード市長表敬訪問（浜松市団） ・グジャラート州政府 （州首相/市長表敬訪問・文書交換） ・州首相主催昼食会 ・アーメダバード経営者協会（ジャパンセンター） 訪問 ・現地関係者とのネットワーク構築会 ＜アーメダバード泊＞
4	12/25	水	アーメダバード→ デリー→ ハイデラバード	8:40 アーメダバード発【UK946】 10:30 デリー着 ・（11:30 アが確定） 全日本空輸デリー支店訪問（空港周辺ホテル） 14:45 デリー発【UK899】 17:00 ハイデラバード着 ＜ハイデラバード泊＞
5	12/26	木	ハイデラバード	11:00 インド工科大学ハイデラバード校との覚書 締結式 @IITH （昼食）IITH 学内ゲストハウス ※予定 （PM）・スズキイノベーションセンター視察 ・アップパールスタジアム視察 ＜ハイデラバード泊＞

6	12/27	金	ハイデラバード→ シンガポール	11:15 ハイデラバード発【SQ519】 18:30 シンガポール着
7	12/28	土	シンガポール→ 日本	1:20 シンガポール発【SQ672】 8:30 中部国際空港着

A1201-Q

B No. 623958

正収領

日 2 月 7 年 3 月 2 日


 100

金額	百	千	円
	0	3	000

工人日報

金込ド殺他
現振カ一相その

但 2017 年 12 月 23 日

上記の金額正に領収致しました。

内蔵

總金額

消費稅額

10% of the 1000

8800

非課税

不認從

E



客在館樓欄拈茶戲

〒430-8655 浜松市中区旭町12番地の1

登錄番号 T5080401000702



※社印、撥智印のないものは金額を訂正したものは無効です。

No. 082020125

請求書

103266-24111214

発行日 2024年11月29日



遠州鉄道株式会社

旅行業務



自由民主党浜松

様

営業第2グループ

〒430-8655 浜松市中央区旭町1-2-1

TEL 053-457-6470

担当者

FAX 053-457-6477

責任者

登録番号 T5080401000702

弊社をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。
下記の通りご請求申し上げますので、お支払い下さいますようお願い致します。

合計金額

¥33,000-

(消費税内訳) 明細別紙

10%対象 ¥33,000 (内税 ¥3,000)

(お支払いは銀行振込にてお願いいたします)

《取引銀行》

静岡銀行 浜松営業部 (普) 100240 《口座名》エンシュウ鉄道(株)トラベル部

★御入金(お振り込み)は1月末日までをお願い申し上げます。

★お振り込みは請求書宛名にてお願い申し上げます。

★振込手数料は、貴社(貴方)ご負担にてお願い申し上げます。

12/1

明細書

接

24111214
2024年11月29日

遠州鉄道株式会社

總發行所

TEL 053-457-6470
FAX 053-457-6477

担当所属 営業第2グループ

摘要

責任者

ご請求金額にご不審な点がありましたら
お手数ながら、ご連絡ください。

二、請求額

¥33.000

*は軽減税率対象項目

(お支払いは銀行振込にてお願いいたします)

《取引銀行》

静岡銀行 浜松営業部 (普) 100240 《口座名》エンビウサマウ(由)トラベ 妙子

●入金(お振り込み)は1月末日までにお願ひ申し上げます。

①/21 A0104
(1月支払分)

12月親展
国内交通費

12/22-28 馬場町

(500円) 3/14

領収書

※ 以下の金額は消費税10%を含むものとなります。
24年12月22日 05時31分 01号機

乗車代(10日迄)	1 枚	500 円
合計		500 円
お預り		500 円
お釣り		0 円

●ご利用ありがとうございました。
浜松西インターバスターミナル発行

遠州鉄道株式会社
登録番号 T5080401000702

領収書

※ 以下の金額は消費税10%を含むものとなります。
24年12月22日 05時30分 01号機

乗車代(10日迄)	1 枚	500 円
合計		500 円
お預り	1,000 円	
お釣り		500 円

●ご利用ありがとうございました。
浜松西インターバスターミナル発行

遠州鉄道株式会社
登録番号 T5080401000702

領収書

※ 以下の金額は消費税10%を含むものとなります。
24年12月22日 05時19分 01号機

乗車代(10日迄)	1 枚	500 円
合計		500 円
お預り		500 円
お釣り		0 円

●ご利用ありがとうございました。
浜松西インターバスターミナル発行

遠州鉄道株式会社
登録番号 T5080401000702

請求書

発行日: 2024年12月06日

請求書NO: [REDACTED]

登録番号: T4120001126778

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル

〒103-0011

東京都中央区

日本橋大伝馬町10-8

MICE営業部

担当: 田辺 正徳

TEL: 03-6746-7387

FAX: 03-6746-7381

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

柳川 樹一郎 様 渡美 誠 様 松本 康夫 様
小野田 康弘 様 鈴木 裕之 様

いつも格別のお引き立てを賜り誠にありがとうございます。
下記の通りご請求申し上げます。
尚、振込手数料はお客様にてご負担いただきますようお願い致します。

ご請求金額	¥2,720,500--
お支払い期限日	2024年12月20日
振込先	三菱UFJ/新橋駅前
	普通預金 3578805
	(株)阪急阪神ビジネスホテル

お問合せ番号: 0934948187

出発日: 2024年12月22日 (日)

責任者印

担当者印

令和6年度 静岡県インド訪問団・浜松市団

請求明細			利用日	単価 (円)	数	小計 (円)
航空券代金	@416,000円x5名様 (別紙明細参照)【非課税】	外		2,084,000	1	2,084,000
航空券代金	@21,200円x5名様 (別紙明細参照)【税込・10%】			106,000	1	106,000
宿泊代金	@422,500円x10名様 (別紙明細参照)【非課税】	外		422,500	1	422,500
インド査証料	@21,500円x5名様 (別紙明細参照)【非課税】	外		107,500	1	107,500
消費税			金額(税込)		内消費税額	
10%対象			106,000		9,538	
軽減税率8%対象	※		0		0	
課税対象外	外		2,614,500		0	
合計金額			(A)		2,720,500	
既入金額			(B)		0	
今回請求額			(A-B)		2,720,500	

お問合せNo. : 0934948187

ReceiptNo. : 7723 - 0000384

発行日 : 2025年01月23日

RECEIPT
領 収 書

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

¥ 2,720,500-

金種 : 振込

THE ABOVE MENTIONED AMOUNT HAS BEEN DULY RECEIVED
上記のお振込金額正に領収致しました。

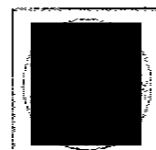
ご旅行代金として
令和6年度静岡県インド訪問団・浜松市団
2024年12月22日～12月28日
別紙、領収書明細書のとおり

5名様
柳川樹一郎様 渥美誠様 松本康夫様
小野田康弘様 鈴木裕之様

HANKYU HANSHIN BUSINESS TRAVEL

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル MICE営業部

〒103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトミビル5階



発行担当者 田辺 正徳

【領収印無きもの及び金額訂正したものは無効です】

領収書明細書【国際航空券・宿泊代金・査証代】

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル
 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトビル5階
 TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
 代表取締役社長 福澤 太郎
 発行責任者: MICE営業部
 担当: MICE営業部
 旅行業務取扱管理者:

・柳川 樹一郎 様

責任者印	担当者印

●国際線区間: SQ(シンガポール航空) 利用

項目	日付	利用区間・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考
航空券代金	12/22-12/28	SQ 航空運賃	357,200	1	357,200	全区間エコノミークラス SQ(国際線) 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 燃油サーチャージ	0	1	0	燃油サーチャージ(※) 航空運賃に含む (※) 燃油料は変動します 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 航空保険特別料金	0	1	0	航空保険特別料金 航空運賃に含む 中部～シンガポール～アムステルダム//ハイデラバード～シンガポール～中部 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 空港施設使用料・保安サービス料	10,100	1	10,100	各空港施設使用料・保安サービス料 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 中部空港施設使用料・保安サービス料	3,200	1	3,200	中部空港施設使用料・保安サービス料 【税込・10%】
	12/22-12/28	AI 航空運賃	45,200	1	45,200	全区間エコノミークラス アムステルダム～デリー～ハイデラバード AI(インド国内線) 【非課税】
	12/22-12/28	AI 空港施設使用料・保安サービス料	4,400	1	4,400	各空港施設使用料・保安サービス料 【非課税】
	12/22-12/28	航空券手数料	18,000	1	18,000	航空券手配・発券手数料 SQ・AI航空券 【税込・10%】
	12/22-12/28	Hyatt Regency Ahmedabad	50,700	1	50,700	シングルユース・朝食付 3泊 【非課税】
	12/22-12/27	Le Meridien Hyderabad	33,800	1	33,800	シングルユース・朝食付 2泊 【非課税】
宿泊代 アムステルダム	12/22-12/27	インド査証費用	21,500	1	21,500	業務査証 【非課税】
宿泊代 ハイデラバード					0	
インド査証					0	
					0	
					0	
集計金額 <合計>					544,100 (円)	

○航空券スケジュール

12/22(日)	SQ671 中部 10:20 - シンガポール 16:15	エコノミークラス
12/22(日)	SQ504 シンガポール 18:40 - アムステルダム 21:50	エコノミークラス
12/25(水)	AI2946 アムステルダム 08:40 - デリー 10:30	エコノミークラス
12/25(水)	AI2878 デリー 17:35 - ハイデラバード 19:50	エコノミークラス
12/27(金)	SQ519 ハイデラバード 11:15 - シンガポール 18:30	エコノミークラス
12/28(土)	SQ672 シンガポール 01:20 - 中部 08:30	エコノミークラス

領収書明細書【国際航空券・宿泊代金・査証代】

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル
 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-6 タキトビル5階
 TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
 代表取締役社長 福澤 太郎
 発行責任者: MICE営業部
 担当者: MICE営業部
 旅行業務取扱管理者:

・通美 誠 様

責任者印	担当者印

●国際線区間: SQ(シンガポール航空)利用

項目	日付	利用区間・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考
航空券代金	12/22-12/28	SQ 航空運賃	357,200	1	357,200	全区間エコノミークラス
		中部～シンガポール～アームダバード//ハイデラバード～シンガポール～中部				SQ(国際線) 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 燃油サーチャージ	0	1	0	燃油サーチャージ(液) 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アームダバード//ハイデラバード～シンガポール～中部				(液) 着陸料は実額制です 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 航空保険特別料金	0	1	0	航空保険特別料金 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アームダバード//ハイデラバード～シンガポール～中部				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 現地空港税	10,100	1	10,100	各国空港税
		各国内空港税				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 中部空港施設使用料・保安サービス料	3,200	1	3,200	中部空港旅客施設使用料・保安サービス料
		中部空港旅客施設使用料・保安サービス料				【税込・10%】
航空券手数料	12/22-12/28	AI 航空運賃	45,200	1	45,200	全区間エコノミークラス
		アームダバード～デリー～ハイデラバード				AI(インド国内線) 【非課税】
	12/22-12/28	AI 現地空港税	4,400	1	4,400	各国内空港税
		各国内空港税				【非課税】
航空券手数料	12/22-12/28	航空券手数料	18,000	1	18,000	航空券手配・発券手数料
		SQ・AI航空券				【税込・10%】
宿泊代	12/22-12/25	Hyatt Regency Ahmedabad	50,700	1	50,700	シングルユース・朝食付
アームダバード		シングルユース・朝食付(1泊)18000円×3泊				3泊 【非課税】
宿泊代	12/25-12/27	Le Meridien Hyderabad	33,800	1	33,800	シングルユース・朝食付
ハイデラバード		シングルユース・朝食付(1泊)16900円×2泊				2泊 【非課税】
インド査証	12/22	インド査証費用	21,500	1	21,500	業務査証
		業務査証				【非課税】
					0	
					0	
					0	
領収金額 <合計>					544,100 (円)	

○航空券スケジュール

12/22(日)	SQ671 中部 10:20 - シンガポール 16:15	エコノミークラス
12/22(日)	SQ504 シンガポール 18:40 - アームダバード 21:50	エコノミークラス
12/25(水)	AI2946 アームダバード 08:40 - デリー 10:30	エコノミークラス
12/25(水)	AI2879 デリー 17:35 - ハイデラバード 19:50	エコノミークラス
12/27(金)	SQ519 ハイデラバード 11:15 - シンガポール 18:30	エコノミークラス
12/28(土)	SQ672 シンガポール 01:20 - 中部 08:30	エコノミークラス

2025年1月23日

領収書明細書【国際航空券・宿泊代金・査証代】

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

株式会社 緊急脱出ビジネスオペル
 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトビル3階
 TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
 代表取締役社長 福澤 太郎
 発行責任者: MICE営業部
 担当: MICE営業部
 旅行業務取扱管理者:

・松本 康夫 様

責任者印	担当印

●国際線区間: SQ(シンガポール航空) 利用

項目	日付	利用区間・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考
航空券代金	12/22-12/28	SQ 航空運賃	357,200	1	357,200	全席エコノミークラス
		中部～シンガポール～アムステルダム～ハイデルバート～シンガポール～中部				SQ(国際線) 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 燃油サーチャージ	0	1	0	燃油サーチャージ(派) 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アムステルダム～ハイデルバート～シンガポール～中部				(派) 燃油料は変動費です 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 航空保険特別料金	0	1	0	航空保険特別料金 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アムステルダム～ハイデルバート～シンガポール～中部				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 現地空港施設税	10,100	1	10,100	各国空港施設税
		各国空港施設税				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 中部空港施設使用料・保安サービス料	3,200	1	3,200	中部空港施設使用料・保安サービス料
		中部空港施設使用料・保安サービス料				【税込・10%】
航空券手数料	12/22-12/28	AI 航空運賃	45,200	1	45,200	全席エコノミークラス
		アムステルダム～デリー～ハイデルバート				AI(インド国内線) 【非課税】
	12/22-12/28	AI 現地空港施設税	4,400	1	4,400	各国空港施設税
		各国空港施設税				【非課税】
宿泊代	12/22-12/28	航空券手数料	18,000	1	18,000	航空券手配・発券手数料
		SQ・AI航空券				【税込・10%】
アムステルダム	12/22-12/28	Hyatt Regency Ahmedabad	50,700	1	50,700	シングルユース・朝食付
		シングルユース・朝食付(1泊)10000円×3泊				3泊 【非課税】
ハイデルバート	12/25-12/27	Le Meridien Hyderabad	33,800	1	33,800	シングルユース・朝食付
		シングルユース・朝食付(1泊)10000円×2泊				2泊 【非課税】
インド査証	12/22	インド査証費用	21,500	1	21,500	業務査証
		業務査証				【非課税】
					0	
					0	
					0	
領収金額 <合計>					544,100 (円)	

○航空券スケジュール

12/22(日)	SQ671 中部 10:20 - シンガポール 18:15	エコノミークラス
12/22(日)	SQ504 シンガポール 18:40 - アムステルダム 21:50	エコノミークラス
12/25(水)	AI2946 アムステルダム 08:40 - デリー 10:30	エコノミークラス
12/25(水)	AI2879 デリー 17:35 - ハイデルバート 19:50	エコノミークラス
12/27(金)	SQ519 ハイデルバート 11:15 - シンガポール 18:30	エコノミークラス
12/28(土)	SQ672 シンガポール 01:20 - 中部 08:30	エコノミークラス

2025年1月23日

領収書明細書【国際航空券・宿泊代金・査証代】

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

株式会社 緊急事態ビジネスサポート
 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトビル6階
 TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
 代表取締役社長 福澤 太郎
 発行責任者: MICE営業部
 担当者: MICE営業部
 旅行業務取扱管理者:

・小野田 康弘 様

責任者印	担当者印

●国際線区間: SQ(シンガポール航空) 利用

項目	日付	利用区間・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考
航空券代金	12/22-12/28	SQ 航空運賃	357,200	1	357,200	全席開エコノミークラス
		中部～シンガポール～アムステルダム～ハイデラバード～シンガポール～中部				SQ(国際線) 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 燃油サーチャージ	0	1	0	燃油サーチャージ(※) 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アムステルダム～ハイデラバード～シンガポール～中部				(※) 燃油料は変動費です 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 航空保険特別料金	0	1	0	航空保険特別料金 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アムステルダム～ハイデラバード～シンガポール～中部				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 空港空港税	10,100	1	10,100	各国空港税
		各国内線税				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 中部空港施設使用料・保安サービス料	3,200	1	3,200	中部空港施設使用料・保安サービス料
		中部空港旅客施設使用料・保安サービス料				【税込・10%】
航空券手数料	12/22-12/28	AI 航空運賃	45,200	1	45,200	全席開エコノミークラス
		アムステルダム～デリー～ハイデラバード				AI(インド国内線) 【非課税】
	12/22-12/28	AI 空港税	4,400	1	4,400	各国空港税
		各国内線税				【非課税】
宿泊代	12/22-12/25	Hyatt Regency Ahmedabad	50,700	1	50,700	シングルユース・朝食付
		3泊				【非課税】
宿泊代	12/25-12/27	Le Meridien Hyderabad	33,800	1	33,800	シングルユース・朝食付
		2泊				【非課税】
インド査証	12/22	インド査証費用	21,500	1	21,500	業務査証
		業務査証				【非課税】
					0	
					0	
					0	
領収金額 <合計>					544,100 (円)	

○航空券スケジュール

12/22(日)	SQ671 中部 10:20 - シンガポール 18:15	エコノミークラス
12/22(日)	SQ504 シンガポール 18:40 - アムステルダム 21:50	エコノミークラス
12/25(水)	AI2946 アムステルダム 08:40 - デリー 10:30	エコノミークラス
12/25(水)	AI2879 デリー 17:35 - ハイデラバード 19:50	エコノミークラス
12/27(金)	SQ519 ハイデラバード 11:15 - シンガポール 18:30	エコノミークラス
12/28(土)	SQ672 シンガポール 01:20 - 中部 08:30	エコノミークラス

領収書明細書【国際航空券・宿泊代金・査証代】

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル
103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキビル5階
TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7388
代表取締役社長 福澤 太郎
発行責任者: MICE営業部 [印]
担当者: MICE営業部 [印]
旅行業務取扱管理者: [印]

・鈴木 祐之 様

責任者印	担当者印
[印]	[印]

●国際線区間:SQ(シンガポール航空)利用

項目	日付	利用区間・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考
航空券代金	12/22-12/28	SQ 航空運賃	357,200	1	357,200	全区間エコノミークラス
		中部～シンガポール～アーメダバード//ハイデラバード～シンガポール～中部				SQ(国際線) 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 燃油サーチャージ	0	1	0	燃油サーチャージ(※) 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アーメダバード//ハイデラバード～シンガポール～中部				(※)燃油料は取扱いせず 【非課税】
	12/22-12/28	SQ 航空保険特別料金	0	1	0	航空保険特別料金 航空運賃に含む
		中部～シンガポール～アーメダバード//ハイデラバード～シンガポール～中部				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 空港空港税	10,100	1	10,100	各国空港税
		各国空港税				【非課税】
	12/22-12/28	SQ 中部空港施設使用料・保安サービス料	3,200	1	3,200	中部空港旅客施設使用料・保安サービス料
		中部空港旅客施設使用料・保安サービス料				【税込・10%】
乗券手数料	12/22-12/28	AI 航空運賃	45,200	1	45,200	全区間エコノミークラス
		アーメダバード～デリー～ハイデラバード				AI(インド国内線) 【非課税】
	12/22-12/28	AI 空港空港税	4,400	1	4,400	各国空港税
		各国空港税				【非課税】
宿泊代	12/22-12/25	Hyatt Regency Ahmedabad	50,700	1	50,700	シングルユース・朝食付
		シングルユース・朝食付(1泊)16900円×3泊				3泊 【非課税】
宿泊代	12/25-12/27	Le Meridien Hyderabad	33,800	1	33,800	シングルユース・朝食付
		シングルユース・朝食付(1泊)16900円×2泊				2泊 【非課税】
インド査証	12/22	インド査証費用	21,500	1	21,500	業務査証
		業務査証				【非課税】
					0	
					0	
					0	
徴収金額 <合計>					544,100 (円)	

○航空券スケジュール

12/22(日)	SQ671 中部 10:20 - シンガポール 18:15	エコノミークラス
12/22(日)	SQ504 シンガポール 18:40 - アーメダバード 21:50	エコノミークラス
12/25(水)	AI2948 アーメダバード 08:40 - デリー 10:30	エコノミークラス
12/25(水)	AI2879 デリー 17:35 - ハイデラバード 19:50	エコノミークラス
12/27(金)	SQ519 ハイデラバード 11:15 - シンガポール 18:30	エコノミークラス
12/28(土)	SQ672 シンガポール 01:20 - 中部 08:30	エコノミークラス

A1201

④

B No. 624144		2024年12月16日	
領 収 証			
浜松市議会 自由民主党 浜松 様			
金 額	円	千	百
		6	4
		4	8
		0	0
但し12/22~28 海外旅行保険代として			
上記の金額正に領収致しました。			
内訳	税込金額	消費税額	
10%	円 (	円)	
8%	円 (	円)	
非課税 不課税	64,480	円	



遠州鉄道株式会社
〒430-8655 浜松市中区旭町12番地の1
登録番号 T5080401000702



領 者 印



現金
振込
カード
その他

※社印、領者印のないものまたは金額を訂正したものは無効です。

No. 082020275

請求書

103266-24111214

発行日 2024年12月12日



遠州鉄道株式会社
旅行部



自由民主党浜松

様

営業第2グループ

〒430-8655 浜松市中央区旭町12-1

TEL 053-457-6470

担当者

FAX 053-457-6477

責任者

登録番号 T5080401000702

弊社をご利用いただきまして、誠にありがとうございます。
下記の通りご請求申し上げますので、お支払い下さいますようお願い致します。

合計金額

¥64,480-

(消費税内訳) 明細別紙
非課税 ¥64,480

(お支払いは銀行振込にてお願いいたします)

《取引銀行》

静岡銀行 浜松営業部 (普) 100240 《口座名》エンシェツドウ(カ)トラベ ルグチ

★御入金(お振り込み)は1月末日までをお願い申し上げます。

★お振り込みは請求書宛名にてお願い申し上げます。

★振込手数料は、貴社(貴方)ご負担にてお願い申し上げます。

請 求 書

発行日: 2025年01月09日

請求書NO:

登録番号: T4120001126778

株式会社 阪急阪神ビジネスラベル

〒103-0011

東京都中央区

日本橋大伝馬町10-8タキトミビル

MICE営業部

担当: 田辺 正徳

TEL: 03-6745-7387

FAX: 03-6745-7381

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

いつも格別のお引き立てを賜り誠にありがとうございます。
下記の通りご請求申し上げます。
尚、振込手数料はお客様にてご負担いただきますようお願い致します。

ご請求金額	¥162,982-
お支払い期限日	2025年01月31日

お問合せ番号: 0934948187

出発日: 2024年12月22日 (日)

振込先	三菱UFJ/新橋駅前
	普通預金 3578805
	(株)阪急阪神ビジネスラベル

責任者印

担当者印

令和6年度 静岡県インド訪問団・浜松市団

請 求 明 細			利用日	単価 (円)	数	小 計 (円)
現地手配費用 (別紙明細参照) 【非課税】				148,165	1	148,165
現地手配費用 (別紙明細参照) 【課税・税込10%】				14,817	1	14,817
消費税	金額(税込)	内消費税額	合計金額 (A)		162,982	
10%対象	14,817	1,347				
軽減税率8%対象 ※	0	0				
課税対象外 外	148,165	0				
			既入金額 (B)		0	
			今回請求額 (A-B)		162,982	

2025年1月9日

請求明細書【現地手配費用】(移動・ガイド・通訳・会議・通信)

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

株式会社 阪急阪神ビジネスラベル
 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-6 タキトビル6階
 TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
 代表取締役社長 福澤 太郎
 発行責任者: MICE営業部 [REDACTED]
 担当者: MICE営業部 [REDACTED]
 旅行業務取扱管理者: [REDACTED]

責任者印	担当者印
[REDACTED]	[REDACTED]
旅行名: 浜松市インド訪問団	旅行期間: 2024/12/22-12/28
現地手配費用	人員(名)
	5

旅行名: 浜松市インド訪問団			旅行期間: 2024/12/22-12/28			人員(名)		5
◎現地手配費用								
項目	日付	利用機関・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考		
現地移動代	12/22-12/28	専用バス・大型/BharatBenz(約40座) 4日間	71,875	1	71,875	借り上げバス(デラックス・BharatBenz) 4日間		
	アーメダバード	12/22 AMD空港送迎 12/23 AMD海外視察 12/24 AMD市内・近郊視察 12/25 AMD空港送迎				1台 <非課税>		
	12/25	専用バス・大型/BharatBenz(約40座) 1日間	18,540	1	18,540	借り上げバス(デラックス・BharatBenz) 1日間		
	デリー	12/25 DEL空港～デリー市内～DEL空港				1台 <非課税>		
	12/25-12/27	専用バス・大型/BharatBenz(約40座) 3日間	53,750	1	53,750	借り上げバス(デラックス・BharatBenz) 3日間		
	ハイデラバード	12/25 HYD空港～HYD市内視察 12/26 HYD市内・近郊視察 12/27 HYD空港送迎				1台 <非課税>		
現地ガイド					0			
					0			
					0			
					0			
通訳					0			
					0			
					0			
					0			
会議室					0			
					0			
					0			
					0			
通訳用機器	12/22-12/27	音声ガイドシステム	800	5	4,000	受信機5台		
	12/22-12/27	インド滞在中使用可			0	ご参加者 <非課税>		
海外携帯電話					0			
					0			
					0			
					0			
小計					148,165			
取扱手数料	旅行取扱手数料(旅行代金合計金額の10%)相当額				14,817	(課税・税込10%)		
現地手配費用 合計					162,982 (円)			

お問合せNo. : 0934948187

ReceiptNo. : 7723 - 0000393

発行日 : 2025年02月03日

RECEIPT
領 収 書

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

¥ 162,982-

金種 : 振込

THE ABOVE MENTIONED AMOUNT HAS BEEN DULY RECEIVED
上記のお振込金額正に領収致しました。

ご旅行代金として
令和6年度 静岡県インド訪問団・浜松市団
2024年12月22日～12月28日
別紙、領収書明細書のとおり

HANKYU HANSHIN BUSINESS TRAVEL

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル MICE営業部

〒103-0011 東京都 中央区 日本橋大伝馬町10-8 タキトミビル5階



発行担当者

【領収印無きもの及び金額訂正したものは無効です】

2025年2月3日

領収書明細書【現地手配費用】(移動・ガイド・通訳・会議・通信)

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル
 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトビル6階
 TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
 代表取締役社長 福澤 太郎
 発行責任者: MICE営業部 [印]
 担当: MICE営業部 [印]
 旅行業務取扱管理者: [印]

責任者印	担当印
[印]	[印]
人員(名)	5

旅行名: 浜松市インド訪問団		旅行期間: 2024/12/22-12/28			人員(名)	
○現地手配費用						
項目	日付	利用機関・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考
現地移動代	12/22-12/28	専用バス・大型/BharatBenz(約40席) 4日間	71,875	1	71,875	借り上げバス(デラックス・BharatBenz) 4日間
	アムダバート	12/22 AMD空港送迎 12/23 AMD郊外送迎 12/24 AMD市内・近郊送迎 12/25 AMD空港送迎				1台 <非課税>
	12/26	専用バス・大型/BharatBenz(約40席) 1日間	18,540	1	18,540	借り上げバス(デラックス・BharatBenz) 1日間
	デリー	12/25 DEL空港～デリー市内～DEL空港				1台 <非課税>
	12/26-12/27	専用バス・大型/BharatBenz(約40席) 3日間	53,750	1	53,750	借り上げバス(デラックス・BharatBenz) 3日間
	ハイデラバード	12/28 HYD空港～HYD市内送迎 12/28 HYD市内・近郊送迎 12/27 HYD空港送迎				1台 <非課税>
現地ガイド					0	
					0	
					0	
通訳					0	
					0	
					0	
会議室					0	
					0	
					0	
通訳用機器	12/22-12/27	音声ガイドシステム	800	5	4,000	受信機5台
	7/23-7/27	インド滞在中使用可				2名加者 <非課税>
海外携帯電話					0	
					0	
					0	
小計					148,165	
取扱手数料: 旅行取扱手数料(旅行代金合計金額の10%)相当額					14,817	【課税・税込10%】
徴収金額 合計					162,982 (円)	

【税込・税込10%】

A1201 - ②
③

① 渡航費

ご利用明細

静岡銀行

ご利用ありがとうございます。
内容をご確認いただきお持ち帰ってください。

年	月	日	振替先店番・科目・口座番号	
06	12	09		24
銀行番号	店番号	科目	口座番号	
0149		10		
お取扱店	お取引内容	お取引金額		
0361	お引出し	¥2,720,500		
お取扱枚数	*****			
	おつり	残	高	

キャッシング	手数料	時刻		お支払い できない場合
	¥550	1443	0126	
ミツビシ1-173-Iイ シンアイキマ 普通 3578805 カンキウカンパニイ・オスト ハモ様 ハマツツキ・カイウ・ユウミンコトウハマツ 様 TEL053-457-2495				

06.520.38 ⑩ (裏面もご覧ください)

② 視察旅費 (振込)

@544,100 x 5名分

阪急・阪神 ビジネストラベル

2,720,500円

③ 振込手数料 550円

静岡銀行 浜松営業部

② 現地手配費

ご利用明細

静岡銀行

ご利用ありがとうございます。
内容をご確認いただきお持ち帰ってください。

年	月	日	振替先店番・科目・口座番号	
07	01	21		24
銀行番号	店番号	科目	口座番号	
0149		10		
お取扱店	お取引内容	お取引金額		
0361	お引出し	¥162,982		
お取扱枚数	*****			
	おつり	残	高	

キャッシング	手数料	時刻		お支払い できない場合
	¥550	0915	0007	
ミツビシ1-173-Iイ シンアイキマ 普通 3578805 カンキウカンパニイ・オスト ハモ様 ハマツツキ・カイウ・ユウミンコトウハマツ 様 TEL053-457-2495				

06.520.38 ⑩ (裏面もご覧ください)

A0104 - ①
②

<現地手配費用>

① 現地 貸上バス (移動)

・音声ガイド

5名分

162,982円

阪急・阪神 ビジネストラベル

② 振込手数料 550円

静岡銀行 浜松営業部

日本出国手続きの順序

保安検査場(セキュリティチェック)

ハイジャックなど危険防止のため、手荷物検査とボディチェックを行います。搭乗券を提示していただき、機内持ち込み手荷物はX線検査機にお通しください。お客様は、お一人ずつボディスキャナーまたは金属探知機のゲートをくぐり、ボディチェックをお受けください。

税関手続き

100万円相当額を超える現金などを持ち出す場合は、税関への申告が必要となります。現在使用している時計やネックレスなどの外国製品を外国に持ち出す場合は、税関カウンターで所定の手続きを行ってください。免税物品を購入した方は、税関カウンターにてパスポート等を提示してください。

出国審査

出国審査カウンターでパスポートと搭乗券を提示してください。
顔認証ゲート及び自動化ゲートを利用した場合には、パスポートにスタンプ(証印)されません。スタンプを希望される方は職員にお伝えください。
(顔認証ゲート及び自動化ゲートのご利用については、法務省のホームページをご確認ください)
※出国審査後、免税店にて酒、タバコ等お買い物ができます。

搭乗ゲートへ

搭乗券に記載されている搭乗時刻と搭乗ゲートをご確認ください。
館内の案内表示に従って、搭乗案内開始時刻までに間に合うよう、時間に余裕を持って搭乗ゲートまでお越しください。

搭乗

搭乗ゲートに到着いたしましたら、搭乗開始までお待ちください。
搭乗の際には係員の案内に従って、搭乗券とパスポートを提示してご搭乗ください。

1日目 2024年12月22日(日)

発着地 所在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
中部国際空港	08:20		中部国際空港第1ターミナル 3階 出発ロビー 旅行会社カウンター9番ご集合
中部 発	10:20	SQ671	空路、シンガポールへ 【所要時間:6時間55分】
シンガポール着	16:15		乗り継ぎ
シンガポール発	18:40	SQ504	空路、アーメダバードへ 【所要時間:5時間40分】
アーメダバード着	21:50	専用バス	着後、ホテルへ ホテル着
食事:朝食/ー		昼食/機内	(アーメダバード泊)
		夕食/機内	お部屋番号
【メモ】		1/2	
【宿泊ホテル】			ハイアットリージェンシー アーメダバード Hyatt Regency Ahmedabad

2日目 2024年12月23日(月)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
アーメダバード		専用バス	ホテルにて朝食 朝、ホテル出発 午前、スズキ・モーター・グジャラート社 (SMG)視察 昼食(SMG社員寮にて) 午後、マンダル工業団地視察 夕刻、国際金融技術都市(GIFTシティ) 視察、夕食 ホテル到着
食事:朝食/ホテル 屋食/○ 夕食/○ (アーメダバード泊)			
起床時間:	時 分	時 分	お部屋番号
朝食:	時 分	時 分	
集合時刻:	時 分	時 分 (場所: 日当)	
【メモ】			
【宿泊ホテル】			
ハイアットリージェンシー アーメダバード Hyatt Regency Ahmedabad			

- 10 -

3日目 2024年12月24日(火)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
アーメダバード		専用バス	ホテルにて朝食 ホテル出発 午前、アーメダバード市役所訪問 午前、グジャラート州政府訪問(調整中) - 州首相表敬訪問 - 協定締結 - グジャラート州首相主催の昼食会 午後、アーメダバード経営者協会(AMA) 訪問(調整中) - ジャパンセンター視察 ホテル到着 現地関係者とのネットワーク構築会
食事:朝食/ホテル 屋食/○ 夕食/○ (アーメダバード泊)			
起床時間:	時 分	時 分	お部屋番号
朝食:	時 分	時 分	
集合時刻:	時 分	時 分 (場所: 1/2)	
【メモ】			
◎(予定)(調整中)の訪問に関しては、変更になる場合がございます。			
【宿泊ホテル】			
ハイアットリージェンシー アーメダバード Hyatt Regency Ahmedabad			

- 11 -

4日目 2024年12月25日(水)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
アーメダバード		専用バス	朝食はBOX朝食をご用意
アーメダバード発	08:40	A12946	早期、ホテル出発 アーメダバード空港到着 空路、デリーへ 【所要時間:1時間50分】
デリー - 着	10:30	専用バス	デリー空港到着 午前、全日本空輸株式会社 デリー支店との意見交換会 昼食
デリー - 発	17:35	A12879	デリー空港到着 空路、ハイデラバードへ 【所要時間:2時間15分】
ハイデラバード着	19:50	専用バス	ハイデラバード空港到着 ホテル到着
食事:朝食/BOX		昼食/○	夕食/未定 お部屋番号
起床時間:	時 分	白	
朝食:	時 分		
集合時刻:	時 分	(場所:)	
【メモ】			
【宿泊ホテル】			
ル メリディアン ハイデラバード Le Méridien Hyderabad			

5日目 2024年12月26日(木)

発着地 滞在地	現地 時間	交通 機関	スケジュール
ハイデラバード		専用バス	ホテルにて朝食 午前、ホテル出発 インド工科大学ハイデラバード校 - スズキイノベーションセンター視察 - 覚書締結式 昼食(学内ゲストハウス)(予定) 午後、アッパールスタジアム視察 夕食 ホテル到着
食事:朝食/ホテル		昼食/○	夕食/○ (ハイデラバード泊)
起床時間:	時 分	お部屋番号	
朝食:	時 分	1/2	
集合時刻:	時 分	(場所:)	
【メモ】			
【宿泊ホテル】			
ル メリディアン ハイデラバード Le Méridien Hyderabad			

6日目 2024年12月27日(金)

発着地 滞在	現地 時間	交通 機関	スケジュール
ハイデラバード			ホテルにて朝食
ハイデラバード	11:15	専用バス	朝、ホテル出発
			ハイデラバード空港到着
ハイデラバード発	11:15	SQ519	空路、シンガポールへ 【所要時間:4時間45分】
シンガポール着	18:30		乗り継ぎ
食事:朝食/ホテル 昼食/機内 夕食/未定			
起床時間:	時 分		
朝食:	時 分		
集合時刻:	時 分	(場所:)	
【メモ】			

7日目 2024年12月28日(土)

発着地 滞在	現地 時間	交通 機関	スケジュール
シンガポール発	01:20	SQ672	空路、中部へ 【所要時間:6時間10分】
中部	08:30		中部国際空港着、通関後解散 ～お疲れ様でした～
食事:朝食/機内 昼食/ー 夕食/ー			
【メモ】			

12/27 12/28
 12/27 1/2 5/100
 23 全額 5700 + 30
 24 1/2 2550 + 40
 25 全額
 26 1/2 2460 + 100
 27 1/2 1399
 28 全額 641
 29 全額 641
 30 全額 641
 31 全額 641
 32 全額 641
 33 全額 641
 34 全額 641
 35 全額 641
 36 全額 641
 37 全額 641
 38 全額 641
 39 全額 641
 40 全額 641
 41 全額 641
 42 全額 641
 43 全額 641
 44 全額 641
 45 全額 641
 46 全額 641
 47 全額 641
 48 全額 641
 49 全額 641
 50 全額 641
 51 全額 641
 52 全額 641
 53 全額 641
 54 全額 641
 55 全額 641
 56 全額 641
 57 全額 641
 58 全額 641
 59 全額 641
 60 全額 641
 61 全額 641
 62 全額 641
 63 全額 641
 64 全額 641
 65 全額 641
 66 全額 641
 67 全額 641
 68 全額 641
 69 全額 641
 70 全額 641
 71 全額 641
 72 全額 641
 73 全額 641
 74 全額 641
 75 全額 641
 76 全額 641
 77 全額 641
 78 全額 641
 79 全額 641
 80 全額 641
 81 全額 641
 82 全額 641
 83 全額 641
 84 全額 641
 85 全額 641
 86 全額 641
 87 全額 641
 88 全額 641
 89 全額 641
 90 全額 641
 91 全額 641
 92 全額 641
 93 全額 641
 94 全額 641
 95 全額 641
 96 全額 641
 97 全額 641
 98 全額 641
 99 全額 641
 100 全額 641

お問合せNo. : 0934948187

ReceiptNo. : 7723 - 0000403

発行日 : 2025年02月03日

RECEIPT
領 収 書

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

¥ 99,550-

金種 : 振込

THE ABOVE MENTIONED AMOUNT HAS BEEN DULY RECEIVED
上記のお振込金額正に領収致しました。

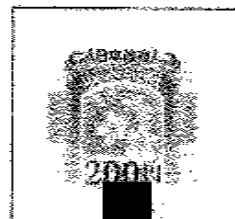
ご旅行代金として
令和6年度 静岡県インド訪問団・浜松市団
2024年12月22日～12月28日
別紙、領収書明細書のとおり

5名様
柳川樹一郎様 瀧美誠様 松本康夫様
小野田康弘様 鈴木裕之様

HANKYU HANSHIN BUSINESS TRAVEL

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル MICE営業部

〒103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトミビル5階



発行担当者



【領収印無きもの及び金額訂正したものは無効です】

請求書

発行日: 2025年01月10日

請求書NO:

登録番号 : T4120001126778

株式会社 阪急阪神ビジネス

〒103-0011

東京都中央区

日本橋大伝馬町10-8タキトミビル5階

MICE営業部

担当:

TEL: 03-6745-7387

FAX: 03-6745-7381

浜松市議会 自由民主党浜松 御中
柳川 樹一郎 様 蓮美 誠 様 松本 康夫 様
小野田 康弘 様 鈴木 裕之 様

いつも格別のお引き立てを賜り誠にありがとうございます。
下記の通りご請求申し上げます。
尚、振込手数料はお客様にてご負担いただきますようお願い致します。

ご請求金額	¥99,550-
お支払い期限日	2025年01月31日

お問合せ番号: 0934948187

出発日: 2024年12月22日 (日)

振込先	三菱UFJ/新橋駅前
	普通預金 3578805
	(株)阪急阪神ビジネス

責任者印

担当者印

令和6年度 静岡県インド訪問団・浜松市団

請 求 明 細			利用日	単価 (円)	数	小 計 (円)
食事代 (別紙明細参照) 【非課税】			外	90,500	1	90,500
食事代 (別紙明細参照) 【課税・税込10%】				9,050	1	9,050

2025年1月10日

請求明細書【食事代金】

浜松市議会 自由民主党浜松 御中

・柳川 樹一郎 様
 ・瀧美 誠 様
 ・松本 康夫 様
 ・小野田 康弘 様
 ・鈴木 裕之 様

株式会社 阪急阪神ビジネスホテル
 103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町10-8 タキトビル5階
 TEL: 03-6745-7387 FAX: 03-6745-7386
 代表取締役社長 福澤 太郎
 発行責任者: MICE営業部
 担当: MICE営業部
 旅行業務取扱管理者:

責任者印	担当印

●食事代金

項目	日付	利用施設・施設	単価(円)	数量	小計(円)	備考
食事代	12/23 昼食	【昼食】SMG寮内食堂	2,800	5	14,000	和食
					0	<非課税>
食事代	12/24 ネットワーク	【夕食】ハイアットリージェンシー パーティー	5,000	5	25,000	パーティー
					0	<非課税>
食事代	12/25 朝食	【朝食】IRISホテル・デリー ブッフェ	5,500	5	27,500	ブッフェ
					0	<非課税>
食事代	12/26 夕食	【夕食】TRIDENT HOTEL イタリアン	4,800	5	24,000	イタリアン
					0	<非課税>
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
					0	
小計					90,500	
取扱手数料		旅行取扱手数料(旅行代金合計金額の10%)相当額			9,050	【課税-税込10%】
食事代 合計 (円)					99,550	

(様式 13)

海外出張報告書

令和 7 年 1 月 2 1 日

浜 松 市 議 会 議 長 烏 井 徳 孝 様

会 派 名 浜松市議会 自由民主党浜松

代表者氏名 会長 倉 田 清 一

(署名又は記名押印をしてください。)

令和 6 年 11 月 8 日付届け出ました、所属議員の海外出張につきまして、下記
のとおり報告します。

記

1 出張期間

令和 6 年 1 2 月 2 2 日(日) から 令和 6 年 1 2 月 2 8 日(土) まで

2 出張先

インド (アーメダバード市 ・ デリー市 ・ ハイデラバード市)

3 出張の理由

経済成長著しいインド共和国と、経済だけではなく、人材・文化・スポーツ・教育等あらゆる分野での交流により本市との協力関係の構築を図る。

4 出張者(氏名印)

柳川樹一郎

渥美

誠

松本 康夫

小野田康弘

鈴木

裕之

5 出張の顚末

別紙の通り

インド視察報告書

自由民主党浜松
柳川樹一郎

【目的】

本市が抱える人口減少の課題を解決するため、経済成長著しいインドと経済交流や人材交流を目的に、アーメダバード市、インド工科大学ハイデラバード校（IITH）との連携の取り組みを進める。

アーメダバード市、グジャラート州日印友好協会、IITH等を訪問する当局に同行し、今後インドとの交流が行政レベルから市民レベルに展開されることを踏まえ、文化・スポーツ・教育などあらゆる分野の交流等可能性を探る。

【視察日】 2024年12月23日（月）

【訪問先】 スズキ・モーター・グジャラート

【説明】

視察は12月22日から28日までの一週間の予定で計画されました。中部国際空港セントレア10時20分のフライトでシンガポール空港に向かい、乗り換えの後、インド・アーメダバード空港に夜10時過ぎに到着。

視察1日目は23日7時にホテルを出発し、スズキ・モーター・グジャラート社に伺いました。（ホテルを出てから3時間で工場に到着）。

敷地面積300万㎡、従業員3,200名とインドでも最大級の工場であり、その規模に驚くとともに、インドでのさらなるシェア拡大を目指す〇〇氏の思いに凄さを感じずにはいられませんでした。

工場面積は260万㎡、でAブロック・Bブロック・Cブロックに区分けしており、Cブロックでは日本にも出荷しているフロンクスを生産していました。インド工場では、現在300万台の生産をしていますが、あと100万台の増産を計画しているとのことで、その出荷先はアフリカ方面だそうです。

工場内は、ロボットが主役で、人の手を必要とする工程が少なく、生産工程が稼働していました。ここでは日本に逆輸出しているフロンクスの生産現場を視察。約5分間に1台の仕上がりだそうです。完成検査においては、人の感覚を必要とし、人の操作で行っていました。

工場内で工程を見学した後、1万台のストックヤードと貨車輸送の基地を見学しました。1車両に27台を乗せるように特殊車両を製作し、20%が貨車輸送で一日に2700台を港へ搬送、残りの80パーセントはトラック輸送とのことでした。

工場から港までは300kmの距離がありますが、この地への工場誘致に際しては、

「近くで最良の場所」とのことで、浜松と豊橋三河港まで25km程度、御前崎港まで40kmほどを、「近いだの遠いだの」と言っている事がおかしいと思えるほどインドのスケールの大きさ、距離感の違いを感じました。

【所感】

■は、「工場は景観だよ」とよく言っていたそうです。また、「歩くときポケットに手を入れない」「携帯を使用して歩かない」「階段で、手すりを持たない」「工場内は、走らない」「斜め横断をしないで、左右の確認をする」といったマナー順守が約束になっているとのことです。

私の判断ですと、見た目が「良いか悪いか」で判断ができることを言っているのではないかと思います。工場内は整理整頓がされていて、床も事務所の床と変わりなく、工場とは思えないほどでした。インドにおいて日本の精神を前面に打ち出し工場運営がされていることに驚嘆したところです。

このグジャラート工場では、1万5,000人の従業員のうち、正規職員は4,000人、そして日本人200人で運営しており、税金を支払った後の収益から、社会貢献面で、病院や学校など支援をしているとのことです。

インドの経済成長や国民生活の向上に貢献していることに、日本人として、浜松市民として感動を覚えました。

【訪問先】グジャラート州印日友好協会

【説明】

「インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽・美術・伝統芸能などの文化的な交流の可能性を探る」として1975年に設立されたグジャラート州印日友好協会は、アーメダバード経営者協会と提携、会長に■氏が就任しています。■氏は、2017年に日本の旭日小受章を受賞しており、グジャラート商工会議所会頭、アーメダバード経営者協会総裁等を歴任しています。

「Next Bharat Ventures IFSC Private Limited（ネクストバーラトベンチャーズIFSCプライベートリミテッド）（スズキ株式会社のインド子会社）は、自動車を作ってインドを変えた、そしてスズキは10億人を変えていくと思っている。インド人もインド政府もスズキを支援していく」さらに、「スズキがもたらしてくれたプログラムに感謝している。さらにこれ以上の貢献することにも期待している」と感謝の弁を述べられました。

また、「40兆円を超える経済力、そして鉄道の延長（日本の技術の新幹線）さらに世界40億人の為に、日本とインドとの関係はよくなって300兆円の経済大国となるためには、日本の文化の考えが必要です。規則・規制と改革を政府がしっかりやっていかねばいけない」「スズキのお陰で、200件の投資ファンドが出来ました。また、生活水準の向上のため大学も病院も出来支援してくれることがうれしい」とも語

り、「これから投資家が、20年でどのようにして行くか、66%の成長があり政府は中国より優れている」と豪語していました。

また、「40年前にインドに進出し、インドのリスクを承知しながらここまでインドを変化させてくれたのは、■■■■氏のお陰です。感謝しています」とも語り、私たちも誇らしげに話を聞くことが出来ました。

【視察日】 2024年12月24日（火）

【訪問先】 ジャラート州政府・アーメダバード市政府

【目 的】 アーメダバード市との友好関係構築

【説 明】

この日は訪問前に、アーメダバード市が区画整理事業で開発したサバマチ川両岸を繋ぐ巨大アテルブリッジに案内していただきました。このブリッジは両岸の干拓事業の象徴として建設されたものだそうです。赤いじゅうたんが敷かれ、■■■■さんと市長さんのもてなしで花束まで用意されていました。■■■■さんに感謝です。

この後、グジャラート州政府アーメダバード市庁舎において、プラティバベン・ラケシュクマール・ジャイン・アーメダバード市長への表敬訪問を行いました。

アーメダバード市長からそれぞれに、記念品として橋のミニチュアが贈呈され、中野市長・鳥井議長・■■■■からもアーメダバード市長に記念品が贈られました。

続いて放映されたアーメダバード市の紹介ビデオでは、毎年1月14日（祭日）に行われる風揚げイベントの説明や浜松との縁があることが紹介されました。

中野市長は、この風揚げイベントに浜松市も参加させていただきたいこと、これから30年・40年・50年もこの関係を繋げていくことなどを約束しました。

また鳥井議長からは、浜松市とアーメダバード市が産業の面で共通していることから、やらまいか精神を共有し、両市が関係をより深くしていくことが



大切であることなど話されました。

アーメダバード市長からは、「尊敬するシン首相の思いのもと発展しています。先日行われたG20の折には、モディ首相も浜松スズキからいただいた提案・提言や支援に感謝していることが報告されました。モディ首相が言うスタートアップの事業に力を入れているとのことでした。

これからの未来に向けて、密に関係を保ちながら、いろいろな面で関係を作り上げていきたい。人と人との関係がさらに深く、未来を築く中学生や高校生の若い力を繋げ取り入れていきたい。

グジャラート州と静岡県とのパートナーPAYで3兆円の経済工場が得られる。スズキ（株）の貢献度は大変大きくエネルギーを感じる。日本との協定が強いことなどから、経済的・人的交流豊かな文化交流の関係が進化していくこと目標達成に大きな機会となりました。世界は一つ、マハトマガンジーが言うアーメダバード遺産は街教育・医療・産業すべてがモディ首相の言うように、浜松市からの提言に大きく恩恵を受けていると思っている」と歓迎の意が表されました。

鈴木静岡県知事からは、「静岡県は温泉も海の幸もあり県西部には浜名湖があり風あけ祭りもあり素晴らしいところです。グジャラートと静岡との関係を密にしていこうと交流を深めていくと願っている」ことを伝えました。



【視察日】 2024年12月25日（水）

【訪問先】 IBIS Newdelhi Aerocity（全日本空輸（株）デリー事務所）

【目 的】 インドから日本に来ているワーカー層の現状及びインドの送り出し機関の現状等の把握。本市へインド人材を呼び込むための可能性調査。

この日は全日本空輸（株）デリー事務所を訪問。■■■■ANA インド代表兼デリー支店長の講演を伺いました。

インドはGDP世界第3位。ベトナムの人材についての話はよく聞くが、インド人は、盗人や置き引きなどせず生真面目で勤勉、そしてアニメ好きの若者や親日家が多く、日本に行って旅館などでまじめに働いている人がたくさんいるそうです。福井県では、看護師として技能実習生の受け入れや日本旅館業協会などがあると言う事です。

NSDC（インド国家技能開発公社）では、日本での受け入れに対し、日本企業や職業専門学校などで日本語などの勉強をしながら職業技術を身に着けることができ、インドの若者が日本で活躍できる環境が整ってます。このシステムが軌道に乗れば、労働力不足の解消など、日本の企業のためにも優位になります。ベトナムやフィリピンを始めとする東南アジアでの日本への人材派遣ブローカーとは違う高度なシステムにより、質の高い外国人材を得ることができる素晴らしいものと思いました。

【視察日】 2024年12月26日（木）

【訪問先】 インド工科大学ハイデラバード校

【目 的】 インド工科大学ハイデラバード校と Next Bharat Ventures と覚書書を締結

この後、空港に向かいハイデラバードに向かいます。（ちなみにこの行程は、中部国際空港から札幌に行ってその日に沖縄に行くようなものとのこと。）

ハイデラバードにあるインド工科大学ハイデラバード校に伺い、大学と連携強化とスズキイノベーションセンターを視察することになっています。

朝7時30分ホテル出発し、約2時間かけインド工科大学ハイデラバード校に大学に向かいました。大学の敷地は大変広く、その中に校舎が建っています、学科や専門分野ごとに建物がああり、始めての人は迷うほどです。

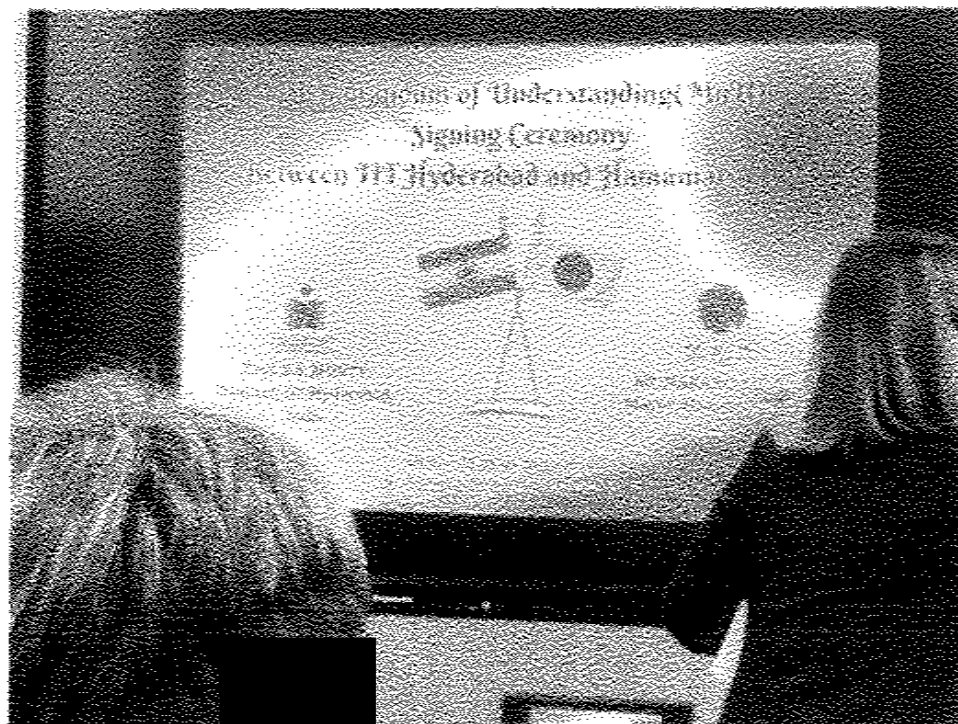
■■■■氏によると、インド工科大学は、国内に23校あり、計算機科学で工学科では、「ジャパンデスクとして日本との窓口になっている。」と■■■■先生は言っていました。また、ハイデラバード校は、ランキングで以前は8番目であったが、今はイノベーション分野では他の大学より勝っていて3位となっている。

学生数は、18学科5,000人。さらに人工知能AIにおいてはAIの権威ある先生が揃っていると言っていました。日本からも慶応大の■■■■氏や京大からも教授が来ている。世界のトピックスに対応すべく分野も行っているとのことでした。

イノベーションにおいては、IITHで就職窓口を多く作り、学生に夢・アイデアを実現すべき開発資金の出資もするようにした。会社も設立出来るようにアドバイスもしているとのことでした。

この様にチャレンジ精神の旺盛な学生にはどんどんチャレンジしていただき、失敗してもいつでも大学に戻れるようにしているとのことでした。

IITHの卒業生は、スズキに16名、バッテリーのデンソー、メルカリ、ヤフージャパンなど日本の企業に300名ほど就職している。アメリカより日本は行ける国であると、学生が日本への就職を目指している。



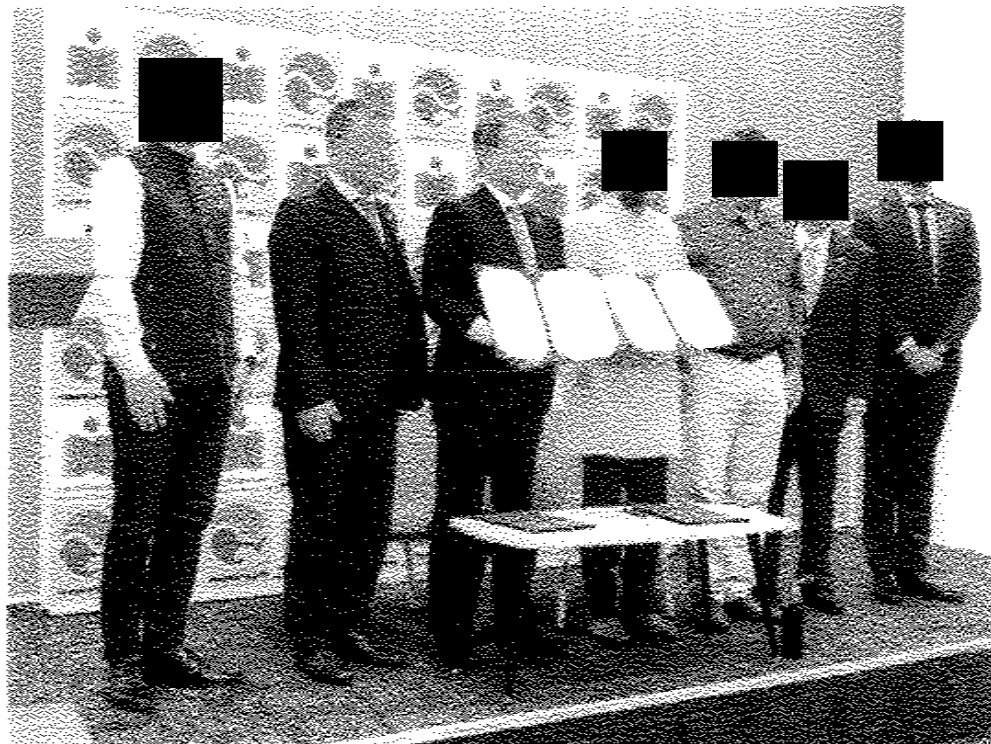
ここで、学長の話が始まりました。「浜松の市長さんが、ハイデラバードまで来てくれることは初めての事です。これも、■■■■先生のお陰です。IITHが1951年から始まって、このようなことは初めてです。また、ジャイカのシステムの中で第2段階となり日本の企業との連携ができるようになった。大変うれしいことです。

さらに、スズキが浜松市とつなげるコラボレーションが大変大きな関係になります。2047年には、先進国の仲間入りをしますと言っていました。

また、IITHの学生が世界で働く・日本（浜松）との交流はどんなメリットが大事なことです。アメリカに行きたいか、日本は文化面で学べることで日本を愛することになる。日本との懸け橋となれるか、生活面でも日本の文化を学べることで大きいと言

っていました。（日本で生活しながら企業や大学そして地域の生活コミュニティの中で学ぶことの大切さが大きい。）

浜松市長も、グローバルな社会に対応できる学生の育成を目指していくことを約束していました。



同行した記者からもコメントがあり、中日新聞の■■■記者は、IITHの学生が浜松に来ていただき、静大の学生とも交流していただければ言っていました。また、■■■先生に、来年は浜松に来て浜松の高校生と世代を繋げる意味で話をして頂ければと言っていました。

静岡新聞の■■■記者は、学長さんの浜松市への思いに感動した。ハイデラバード・スズキイノベーションセンター・スズキ・浜松市の連携のもと、40人を超える卒業生が就職している。また他企業へも人材を出してきたことに感謝です。もう一つは、浜松と浜松の企業との共同研究への期待ですと言っていました。

最後に、スズキとハイデラバードとの関係は、マルチスズキの事をインド人は一番よく知っていることです。研究や交流の面そしてネクスト・ハイデラバードと言っており、農業分野での開発です。スズキでも牛糞を利用したバイオマスの発電と牛糞の利活用と言っていました。農業に際しては、2月に教授が浜松に来る際、浜松市の農業において先進の農業の農福連携の京丸園の水気耕栽培を見学してただこうと、産業部長と話をしています。

中野市長からは、人材交流の面でネクスト Bharat に市の職員を派遣していくことを発表しました。

大学での説明の後、スズキイノベーションセンターを視察しました。大学の一角にイノベーションセンターがあり、常に大学と学生とスズキが連携を取り浜松へも情報提供をしていくことです。これからのインドとの懸け橋を執り行われるものと信じています。

大学を後に、最後の視察クリケット場を視察しました。クリケットは、インドの国技となっているものです。クリケット場は大きなものは10万人が入れるものから3万人ほどのものまでであると言う事です。

【所感】

インドは途上国とはいえ、デジタル化が進んでおり14億人の人口の内13億人に個人登録が出来ており、女性の90%が口座を持っているとのこと。その一人一人が融資も投資もできるようになっている。社会保障など個人口座に振り込まれるようになっている。キャッシュレス化も進んでおり、使用できるところは限られているものの、露天商のようなところでもカード決済で、現金は使わない社会が出来ていると言う事です。

最先端を行くデジタル化や工場形態も先進技術が日本の技術のもと、目覚ましい発展をしている様を視察させて頂き驚嘆しました。40年以前にこの地に入りここで自動車生産をする約束をした■■■■氏の偉業は計り知れないものです。インド・アーメダバード市とスズキ・スズキイノベーションセンター・静岡県・浜松市との協定の取り交わしは、未来の浜松市の行く末が保たれる大きな役のようにとらえることが出来ました。大変貴重な場面に立ち会うことができ、今後ますます本市とインドの交流を深め、ともに発展していくことを期待します。



<インド視察報告書>

令和7年1月20日 報告者 渥美 誠

◆スズキ・モーター・グジャラート (S・M・G) ～12月23日 (月)

【概要】

SMG は、インド西端で隣国パキスタンに接するグジャラート州にあり、アーメーダバード市近郊100kmに立地する。現在、マルチ・スズキ・インディア（通称マルチ・スズキ）社の100%子会社で四輪生産を行う。2014年の設立後、2023年12月に累計生産300万台を達成、2024年10月には、フロンクスを日本市場で販売開始した。現在稼働3生産ラインを4生産ラインへ拡張し、2026年に、年間生産能力を現在の75万台から100万台への稼働開始を目指す。更に、今後、現在の生産拠点とは別の場所に、年間生産能力100万台規模の新工場を建設、グジャラート州と、生産能力が合わせて200万台体制となる基本合意をした。

SMG は、従業員総数が約15000人（正規4000人）で、10000人がワーカー、3000人が警備、2000人が管理部門となっているが、工場内には常時、5000人程度が作業にあたる。期間工賃は10万円/月程。日本人従業員は200人程度で、近くに塀に囲まれ、銃所持のガードマンが警備にあたる社員寮がある。帯同者はほとんどなく、子供の帯同は全く無しで、奥さん帯同の場合でも、奥さんはアーメーダバードに住む。また、現地勤務年数は、ラインが2～3年、その他が5年を目安とする。こうした地域雇用を創出する事業を行っている中、インド2%ルールがあり、企業規模の大小を問わず、税引き後の最終利益の2%を社会貢献活動への還元が義務付けられているため、マルチ・スズキが病院や学校を寄付している。

工場内の視察では、生産ラインにおけるプレス、ロボット溶接、(塗装)、組立、完成検査各工程の説明を伺う。また、工場内では、安全ルール6則、ポケテハナシ（ポ・ポケットに手を入れない、ケ・携帯電話を見ながら歩かない、テ・手すりを持って階段を昇る、ハ・走らない、ナ・斜め横断の禁止、シ・指差呼称の徹底）を確実に行之、この安全管理を工程管理、品質管理へ繋げる。

プレス工程では、5200トンプレス機5基が5秒に1枚加工を行う。溶接工程では、100%自動化で、サイド部品やルーフへのスポット溶接4000ヶ所を50秒/台で行う。組立工程では、シャーシ等を組み立てる。完成検査では、蛍光灯等による60項目等のチェックを行うが、フォークリフトによる工場間の製品移動は行わない。最終検査では、機能検査、ドラム検査、ABS 検査に加え、屋外ショートロード検査、水漏れ検査を行う。こうした完成車はストックヤードへ移動、カーボンニュートラルを考慮した鉄道による出荷となる。視察時には、約1万台がヤードで出荷を待つ。鉄道エリアには4レーンの軌道があり、3レーンで1000台/日の積み込み能力がある。具体的には、27貨物（270台）を3～4編成で800～1000台/日出荷する。出荷は国内が7割、残りの3割が国外へ向け、鉄道エリアから港へ運搬する。



スズキ・モーター・グジャラート (S・M・G) 工場 外観

【所感】

アーメーダバード市は人口635万人、グジャラート州最大の都市であり、州都ガンディナガルとの双子都市と言われ、インド最大の織物の中心地の1つとなっている。しかし、スズキが企業進出した1980年代前半のインドは、グジャラート州に限らず、日本人にとっては、インド国土全体が、道路等の基盤整備は基より、生活環境全般にわたり、大変厳しい状況下にあったと関係者が振り返る。こうした中、スズキは、グジャラート州アーメーダバードを重点生産拠点の一つとする経営戦略に社運を賭けた。工場建設予定地周辺は、原野、荒野とも言える未開の地であり、満足な道すらなく、当時の関係者はまさに開拓者そのものであり、その不屈の日本人スピリッツが、40年近く前のこの地アーメーダバードにあった。以来、地域との共存、共栄の歴史を重ね、現在、累計380万台を生産、約15000人（一部日本人含め）地元雇用を創出し、更に、地域医療や学校教育等の企業の社会的責任（CSR）を果たす。

SMGは、アーメーダバード市街から100km程度の近郊にあるが、移動バスの窓外に広がる景色に、道路周辺の散乱したごみ、痩せた野良牛・野良犬、裸足の子ども、働いていないと思われる大人達等が映る。しかし、何故か、我々にとって、この異様とも思える生活環境に不自然さはなく、ゆったり感さえ感じる。更に、その瞳は明るく微笑む。まじめな国柄が表れていると感じる。工場入門ゲートを通過すると、そこは、全く日本の工場内と思うほど、整理整頓、安全第一を徹底する。工場・工場間通路・ストックヤード等が広がる広大な敷地であるが、警備等も含めた管理体制が整っている。こうしたインドの国柄、スズキの社員教育の実績と、本市の各分野が切迫している人材不足課題等とを相互共有し、お互いにウインウインの関

係となる、パートナーシップ構築に向けたこのタイミング、チャンスを逃してはいけないと強く感じる。

◆マンダラ工業団地～12月23日（月）

【概要】

マンダラ工業団地は、日本の経済産業省とJETROがグジャラート州政府と共同で企業誘致を進める日本企業向け専用の工業団地で、現在、9社が入居し、静岡県内企業では、村上開明堂、ASTI、ROKI、MAアルミニウムが入居する。豊田通商インディア社（TTIPL）は、こうした工業団地テクノパークにおいて、レンタル工場や日本式ものづくり学校事業を展開する。豊田通商インディア社は、インド国内で、様々な事業を展開するが、ほぼ全ての事業をテクノパークで行い、工場操業支援事業及び物流拠点を運営する。本社はバンガロール、インド国内に複数拠点を持つ。1999年に駐在事務所を開設以来、25年が経過。現在、グループ会社を含む24社、社員数1万人弱、駐在員60名程度で運営にあたる。

豊田通商インディア社は、事業に大きな3本柱、一つ目は、モビリティの発展、二つ目は、交通渋滞、交通事故、大気汚染等の社会的な課題解決、三つ目は、歴史的に見ても東西の結節点と言われるインドを起点とする中東、アフリカへの架け橋を掲げる。一方、現在取り組んでいる事業に、マルチスズキとの合併会社で、自動車廃車のリサイクル事業を1拠点で行い、更に、インド全州への拠点展開中であるが、法律的な課題もある。こうしたリサイクルを通して、資源の有効活用、サーキュラエコノミー、そして、カーボンニュートラルへの貢献を進める。また、セコムとの合併で総合病院をバンガロールで運営している。最初は、駐在員の生活基盤充実に向けた事業として始めたが、患者の99%が現地のインド人が利用する病院であり、社会基盤の地元貢献でもあり、今後は、こうした事業モデルを広める。

豊田通商インディア社は、テクノパーク開発を1998年以降、3地域3社4拠点で事業展開、4拠点の一つを、マンダラ日系専用工業団地内に3つの敷地を保有する、TTIPLの100%子会社豊田バーラト（TBIS）が運営する。TBISの主な事業は、モビリティ事業への貢献、当社日本式ものづくり学校を通じた地域人材育成への貢献、部品メーカーの支援によるものづくりサプライチェーンへの貢献である。TBISは、2023年、既存の3社を統合、新たにロジステックを加えた事業を開始、マンダラ工業団地は、アーメーダバード空港から約2時間、SMGから約30分、また、ムンドラ港を代表する3港までトラックで24時間以内（アフリカ向け輸出に最適）など立地の良さがある事から、過去の実績では、レンタル工場を活用し、最短6ヶ月で操業開始したケースがある。

豊田バーラト（TBIS）は、インド進出における大きく3つの課題への整理、対応、そして解決へと進出企業を支援する。

1つ目は【用地取得のハードルが極めて高い】、これは慢性的な工業用地の不足、制度・手続きが複雑で不透明、州政府の理解、協力の必須にある。解決策として、土地収用済、工業用地に整備済（農地転用）による土地取得、政府許認可の取得、電気・水道インフラ整備、道路整備、敷地造成等のいわゆる土地収用・造成・インフラ整備済を提供する。企業のメリットは、通常3年のリードタイムを最大1年半、最短6ヶ月と進出リードタイムの短縮、通常50%程度を80～90%への高い建蔽率確保及びインフラ、各種共通サービス整備済による初期投資削減、現地調達部材、製品販売への支援、日本式ものづくり学校設置、人材育成支・援を通じたランニングコスト削減となる。こうした、土地建屋の取得や電力・水の確保、許認可

取得支援、工場周辺サービス等を整備し、コンセントをつなぐだけで、簡単に操業できる環境やサービスを提供する**プラグ&プレイ型貸工場**をコンセプトに掲げる。工場タイプはレンタル型（賃貸マンションタイプ）とオーダーメイド型（注文住宅タイプ）がある。レンタル型は、2000㎡～3000㎡の2棟あるが、現在、満床のため、3棟目の建設を検討中。オーダーメイド型は、フェーズ1・2・3があり、フェーズ1は満床であるが、約10万㎡の空き地がある。タイプ別貸工場を紹介しているが、今後は、レンタル型でスモール&クイックスタートし、将来的にオーダーメイド型で安定操業体制への移行をモデルケースと捉える。

2つ目は、【優秀な人材の確保が困難】には、ホワイトワーカー（間接部門）では労働環境の重視、ブルーワーカー（製造部門）では工業用人材の確保が困難、新卒の採用率が低いなどの課題があるが、求職者への重視ポイントを、通勤手段のサポート、食堂の充実、福利厚生・基本的な設備など働く環境とする。解決策として、食堂では、団地内の従業員の50%以上の食事を提供（デリバリーサービス）、医務室では、看護師の交代勤務による24時間対応、24時間救急車サービス、AED、酸素ボンベ整備、また、通勤バスは、GPSによる定時運行管理、ドライブレコーダー完備、ドライバー向け危険予知トレーニング実施する。更に、人材育成面では、日本式ものづくり学校を団地敷地内に併設、1959年設立の技術教育分野で強みを持つ教育機関（NTTE）と連携し、導入教育（初期研修）3ヶ月＋入居企業での（OJT）33ヶ月の3年間のプログラムを提供する。当校は、貧困層への教育機会の提供、日本式ものづくりの考え方を指導と将来の現場リーダー育成、地域出身者の雇用、地域社会の発展への貢献を目指す。また、学生に求める人物像を、規律とチームワークを具えた信頼できる人材、知識に加え、現場経験を積んだ人材、日本企業への深い理解と掲げる。

3つ目は、【労務問題や法制面への対応】では、グジャラート州は労務問題が比較的少ないが、ストライキやデモはゼロではなく、当工業団地周辺地域でも発生し、過去には暴動も起きていた。解決策として、テーマパーク入居企業を含めた、日系工業団地の日系企業代表者9社が、JETROの音頭で、定期的に代表者会議を開き、マネジメントサポートによる市場情報、各種法令改正等の情報交換・共有、対応協議の場を運営し、重大問題発生前の未然防止に努める。



マンダール工業団地入口

【所感】

豊田通商インディア社が、インド国内におけるテクノパーク開発事業を展開し、インド進出企業を進出検討から会社設立、その後の入居、そして生産開始までを併走支援する。現在、マンドル工業団地に入居する9社が、当面の課題への対策を実践してはいるが、周辺地域での労務問題発生事例もあり、代表者会議での協議を通じた未然防止体制に取り組む。更に、人材育成の観点から、日本式ものづくりの考え方を指導し、地域社会の発展にも貢献する。経営面からは、コスト低減、現地調達化に向けたプライチェーンの充実強化が重要となり、現地の法制度や商慣習に合わせた業務標準規程の策定も求められると考える。

日印政府共同PTの基、経産省が認可した、日本式ものづくり人材育成学校のトレーニング風景と貸工場の内部を見学した。ものづくり学校での学生採用プロセスは、当初100名程度を最終20～30名程度までに絞り込み、人材を選抜する。これまで、学生が、61名卒業、そのうち、45名が日系企業に勤務、日本企業と現地雇用をつなげる社会貢献に寄与する。地道ではあるが、日本にとっても、インドにとっても大切な取組である。貸工場の中は、ガランとしていたが、レンタル型として操業を向かえるが、将来的にはオーダーメイド型安定操業への移行モデルケースと見据える。

豊田パーラト（TBIS）が取り組むマンドル工業団地テクノパーク事業は、多くの課題の解消と成果を挙げている。その中でも、インド政府の理解、協力が必須であり、欠かせないと考える。インド国内における、今までに、日本が、日本企業が行った実績を基に、日印協調体制の一層の充実がインド進出の大きな鍵を握る。

◆グジャラート国際金融技術都市 (GIFT CITY) ～12月23日 (月)

【概要】

GIFT CITY内クラブで、※ネクストバーラトベンチャーズ IFSCプライベートリミテッド (以下、ネクストバーラト) が主催するNext Billion FORUM(ネクスト ビリオン フォーラム)が行われた。パネルディスカッションでは、インド独立100周年を迎える2047年を見据え、政策、金融エコシステム、社会的取組等を通じた、農村地域のコミュニティやインフォーマル経済に内包される労働者のエンパワメントを議論する。

GIFT (GUJARAT INTERNATIONAL FINANCE TEC) CITYは、インド初の最も先進的なスマートシティで、モディ首相の構想による国際金融サービスセンター (IFSC) が経済成長を後押しする新しい拠点となる。全体敷地面積3300エーカーに、国内関税地域625エーカーと特別経済区 (SEZ/IFSC) がある。アクセスは、アーメーダバード国際空港から所要時間20分、新幹線ターミナルから所要時間15分、また、メトロ、高速道路にもつながる。また、経済基盤強化プロジェクトが、地域冷却の革新性、最先端のAWCS (自動廃棄物収集システム)、ゼロ排水管理、信頼性の高い電力インフラを整備する。オフィス設立を目指す企業へ、国内外のビジネス拠点となる優れた環境を提供する。

※ネクストバーラトは、スズキ株式会社が2024年に設立したインドにおける100%出資の子会社で、合わせて、ネクストバーラトが運営するネクストバーラトベンチャーファンドー1を設立する。本社をバンガロールに、GIFT CITYに新たな拠点を、ハイデラバードにその他の活動拠点を設置する。インドにおける社会課題の解消やファンドを通じた社会起業家への支援、投資を行う。更に、モビリティ分野を超えた社会貢献を目指す。

本フォーラムは、農村地域やインフォーマル経済に属する「次の10億人 (ネクストビリオン)」に焦点を当て、その可能性や課題の議論を深めと共に、2047年までの大きな成長ビジョン「バーラト2047」を実現する戦略的なロードマップを考察する。

パネリストは、インドが2047年までに先進国となるには、日本の生産管理の考え方等を含めた日本の協力が不可欠で、税制の整備、インフラの整備、技術・人材育成等を整備し、輸出国となる必要がある。女性の組織化・ミクロ企業への取組が必要であり、デジタル決済へのスピーディー感も高く、90%の女性が口座を持つ。現在、インド全体では80%の人がデジタル決済を行う。こうした事を実現する上で、必要なのは資本である。多くの貧困を救うためには、大企業ではなく、ミクロ企業、零細企業や、女性たちへの投資を振り分ける必要がある。40年前、スズキが大きなリスクを冒しても、遅れていたインドへ投資をした事、新しい価値観をもたらしてくれた事に、スズキをインドの家族と譬え、感謝を表す。ネクストバーラトのインパクト起業家への支援が、羊から得た羊毛を住宅用断熱材に変え、収入増加に繋がった実績例を評価する。

ネクストバーラトは、今まで、総人口14億人のうち、4億人の方々と関わってきたが、残りの10億人とは関わっていない。これからは、「次の10億人」と呼ばれるNextBillionと関わり、インドの経済成長の発展への貢献を掲げる。そこで、税金を納めており、オフィスで働いている人を india1、トゥクトゥクのドライバー、ストリートで食べ物を販売しているようなインフォーマルセクターの人を india2、農村部に住んで農業に関わる人を

india 3、と区別し、この india 2 + india 3 にフォーカスし、この人々の収入を上げるビジネスをする起業家を支援する。「次の10億人」の価値を創出するためには、インド各地で問題を解決するためにビジネスを展開するインパクト起業家を支援し、その価値を最大化する。具体的な起業家の実績例を、一つ目は、コットン農家の新たな収入創出、二つ目は、羊毛を建築用断熱材へ商品化した新たな羊毛価値創出に挙げる。こうした、インド国内にいるインパクト起業家100人以上にインタビューを行い、現在、享受出来る支援に何が欠けているか調査した。その結果、大きく3つのギャップが判明する。1つ目は、従来の投資機関は、急成長できるスタートアップ起業家を求めるため、このような技術体系のインパクト起業家に投資できる機関が不足する。2つ目は、スタートアップの起業家は助け合いながらビジネスを成長させる好循環なコミュニティが出来ている。一方、インパクト起業家は、インド中、津々浦々に散らばり、1つのコミュニティがなく、それぞれが孤立している。3つ目は、インパクト起業家は無名のため、ビジネスを成長させるための鍵となる外部のネットワークが乏しく、特に国外のネットワークのつながりがほぼない。こうしたギャップ（問題）を解決するため、インパクト起業家が、より早く、着実にビジネスを成長させ、次の10億人に還元することが出来るよう、支援活動を行う。1つは、4ヶ月間のインパクト起業家支援プログラムを通して、インパクトと起業家のコミュニティの構築、投資機会を促進。次に、ネクストバーラトのシンクタンクとして、インパクト起業家が必要とする情報、ネットワークを提供。最後に、日本企業へインドビジネス機会の理解及び新市場の共同創造の場の提供を目指す。



グジャラート国際金融技術都市 (GIFT CITY) 全景



Next Billion FORUM(ネクスト ビリオン フォーラム)会場

【所感】

ネクストパーラトは、世界金融をリードする GIFT CITY 内に拠点をもち、「次の10億人」と呼ばれる NextBillion と関わる。インドは、この農村地域やインフォーマル経済に属する NextBillion に焦点を当て、2047年までの大きな成長ビジョン「パーラト（インド）2047」を実現する戦略的ロードマップを始動、モディ首相の構想による国際金融サービスセンター（IFSC）が経済成長を後押する。まさに、GIFT CITY を、インドの金融・技術の未来を変革する新拠点と位置付ける。「次の10億人」が「今の10億人」となるのに、どんな関わりをするのか、どれだけの時間をかけるのか。2047年以前に、「パーラト（インド）2047」が実現するのではないかと予感する。マルチスズキの40年を超える経験、実績を尊重し、更に、情報収集共有を通じた活動を、インドとの相互人材育成、交流を創出する機会と捉える。

◆アーメダバード市長表敬～12月24日（火）

【概要】

グジャラート州と友好協定を締結する静岡県訪問団に同行し、インド有数の大都市で、成長著しいインド経済をけん引するアーメダバード市と本市の連携、交流の可能性を探るため、アーメダバード市長を表敬訪問する。アーメダバード市は、モノづくりの街・日本の経済けん引の街、本市とも、工業発展面での親近感があり、経済、文化、スポーツ様々な分野での友好関係を構築すべき大切な都市である。2025年9月、本市開催のインドフェスティバルは、新たな交流への期待を深める。中野市長は、交流促進に向けた取組を記した文書を、アーメダバード市長へ直接渡し、両市の一層の発展、多分野での交流への考えを伝える。具体的な内容は、カイト（凧）を介した交流、インドフェスティバル in Hamamatsu へのインドフェスティバルブース設置・招待、人材獲得・人材交流の総合支援、スマートシティー、カーボンニュートラルに取り組むスタートアップ等の企業間交流に加え、文化・スポーツ分野の交流、中高生の交流等である。



アーメダバード市長表敬訪問

【所感】

今回、こうしてアーメダバード市長への表敬訪問が実現したのは、[REDACTED]氏が2024年2月に外務大臣から日本国名誉領事に任命され、同年10月4日にアーメダバード市にインド初の名誉領事館が開設されたが、この[REDACTED]氏の功績によるものである。改めて、感謝致します。アーメダバード市長は、現在、教育、医療、観光分野等を前向きに進めているが、新たなイノベーションや意見交換、中学生、高校生等若い内からの交

流等を、本市との将来関係の始まりと期待をする。更に、「世界は一つ」と話す市長のグローバル感に、アーメダバード市の世界観、意気込みが見える。今後、グジャラート州との連携、アーメダバード市との MOU（基本合意書）締結に向けては、アーメダバード経営者協会（AMA）パテル氏との情報共有、連携、更には仲介が重要と考える。

◆グジャラート州政府訪問～12月24日（火）

【概要】

グジャラート州は、インド北西に位置し、西は隣国パキスタン、南はアラブ海、東・北は他州と接する。州面積は、全国土の6.0%に相当する19.6万km²、州人口は、全人口の7.7%に相当する約6500万人。綿花生産が盛んで、海に接する地の利を活かした東南アジア、中東への貿易を行うが、近年は、化学産業や製造業等を集積する。グジャラート州には、日本企業40社進出、ジェトロがイベント等を開催し、日本企業進出のサポートをする。

静岡県がグジャラート州とMOU（基本合意書）締結を行う。静岡県は、インド国内での工業化が最も進展するグジャラート州は、豊かな文化と先進的な取組が背景にあり、注目すべき地域と認識する。更に、静岡県議会は、「静岡県と海外の地方公共団体との友好交流に関する条例」に基づき、インド共和国グジャラート州との友好協定の締結を満場一致で賛成議決した。知事は、このパートナーシップ締結が、経済、教育、文化、観光等様々な分野で、グジャラート州と新たな歴史・未来を作り上げると意欲を語る。

中野市長は、本調印式の前に、アーメダバード市長への表敬訪問、今後の交流、協力について、有意義な対話を紹介したことを触れ、本市でインド国籍の市内移住者が年々増加している状況、インドからの留学生の増加、インド国籍の方々の雇用の増加、また、その一方で、本市からインド進出を考える企業も現れ、こうした、人材交流、経済交流が進んでいる中、官民ともにインドとの連携を一層高める機運が高まっていることにも触れる。更に、グジャラート州、アーメダバード市、静岡県、浜松市が連携、友好関係構築への期待を伝える。



静岡県・グジャラート州 MOU（基本合意書）締結

【所感】

グジャラート州とアーメダバード市は、主従関係にあり、今回、静岡県はグジャラート州と友好協定を締結、本市はアーメダバード市と連携可能性、今後の友好協定締結を模索する。今後、インドにおける静岡県、浜松市それぞれの友好関係は、どのような役割を担うのか、また、グジャラート州とアーメダバード市は、州と市でどのような連携をするのかを見定める必要がある。

◆アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）訪問～12月24日（火）

【概要】

グジャラート州印日友好協会は、学術、ビジネス、文化の分野における日印関係の理解促進を目的に、1975年に設立。その後、2000年頃、アーメダバード経営協会（AMA）と連携し、2015年には、AMA内に日本情報研究センター（通称「AMA日本センター」）を設立。「AMA日本センター」は、日本語、芸術、文学、歴史、文化、伝統、ビジネス、経済、経営、及び日本に関連する多様な側面の研究・学習を奨励し、促進する。会長は、在グジャラート州日本国名誉領事に就任した、XXXXXXXXXX氏、グジャラート州印日友好協会会長も務める。

協会において、静岡商工会議所・浜松商工会議所・スズキ等で構成する経済団が、XXXXXXXXXX

XXXXXXXXXX氏他と面談を行う。

鈴木俊宏スズキ株式会社代表取締役社長は、面談の機会に尽力されたAMAの皆様への謝意と、NGOであるAMAが、アーメダバードの未来を担う若い経験層や地域の方々に、研修の機会や、学術、産業、文化、多岐にわたる交流の場を提供している事への敬意を伝える。スズキ・モーター・グジャラート（SMG）が2017年に操業を開始したが、スタートに向けては、日本式、スズキ式の働き方を研修に取り入れ、多くの日本人指導員を派遣する。鈴木氏は、今回、AMAが日本式、スズキ式の考え方を検討すると聞くが、改めて、スズキの考え方、働き方を、インドの皆様に限らず、社員にもしっかりと検証する必要がある、このAMAの取組を好機と捉え、今後、セミナーの開催等への協力を約束し、賛同する旨を表明する。

XXXXXXXXXX静岡商工会議所会頭は、冒頭、静岡市に触れ、人口は約67万人、製品出荷額は2兆2000億円、その内、4割が電気機器、1割強が食料品、1割弱が化学製品で、良港清水港に恵まれ、海外へ多くを出荷する一方、インバウンドにおいて、海外の豪華客船が入港するが、日本国内で唯一、富士山が展望出来る港でもある。是非、清水へお越し頂きたいとエールを送る。静岡商工会議所は、13000の企業法人会員を擁し、主に、経営支援、観光誘客、行政提言を行うが、今、特に力を入れているのが、デジタル化、カーボンニュートラル化、いわゆるグリーン化で、今後、インドと協力し、こうした共有目標に向けた取組を進める。

XXXXXXXXXX浜松商工会議所会頭は、今回、初めてアーメダバード市を訪れた感動と、アーメダバード市はインド経済をリードする大変重要な都市であり、そのリーダーである経営者の皆様のお迎えへの感謝を伝える。更に、こうした機会を繋ぐXXXXXXXXXX氏への感謝を合わせて伝える。結びに、XXXXXXXXXX浜松商工会議所副会頭を、インド国内における実績を有する、インド経済に貢献するソミック石川の経営者と紹介する。

中野祐介浜松市長は、XXXXXXXXXX氏、アーメダバード経営協会皆様にお招きの謝意を伝える。グジャラート州、アーメダバード市は、成長著しいインドにあって、最も日本の伝統、文化に造詣が深く、日本的経営を学び、日本との絆、連携、ゆかりが深い所である。これも、浜松を代表する企業であるスズキが、グジャラート州に拠点を構えるご縁のお陰と考える。浜松市とアーメダバード市は、工業都市であり、似通った性格をもつ都市である。今、本市の風がここにあるが、風（カイト）はアーメダバード市でも有名な祭りであり、両市が連携、協力関係を一層深める事が、日本、インド両国の成長、更には世界の発展への貢

献に繋がる。今回の訪問を契機に、関係皆様にはこれからもご支援を頂き、両市の連携の一層強化を目指す。

◆全日本空輸(株) ■インド総代表との意見交換会～12月25日(水)

【概要】

■氏は、1991年にANAに入社、パリ、北京、ムンバイの駐在を経て、現在、デリー支店長兼インド総代表を務める。駐在中のムンバイやデリーで出会った現地人の勤勉さ、明るさから、インド人の魅力を体感する。特に北東インドの人々の顔立ちがアジア人に近く、食生活や感性も日本人と似ており、文化面でも親和性が高いが、インド人は日本を知らない、日本人もインドを知らないことを痛感する。■氏は、こうした事を踏まえ、インド国内技能実習生送出し機関と接触し、情報収集を行うと共に、インパールやダージリン等のインド地方都市に直接出向き、多くの若者へのヒヤリングや日本の良さを説明する一方、日本国内では、地方自治体や宿泊、介護の業界団体等に、インド人材説明、講演活動を実施し、更に、実際に来印し、インド人の魅力を実感してもらう取組を行う。

こうした■氏が取り組む活動を通した、インド人材、インド国内の人材送り出し機関の現状等を伺い、本市への人材交流の可能性の高めを探る。

インドは、ムンバイ、デリー、バンガロール、ハイデラバード、アーメダバード、チェンナイ、コルコタ、スーラトの8大都市がTier 1(ティアワン)と呼ばれる人口400万人以上の都市であるが、合わせても人口1億人に満たない。残りの13億人のインド人は、圧倒的に農村部にいる。インド人材の現状は、20代若者等の若年層は就職難、一方、高度人材からワーカーまで世界中に人材を輩出する。インド人は、性格・資質は、温厚、誠実、明るい、日本語習得能力の速さ等の高い語学力、親日性、アニメ好き、日本人に似た顔つき、食習慣で、日本には、良好な二国間関係、安全で親切な国、町がきれい等のイメージを持つ。また、インドにおける送り出し機関は、アクティブな機関が少なく未成熟、他国への送出しのメリットが大きく日本を知らない、ブローカーの存在が無く、非常にクリーンな送り出しを行う。

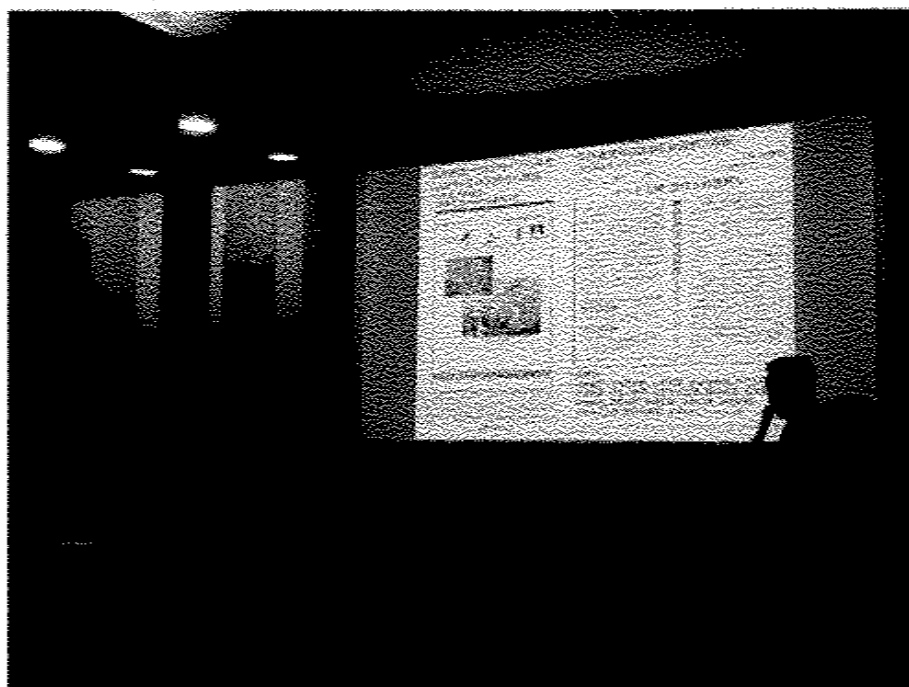
インド人材、送り出し機関等の現状を踏まえ、「インド人技能実習生・特定技能拡大に向けた取組」を行う。送り出し機関の実態把握では、送り出し機関33社中23社とミーティングを実施した結果、実績があるのは18社で悪質なブローカーの存在も無く、実習生の立場に立った対応で透明性が高いが、一方、日本の監理団体とのコネクションが未熟と日本での営業不足を指摘する。実習生総数拡大では、①送り出し機関との連携に向けて、定期的な情報交換と今後のプランの確認、日本の受け入れ団体・雇用者や他国の取組等に関する情報交換、インド各地でセミナーに登壇し日本の良さをアピールする。②インド及びインド人の理解促進について、日本アジア人財協会のニュースレターや月間インドへの寄稿または記事掲載、地方自治体(高知・福岡・和歌山・山形・鹿児島・鳥取・島根・大分・山口・沖縄)、へのアプローチ、ACN、NNA、日経ビジネスに■インタビュー記事掲載、セミナー参加者へアプローチする。③直接的なアプローチについて、人材不足業界(宿泊・介護・農業・建設・パン製造等)へ直接アプローチ、経済団体・業界団体(経済同友会・商工会・宿泊団体・食団連・介護関連等)へアプローチ、セミナー参加者へアプローチする。④送り出し機関と監理団体・日本企業・雇用主とのマッチングについて、日本での営業力が乏しい

送り出し機関を監理団体等に紹介、日本のインド人実習生ニーズに合わせ、その分野に強い送り出し機関を雇用主や監理団体に紹介する。

技能実習制度の状況は、①日本経済に外国人技能実習生は不可欠である、②2019 年末までに、日本は 40 万人以上の外国人技能実習生を受け入れるが、半分以上はベトナムから、他にフィリピン・インドネシア・中国・ミャンマー・カンボジア等でインドからは 223 人のみである、③ベトナム人技能実習生の失跡、ブローカーの暗躍、ネガティブな報道による外国人技能実習制度のイメージダウンする、④ベトナム人が 3K 業種を敬遠、人材の高騰により、代替国選定の準備が必要となる、⑤ASEAN 諸国の人材が枯渇する、⑥ミャンマーの政権変更による将来への不安がある。法務省のデータでは、2022 年 3 月のビザ発行再開以降、2023 年 6 月末までに、日本は 35.8 万人以上の外国人技能実習生を受け入れ、特定技能は 17.3 万人となるが、インドからは 1308 人である。

インドにおける技能実習制度・特定技能の状況は、2017 年 10 月～技能実習制度協力覚書、2018 年 7 月～技能実習生第 1 期生初訪日、2021 年 1 月～日印特定技能提携、2022 年 2 月～介護試験開始、受験者伸び悩み、2022 年 3 月～農業試験開始、2023 年 10 月～宿泊業試験実施説明会開催（於 デリー）、2023 年 12 月～建設業試験開始、2024 年 3 月～宿泊業試験開始（於 デリー・ベンガル）と推移する。

具体的には、2023 年、福井県・熊本県・高知県が初のインド人材（農業）受け入れ、2022 年から 2024 年、日本旅館協会及び全旅連青年部へのアプローチとインドで特定技能試験開催、2022 年、山形老人福祉施設協議会主催による介護インド人材説明会開催、その後、関係者インド視察、2023 年、鹿児島経済同友会主催のインド人材講演会開催、インド実習生の可能性紹介する等の実績を重ねる。また、2023 年、日印協会の月刊インド 5 号は、共同通信社の「インド人材後押し」記事を取りあげ、更に、日本の全国紙はその記事内容を掲載した。



全日本空輸(株) ■ インド総代表 取組説明

【所感】

中野市長は、浜松市のインド系住民は 200 人台で推移してきたが、昨年 400 人、2024 度で 800 人程度に増加見込みを挙げ、インド人材交流、人的交流の拡大に向け、受け入れ環境の整備等を進める必要性を強調する。世界最大の人口を持つインドは、高度人材だけではなく、工場等の製造現場、医療、福祉、介護、観光、運輸等のサービス業分野、農業、林業、漁業の一次産業の人材も合わせた、様々な潜在力を有する。

■■■■氏は、インド人は、家族を非常に大切にする民族性があり、長期単身滞在はなく家族帯同となるため、医療、教育等の社会環境の整備、充実が重要となる。そのため、病院における症状の説明、運転免許証の取得、車のリース提供、更にインターナショナルスクール設置等、「家族が生活しやすい都市としての機能を備える浜松」を選択すると助言する。

既に、国内で行われているインド人材活用事例を検証し、今を好機と捉え、本市が求めるニーズとインド人材とのマッチングが急務である。インドとの共生は近い。

◆インド工科大学ハイデラバード校訪問（覚書締結他）～12月26日（木）

【概要】

インド工科大学ハイデラバード校（IITH）は、インド国内にあるインド工科大学（IIT）23校の一つで、1950年代に伝統校と言われる第一バッチの7校が設立された後の8番手として、IITHを含む8校が2008年以降に設立された。更に、2016年以降に7校が追加された。IITHは、伝統校に比べ、インフラ整備、教員採用が遅れているが、伝統校の7番目とランキングが一瞬逆転したことがある。ランキングが入学する学生の質に直結するため、良い学生による良い研究が大学ランキング上位へ繋げる事をIITHのシステムとする。イノベーション分野では、ランキングが伝統校よりも上で、インド全体で3番目、規模、キャパシティーでは太刀打ち出来ないところもあるが、勝つところは勝っていく事をハイデラバード校の方針とする。ハイデラバード校の学長は、筑波大学で研究者であった経歴を持ち、日本との連携に非常に前向きに取り組んでいる。

IITHは、教員数約320名、学生数5000人を超え、様々な学科があるが、コンピューターサイエンス・シビルエンジニアリング・電気工学を中心に現在約18学科と、大学院プログラム等を柔軟に作るシステムがある。IITHは、AIを重要な研究分野と捉え、世界で3番目にAI専門学科を作り、スマートモビリティ・ロボティクス等の研究者等、AI分野の権威と呼ばれる先生方が多く在籍する。

IITHは、土木・化学・機械工学等の伝統的なプログラムに加え、気候変動や文化遺産の研究、保護、IT系廃棄物等、社会課題に直接アプローチする学科、大学院のプログラムがある。世界中に、ある研究分野で最前線にいる権威と呼ばれる皆さんに声をかけ、「卓越教授」を依頼、日本からは、慶応義塾大学教授、京都大学教授の2人が就任する。

IITHは、特に、起業文化をどう醸成するかにかなりの力を割く。学生は、基本的に、ジョブマーケット、採用マーケットにおいて、シートを取り企業へ応募するが、シートの奪い合い、取り合いではなく、シートを新たに生み出し、他の学生が就職出来るような社長になれると指導する。更に、起業に向けたリードプロジェクトがあり、学生は、ビジネスになりそうな技術アイデアを提案、その内容の確かさを確認すれば、開発予算10万ルピーを受け取り、スタートアップする場合は、インキュベーションセンターに入って起業を進める。うまくいけば、大学での学位を取らなくても、卒業証書に代わる「終了証」を受領する。もし、会社運営に失敗しても、その年の新卒採用の就活が出来るセイフティネットがある。こうした、学生を守りながら、挑戦が出来るビジネスエコシステムを、IITHの特徴として力を入れる。

IITHは、JAPANdeskもあり、大学構内建物は、多くが日本政府ODAを活用、インキュベーションセンターと大事な建物は円借款で造られており、浜松市を始め、日本の企業や大学の積極的な活用を望む。



インド工科大学ハイデラバード校 構内

【所感】

IITHの卒業生は、日本の楽天・NTTAT アドバンステクノロジー・メルカリ・Yahoo 等で働く。また、毎年、JETRO が関わり、学生に向けた、JAPANDAY という日本企業を集めた日本企業への採用促進イベント、就職促進イベントをハイデラバード校大講堂で行うが、立ち見が出る位、日本企業への関心の高さが窺われる。前述のネクストバーラトの社長は、IITHの卒業生でスズキ(株)に就職5年で社長となり、学生にとっての夢でもある。インドは、日本を優しくて行ける国、アメリカを憧れの国だが行きにくい国と、国家風土を評する。

本市は、インド人材、人的交流の中、様々な産業分野で、いかにインド人材を活かすのか、そのノウハウをどのように水平展開するのか。IITH との関係構築に何を見出すのか。何を期待するのか。大切に重要な好機とする。

【概要 MOU 1】

「浜松市とインド工科大学ハイデラバード校との人的・経済交流に関する覚書」

日本国 浜松市長中野祐介氏とインド共和国 インド工科大学ハイデラバード校学長 ■■■氏は、2024 年 12 月 26 日、インド工科大学ハイデラバード校において、日本語及び英語による覚書各 2 部作成し、両者代表が基本合意書（MOU）に署名する。本覚書に基づく協力は、双方が本覚書に署名した日に発効する。今後、浜松市とインド工科大学ハイデラバード校は、相互理解と友好関係を深め、双方の人的・経済的交流促進に協力して取り組む。

中野祐介市長は、■■■■学長が去年、今年と来日し、その際の有意義な会話が覚書締結への大きな一歩となったとした上で、本日の覚書締結は、浜松市とインド工科大学ハイデラバード校との新たな協力関係の扉を開き、特に、人材交流を中心とする協力関係の構築が、両者にとって大きな可能性に繋がると期待を寄せる。また、本締結にあたり、大変なお力添え頂き、橋渡しを担った■■■■教授に謝意を伝える。今回の締結による協力関係を通して、浜松市内企業と IITH 卒業生のマッチングや学生、研究者皆さんとの相互交流による知識、経験の共有等に大いに期待すると共に、グローバルな視点を備えた人材育成とその受け入れに、全力を傾注する。同時に、IITH の皆様にも、日本の文化や技術に触れる機会を提供出来る喜びも伝える。

中野祐介市長は、既に、ハイデラバード校と静岡大学は学生交流を始めており、また、来年、■■■■教授に来日、浜松市へお越し頂き、本市の高校生向け講演を予定、次の時代の両地域を引っ張る若者同士の交流を深める。スズキイノベーションセンター（SIC）等を通して、本覚書による連携を、産業・経済の発展への貢献にも繋げる。



「浜松市とインド工科大学ハイデラバード校との人的・経済交流に関する覚書」調印

【概要 MOU 2】

「浜松市とネクストバーラトベンチャーズとの覚書」

日本国 浜松市長中野祐介氏と※ネクストバーラトベンチャーズ IFSC プラベートリミテッド ヴィブール・ナット・ジンダル社長は、2024 年 12 月 26 日、インド工科大学ハイデラバード校において、日本語及び英語でそれぞれ 2 通の正本を作成し、両当事者が基本合意

書（MOU）に署名する。本覚書に基づく協力は、両当事者が本覚書に署名した日に発効する。今後は、両当事者間の産業交流促進と、浜松市をインドと日本産業連携の架け橋と位置付け、地域の産業成長への寄与に取り組む。※前述参照

両当事者は、①インドのスタートアップと浜松企業とのネットワーク構築、②スタートアップをはじめとするインド企業の市場調査と浜松市への進出促進、③浜松企業のインドへの市場調査と進出促進を推進するため、人材交流、知識共有、機会創出を行う。

中野祐介市長は、インドは急速な経済成長、イノベーション等において、世界的に注目を集めている中、同時に農村部を中心に様々な社会的課題もある。こうした中、ネクストバーラトが社会課題に対して、創造的なソリューションを生み出すベンチャー、スタートアップへの支援を行う、こうした様々な経験から浜松市が学ぶことが多い。今回の勉強を通して、単なる知識や情報交換に留まらず、実践的な人材交流を実施する。また、浜松市の経験をインドの課題解決に貢献し、インドで培った課題解決の手法を持ち帰り、浜松市を更に発展させていく。早速、来年度、浜松市職員をネクストバーラトへ派遣し、人事交流を進める。

ヴィプール・ナット・ジンダル社長は、バーラトはインドの公式名称であり、ネクストバーラトは「次の10億人」を創出するものであると強調する。ジンダル社長は日本での経験を通して、浜松地場企業の経営持続性に加え、やままいか精神を身近に感じる感性を持つ。ネクストバーラトの主な活動を前述※で記述する。

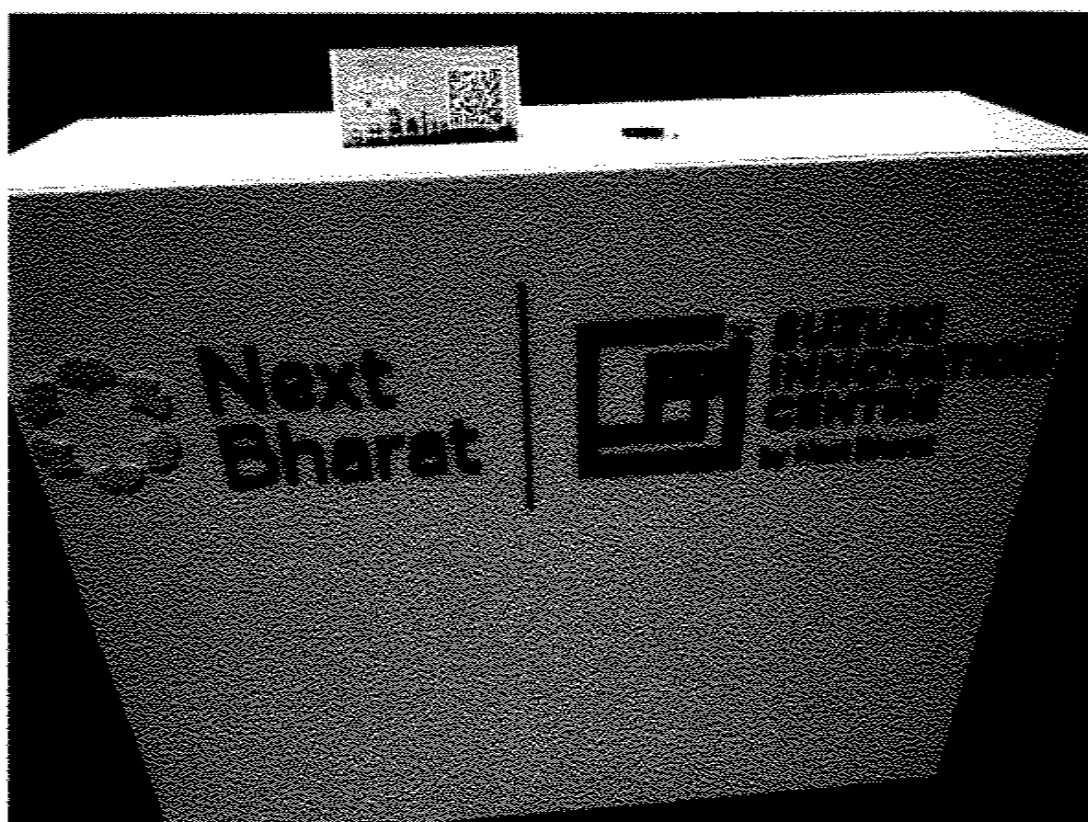


「浜松市とネクストバーラトベンチャーズ覚書」調印

◆スズキイノベーションセンター（SIC）IITH構内 ～12月26日（木）

【概要】

SICは、スズキ(株)がIITHと共同で同校構内に開設した交流拠点であり、ネクストパーラトベンチャーズの組織の一部でもある。スズキエンジニア、IITHの教員、学生との連携による自動車同士の対話システム構築や、包括的な経済成長に向けた農村開発等での人材交流、情報交換を行い、研究開発や人材育成を繋ぐ。具体的には、16人の教授が14のプロジェクトに取り組む活動もあり、その中に、■■■■教授も名を連ねる。また、インドの社会課題をビジネスの力で解決する事を目的に、グジャラート国際金融技術都市（GIFT CITY）内に拠点を設けるネクストパーラトベンチャーズの傘下に入り、ファンドを通して、農業、金融包摂、サプライチェーン、モビリティ分野等で活動する起業家への支援、投資を行う。基本的には、人材交流の拠点として、将来の共同研究や教育プログラム開発等の可能性を探る。



スズキイノベーションセンター（SIC）入口

【総括所感】

浜松市は、スズキ(株)100%子会社のネクストパーラトベンチャーズ及びインド工科大学ハイデラバード校（IITH）それぞれと「MOU」を締結する。一方、スズキイノベーションセンター（SIC）は、ネクストパーラトの部署の一つであり、IITH構内には事務所を構える。また、ネクストパーラトは、静岡県が「友好協定」を締結したグジャラート州における、先進的なグジャラート国際金融技術都市（GIFT CITY）内に新たな拠点を開所する。こうした状況を踏まえ、ハイデラバード州・グジャラート州・アーメダバード市の相関を整理

し、浜松市内企業のインド人材ニーズ意向調査及びその実態に基づく浜松市としての役割が重要となる。浜松市は、「MOU」締結の好機を逸する事なく、インドとの連携を通して、産業、経済の持続的な発展、促進体制構築を図り、未来の浜松を創造する時である。

また、受け入れ環境整備の面から、市内在留国籍別外国人住民数は、2024年11月現在、ブラジル・ベトナム・フィリピン他 30,077 人であり、インドは 683 人で急速に増加し、高度人材 328 人とその帯同家族 241 人は合わせて 569 人で全体の約 83% となり、日本語教育、インターナショナルスクール等への取組も急務である。

◆アップパールスタジアム視察 ～12月26日（木）

【概要】

アップパールスタジアムは、テランガーナ州ハイデラバードにある国際クリケットスタジアムで、ハイデラバードクリケット協会が運営を担う。座席数 39,200、インドのプロクリケットリーグ「インディアン・プレミアリーグ（IPL）」に参加する 10 チームの一つ、サンライザーズハイデラバードの本拠地で、スタジアムのシーズンは、3 月又は 4 月に開催し、5 月に閉幕する 7 週間程度である。2008 年から始まった「インディアン・プレミアリーグ（IPL）」は、インド国内外の企業が投資、世界最高のクリケットリーグとしての注目を集め、2023 年には平均観客動員数が 33,000 人を超える。1934 年、最初の国際試合を開催して以来の様々な歴史的な経過や、クリケット独特のルール、試合の仕組み等を伺う中、2001 年公開のインド映画「ラガーン」に触れた。この映画は、1893 年、イギリス領であったグジャラート州チャンパネールが舞台、ラガーンとは地税の事で、イギリスと村との間で地税の免除を賭けて行われたクリケットの試合の話である。1893 年、チャンパネールは前年から全く雨が降らず、村では不作が続くが、イギリス将校は年貢を 2 倍にすると告げる。村民は、直訴に行くが、将校がイギリス軍のクリケット試合観戦中のため、待たされるが、何をしているのか試合を全く理解出来なかった。直訴への答えを、「仕方ない」と言われ、村民は、「3 ヶ月後にクリケットの試合を行い、村民が勝てば 3 年間年貢を免除、負ければ年貢を 3 倍とする」を提案する。しかし、11 人の選手も集まらない、ルールも知らない等、様々な試練を乗り越え試合を迎える。村人チームも素人としては頑張るが、イギリス軍の攻撃が激しく、絶対絶命、最後の打者まで追い込まれたが、イギリス軍のミスで、村人チームが勝利する。インドにとって、クリケットは象徴的な大切なものとなる。インドとパキスタンの試合では、お互いに対抗意識を持ち、パキスタンの工場は休み、インドの工場は休まないが、常時、試合状況を工場内で流す等、クリケットはインドの国民的スポーツとなる。

クリケットは、イギリス植民地時代にイギリス人が始めるが、次第に、インド上流階層やエリート層に広がり、インド都市部を中心に急速に浸透する。1947 年の独立後、インド国内で更に発展、自国文化の再確認の一環として、国民的スポーツの地位を確立する。インド国内では、リーグ戦、クラブチームの増加、インフラ整備が進む。現在、クリケット競技人口は、約 3 億人と言われる中、インドは、少なくとも 1 億 5000 万人がいる、世界一クリケット競技人口の多い国と認知され、クリケットは、単なるスポーツを超え、インドの経済、文化に大きな影響を及ぼし、存在感を強める。

【所感】

クリケットは、インドの国民的スポーツへと高め、自国文化の醸成へも寄与する。スポーツが内在するポテンシャルは、インド発展に大きく貢献、今後も大きな牽引力を発揮すると予感する。インドにおけるクリケットの歴史、取組を、本市スポーツ政策の一助にと期待を込める。



アップパールスタジアム

インド視察報告書

自由民主党浜松
松本 康夫

■視察先■ スズキモーターグジャラート

■日 時■ 2024年12月23日（月）10:00～12:00

■所 感■

アーメダバード市から約2時間半、バスで移動する道中では、広大で活気あふれるインドの風景が広がり、この国のダイナミズムを肌で感じる事ができた。今回視察したスズキモーターグジャラート工場は、まさにインドにおける日本企業の成功事例の一つであり、その背景には40年前にスズキ株式会社がいち早くインド市場の可能性を見出し、果敢に進出した歴史がある。

当時、自動車市場が未成熟だったインドにおいて、スズキは現地のニーズに即した小型・低価格の車を提供し、「徹底したローカライズ戦略」を展開。その結果、現在ではインド国内の自動車シェアにおいて約42%という圧倒的な存在感を誇っている。

視察先の工場では、日本と同様の生産工程が導入されており、自動化が進む中でも品質管理には人的リソースが重点的に投入され、日本式の「ものづくり」の精神が浸透していた。教育・マナーに関する取り組みも徹底されており、現地の従業員が高いレベルの品質管理を実践している姿には強い印象を受けた。また、環境配慮の面でも最新の技術を導入し、持続可能な生産体制を築いている点は、今後の製造業のあるべき姿を示していると感じた。

こうした現地での成功を支えているのは、単なる技術の移転ではなく、人材育成や組織文化の共有といった「人」に対する投資であり、今後は本社で働くインド人材のさらなる増員も予定されているとのこと。本市が抱える製造業における人材不足の課題を考えると、スズキのように優秀な海外人材を積極的に活用する取り組みは、今後の地域づくりにも大いに参考になる。

浜松がグローバル人材の活躍できる地域として成長していくためにも、インドをはじめとする海外との連携を強化し、企業や自治体が一体となって受け入れ環境の整備を進めていくことの重要性を改めて実感した。

■視察先■ マンダル工業団地

■日 時■ 2024年12月23日（月）13:30～14:30

■所 感■

マンダル工業団地では、ASTI や村上開明堂、ROK1 といった静岡県内企業をはじめとする日本企業が数多く進出し、インド市場における展開を広げていた。特に注目すべきは、2017 年から開始された「プラグ&プレイ工場」の取り組みであり、日本企業向けの貸工場として、初期投資や立ち上げ負担を軽減しながらスムーズな事業展開を可能とする仕組みは、多くの企業にとって大きな支援となっている。

一方で、インド進出には依然として様々な課題も存在することが確認された。たとえばインドのように広大な国土を有していても、工業用地の確保は容易ではなく、特に中小企業においてはサプライチェーンの構築や現地パートナーの協力が不可欠である。また、人材確保においても、ホワイトワーカーは採用に時間がかかり、労働環境によって離職率が高くなる傾向がある。ブルーワーカーに関しても、元来の農業中心の地域特性から、工業への理解や慣れが浅く、安定した人材確保には教育と定着支援が不可欠となっている。

そのような背景の中、マンダル工業団地内で実施されている人材育成事業は極めて重要な役割を担っていると感じた。今回視察した教育機関では、パソコンスキルや工作機械の基本操作に加え、安全・品質への意識を含めた「日本式ものづくり教育」が行われており、将来的には現場で指導的役割を担える人材の育成を目指していた。

こうした包括的な支援体制が整った環境は、インド進出を検討する日本企業にとって大きな魅力であり、今後も日本企業専用の工業団地に対する需要は高まり続けると予想される。また、豊田通商インディア社のように、進出時の煩雑な手続きを軽減し、人材育成や現地サポートを提供する存在は、日本企業にとって心強いパートナーである。

成長著しいインド市場への参入は、本市企業にとっても大きなビジネスチャンスであるとともに、グローバルな事業展開に向けた一歩となる。今後は、インドとの関係性をより強固なものとし、企業の進出を後押しする体制づくりを本市としても積極的に模索していく必要があると強く感じた。

■視察先■ グジャラート国際金融技術都市 (GIFT CITY)

■日 時■ 2024年12月23日(月) 17:00~21:00

■所 感■

今回視察した GIFT CITY は、モディ首相の肝煎りにより構想されたインド初の国際金融センターであり、インドで最も先進的なスマートシティとして注目されている。広大な敷地には国際関税地域や特別経済区が設けられ、今なお開発が進行中であったものの、アーメダバード空港からのアクセスの良さ、また将来的には新幹線ターミナルにも近接するという立地の優位性を兼ね備えており、インド経済の次なる中心地としての可能性を強く感じた。

GIFT CITY の整備は、インドが 2047 年までに先進国入りを目指すという国家的目標の一環であり、IFSC (国際金融サービスセンター) を核として、経済インフラの基盤強化が進められている。ただし、今後さらに成長を遂げるためには、税制やインフラ、技術、人材育成など多くの課題解決が必要であり、日本の生産管理手法や人材育成の考え方がインドにとって大きなヒントとなると考える。

本市の企業にとっても、インド市場への進出・協業の可能性は大いに広がっている。特に、インドは ICT 分野の高度人材が豊富でありながらも、欧米志向が強いという現状がある。一方、日本、そして本市においては、まさにそのような人材が不足している状況にあるため、行政・企業・教育機関が連携し、インドとのつながりを強化していくことが極めて重要である。

また、今回の視察では、スズキ株式会社が支援するネクストバーラトベンチャーズ社の開所式にも参加することができた。これは、これまで十分に市場として注目されてこなかった「次の 10 億人 (Next Billion)」と呼ばれる人々に焦点を当て、社会課題の解決と経済的価値創出を両立させるインパクト起業家の支援を目的とした取り組みである。紹介された事例からは、ビジネスを通して社会に変化をもたらそうとする起業家たちの強い意志と、インドの多様で複雑な現実が垣間見えた。

今後、本市が新たなビジネス機会を創出していくためには、こうしたインドの現状を的確に把握し、相互理解に基づいたネットワーク構築が不可欠である。インドとの協業を通じて、共に新市場の創造を目指す姿勢が、グローバル化が進む時代において本市の成長にもつながると確信した。

■視察先■ アーメダバード市長表敬訪問

■日 時■ 2024年12月24日（火）9：00～10：00

■所 感■

今回の視察の大きな目的の一つであったアーメダバード市との友好協定の締結は、残念ながらインド政府からの正式な許可が下りず、実現には至らなかった。しかしながら、浜松市とアーメダバード市は、将来の協定締結に向けて、人的交流や文化的連携、経済協力など幅広い分野での連携を進めていくことで一致し、大きな一歩を踏み出すことができた。

視察中には、中野祐介市長からアーメダバード市のプラティバベン・ジャイン市長へ、今後の協力を求める書簡が直接手渡され、両市の協力関係を築いていく強い意思が確認された。2025年度中の協定締結を目指し、まずは人的交流や文化事業を通じて信頼関係を深めていくことが重要である。

浜松市とアーメダバード市は、風揚げ文化をはじめとする共通点も多く、市民同士の交流の素地も整っている。また、浜松市ではすでにインドの教育機関・自治体・企業と連携した経済交流推進事業を展開しており、市内企業の海外展開支援や高度人材の受け入れにも力を入れている。こうした既存の取り組みを土台に、両市の関係をより実質的なものへと進化させていくことが求められる。

今回確認された協力関係は、単なる覚書を超えた、二つの都市が未来を共に描くための意思表示であり、異なる文化と経済圏が理解し合い、補完し合いながら成長するための礎である。この関係を確かなものとするためにも、今後の継続的な交流と具体的な連携事業の実施が鍵となる。

本市としても、インドとの関係強化を通じて国際理解を深め、市民の視野を広げるとともに、グローバルな経済活動への参加を促すための環境整備を進めていきたい。浜松市とアーメダバード市の絆が、持続可能で実りある国際交流モデルとなることを期待している。

■視察先■ グジャラート州政府訪問

■日 時■ 2024年12月24日(火) 11:00~14:00

■目 的■

グジャラート州政府と強固な関係を築くため、同州政府を訪問し州首相表敬や静岡県との友好協定締結式を行う。

■所 感■

今回の視察の目的である静岡県とグジャラート州との友好協定が、無事締結された。この友好協定により、グジャラート州と静岡県は経済的、文化的な結びつきを一層強化し、互いの発展と繁栄に寄与することが期待されている。特に、両地域の若者たちに新たな学びや経験の機会を提供することで、未来のリーダーを育成することができると思われる。

グジャラート州と静岡県の友好協定は、地域間の連携が国際的なレベルでどのように機能し、成功するか今後の動向を見守っていきたい。

【個人的所感】

今回の視察を通じて、静岡県とグジャラート州との間で友好協定が無事に締結されたことは、非常に意義深い成果であると感じた。この協定により、両地域は経済、文化、人的交流といった多岐にわたる分野での連携が一層深まり、互いの発展に寄与する強固な基盤が築かれることが期待される。

特に、両地域の若者にとっては、国境を越えた交流や学びの機会が創出され、異文化理解や国際感覚を育む貴重な経験となるだろう。こうした取り組みが、次代を担うリーダーの育成へとつながっていくことを大いに期待している。

この友好協定は、地方自治体間の国際連携がいかにして実効性を持ち、相互の発展を促進できるかを示す一つの好例となり得る。今後は、協定に基づいた具体的な交流・協力事業の展開が重要であり、継続的な対話と協働により、実のあるパートナーシップを築いていくことが求められる。

静岡県とグジャラート州の友好関係が、両地域に新たな価値と可能性をもたらすとともに、国際社会における地方の役割と影響力を高める好機となることを強く感じた。今後の動向を注視しつつ、本市としてもこの協定の成果を地域に活かすための取り組みを進めていきたい。

■視察先■ アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）

■日 時■ 2024年12月24日（火）15:00～16:00

■目 的■

インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽、美術、伝統芸能など文化的な交流及びアーメダバード経営者協会と静岡市及び浜松市の経済界の交流の可能性を探る。

【個人的所感】

AMA（アーメダバード・マネジメント・アソシエーション）は、これまで日本の教育機関や企業と連携し、経営者やビジネスパーソン向けの実践的な交流プログラムを継続的に展開してきた。その中で、日本式の働き方や経営手法を研修に取り入れ、両国間のビジネス文化に対する理解と尊重を深めてきたことは非常に意義深い。また、文化イベントやフェスティバルを通じて日本文化の発信と交流を推進し、相互の親近感や友好関係の強化にも大きく貢献している。

今回の視察を通じて、AMA と本市との関係は単なる交流にとどまらず、経済・文化・教育の三位一体となった持続可能なパートナーシップとして、今後さらに発展の可能性を秘めていることを強く感じた。AMA の活動は、国境を越えた人材育成や相互理解の促進において、先進的かつ実践的なモデルケースといえる。

今後は、より具体的な人材交流プログラムの構築や、本市の企業との連携をさらに強化し、地域経済の活性化にもつなげていきたい。また、文化・教育面でも市民が直接参加できるような交流の場を広げることで、相互理解の輪を一層広げていくことが求められる。

AMA との連携は、両国にとって実りある未来を築くための重要な架け橋であり、他の地域や国々にとっても参考となる国際協力の好例となるだろう。今後もこうした関係をさらに深化させ、多様な分野での連携強化を図ってきたい。

■視察先■ 全日本空輸（株）片桐インド総代表との意見交換会

■日 時■ 2024年12月25日（水） 11:30～14:30 デリー

■所 感■

今回、■■■さんからのお話を通じて、インドが世界でも最も成長著しい経済の一つであり、その中でも特にITやエンジニアリング分野における高度な人材の豊富さが、国際的に高く評価されていることを改めて実感した。これらの人材は、グローバル市場において重要な役割を果たす存在であり、日本企業にとっても大きな可能性を秘めている。

一方で、農村部では依然として若年層の就業機会が限られており、都市部との格差も顕在化している。そうした中で、インド国内の送り出し機関の強化や、若者への職業教育の充実と支援体制の整備が喫緊の課題であると感じた。また、今回の視察では、人材派遣における不透明なブローカーの存在が確認されず、非常にクリーンな形での人材送り出しが可能であるという点も、大きな安心材料であった。本市にとっても、技能実習生や特定技能制度を活用したインド人材の受け入れは、深刻化する人手不足の解消に資する有効な手段である。特に製造業などの現場においては、国際的な視野を持つ実践的な人材の確保は、企業の競争力強化にも直結するものである。

現在、他の自治体でもインドとの人材交流を活発に展開しており、本市としても、これに遅れを取らぬよう、行政と企業が連携してインドとの関係性を深め、人材獲得に向けた具体的な取り組みを推進していく必要がある。人的交流の強化は、単なる労働力確保にとどまらず、文化や価値観の相互理解を育む大きな契機にもなるはずである。

■視察先■ インド工科大学ハイデラバード校訪問（IITH）（覚書締結）

■日 時■ 2024年12月26日（木）9：30～14：00 ハイデラバード

■所 感■

今回、IITH（インド工科大学ハイデラバード校）とのMOU締結に先立ち、■■■■教授より大学の概要を伺う中で、同大学の教育・研究の質の高さ、そして日本との深い関わりに大きな可能性を感じた。■■■■■■■■学長が日本での研究経験を持ち、日本文化への理解と親和性を持っていることは、今後の両国の連携にとって非常に心強い要素である。

IITHの広大なキャンパスには、先端的な研究施設と充実した教育インフラが整っており、エレクトロニクスや材料科学、機械工学といった分野において、世界的に競争力のある人材が育成されている。学生たちは将来的なキャリアとして欧米志向が強いものの、日本企業での活躍事例や、日本独自の文化的価値への関心を持つ学生も増えてきているという話を聞き、今後の関係構築の余地を大いに感じた。

特に印象的だったのは、■■■■■■■■学長が「文化的に学ぶべきものが多いのは日本であり、インドと価値観の近い部分もある」と語り、IITHが日本とインドの架け橋になることを常に意識しているという姿勢だった。日本企業による採用促進の取り組みである「ジャパンデイ」にも毎年多くの学生が関心を寄せており、行政としてもこのような機会に積極的に関与し、浜松や日本の魅力を発信していくことが求められると感じた。

さらに、今回ネクストパーラトベンチャーズ社とも覚書を交わし、同社のジンダル社長がIITHの出身であり、スズキ株式会社での勤務経験、浜松での生活経験を有しているという背景には、深い縁と可能性が見える。こうした人材が両国の懸け橋となり、次世代の交流と発展を担っていく姿は、本市にとっても非常に希望に満ちたものである。

このMOU締結をきっかけとして、企業のインド進出支援、人材交流、産学連携の強化など、多方面からの連携を一層推進していくとともに、私たち自身もインドへの理解を深め、真の意味での双方向の交流を目指していく必要がある。今回の協定が、浜松の産業・文化・人材の発展につながることを期待し、今後も行政と企業が一体となって、持続可能な連携を模索していきたい。

■視察先■ スズキイノベーションセンター・ネクストバーラトベンチャーズ

■日 時■ 2024年12月26日（木）14:00～15:00

ハイデラバード

■所 感■

今回、浜松市とネクストバーラトベンチャーズ社との間で覚書を締結し、インドと日本の産業連携を推進する新たなステージに踏み出すこととなった。この協定は、浜松市にとっても、次の10億人＝“Next Billion”と呼ばれるインド国内の未開拓層と向き合い、社会課題の解決に貢献する企業や人材を育てていくための、大きな一歩であると感じた。

ネクストバーラトベンチャーズは、スズキ株式会社が中心となり設立されたもので、スタートアップの柔軟で革新的な手法を活かし、インドの社会課題に取り組むインパクト起業家の育成と支援を通じて、持続可能なビジネスモデルの確立を目指している。その取り組みは、単なる企業活動にとどまらず、社会的な意義を持ち、今後のインドの発展において重要な役割を担っていくものと確信している。

また、このような取り組みを通じて、インドの深層部に入り込むビジネス展開が可能であることは、浜松市の企業にとっても新たな成長の可能性を示唆している。インド市場の成長性や、スタートアップとの協業という柔軟なアプローチを活かすことで、日本企業にも多くのチャンスが広がっていることを実感した。

今後、ネクストバーラトベンチャーズとの連携を通じて、インド社会への貢献と共に浜松の企業が持つ技術や理念を活かした新しい価値創造が進むことを大いに期待したい。そしてこの交流が、地域経済の活性化だけでなく、国際社会における浜松の存在感を高める一助となるよう、継続的な支援と関係強化を図っていく必要があると感じた。

■視察先■ アップパールスタジアム

■日 時■ 2024年12月26日(木) 16:30~18:00 デリー

■所 感■

クリケットは、イギリスからインドに伝わり、19世紀にその歴史が始まった後、インドの国民的スポーツとして成長し、現代の社会にも深く根付いていることを強く感じました。植民地時代から現代に至るまで、クリケットはインドにとって単なる競技を超えて、文化的な象徴としての役割を果たしてきたと言えるでしょう。試合の中心に広がるクリケットフィールドの構造や、その規模に圧倒されるとともに、このスポーツが国民にとってどれほど重要で、どれほど多くの人々の心を捉えているのかを実感しました。

特に、クリケットの試合が行われる広大なフィールドにおいて、どの角度からでも観戦がしやすいという設計には、観客一人ひとりがゲームの流れを肌で感じられるよう配慮されていると感じました。このような施設が存在することで、インディアンクリケットの盛り上がりや、試合の興奮がますます広がるのも納得できます。

また、インドでクリケットが国民的なアイデンティティと一体化していることは、スポーツを超えて人々をつなげる力を持つことを物語っていると思います。クリケットはインドの歴史や社会、そして文化的な価値観を体現しており、これまでの困難な歴史の中で国民が団結し、共に立ち上がってきた象徴的な存在でもあったと感じました。

自由民主党浜インド視察報告書

令和7年1月19日
自由民主党浜松
小野田 康弘

◆視察日程 令和6年12月22日（日） ～ 令和6年12月28日（土）

◆視察先 インド共和国

- ①12/23 スズキモーターグジャラート社
- ②12/22 マンダル工業団地
- ③12/22 グジャラート国際金融技術都市（GIFT CITY）
- ④12/24 アーメダバード市長表敬訪問
- ⑤12/24 グジャラート州政府表敬訪問
- ⑥12/24 アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）
- ⑦12/25 全日本空輸機片桐インド総代表訪問
- ⑧12/26 インド工科大学ハイデラバード校訪問（IITH）
- ⑨12/26 スズキイノベーションセンター・ネクストバーラントベンチャーズ
- ⑩12/26 アップパールスタジアム

◆視察議員 柳川 樹一郎 渥美 誠 松本 康夫 小野田 康弘 鈴木 裕之

◆視察報告

①令和6年12月23日（月）スズキモーターグジャラート社

■目 的■

スズキ株式会社は1980年代にインドへ進出し、革新と投資を行ってきた。インドでの生産能力の強化や高品質な車両の提供だけでなく、人材開発にも力を入れている。成功のためには、現地労働者のスキルアップと持続的な学習が欠かせません。これまでの経験を通じて、インド人従業員の勤務状況やローカル企業との取引、インドの生活実態を

把握する。

■概 要■

1. 設立の背景

スズキモーターグジャラート社は、スズキ株式会社の完全子会社であり、インドのグジャラート州に拠点を置いている。2014年に設立され、2017年には本格的な生産を開始した。スズキはインド市場において長年にわたり自動車製造を行っており、スズキモーターグジャラート社の設立は、インドにおける自動車需要の急速な拡大と、アジア市場全体での成長戦略の一環としており、その活動の拡大と強化を象徴している。また、もう一回原点に立って工場を作り直し、そしてマルチスズキの工場と切磋琢磨して競争する工場を立ち上げている。また工場は、空港から約100km、港まで約300kmの距離に位置し、3つの港（カンドラ、ムンドラ、キパバ）を活用している。

2. 生産能力と規模

スズキモーターグジャラート社は、A工場が2017年2月、B工場が2018年の12月、C工場が2021年の4月に生産開始として能力はそれぞれ工場能力年間25万台、年間約75万台の自動車を生産できる最新技術の製造施設を持っている。また、現在では累計で380万台の生産を行っている。

環境に配慮した設計と効率的な生産プロセス、高品質管理が特徴である工場には車体組立、塗装、検査ラインなどがあり、主にマルチ・スズキのスイフト、バレーノ、フロンクスを製造し、約20%が輸出されています。工場敷地内には、1週間分の生産台数である最大23,000台分の完成車両を置くことが可能な敷地がある。出荷する際には、トラック輸送のほかにカーボンニュートラルの点から鉄道輸送でも行われている。1日の輸送量は、1編成の自動車輸送用貨車で270台、3から4編成を運行し800台から1,000台を出荷している。

敷地面積は260万平方メートルで、約10社の関連会社のサプライヤーパークが北側に立地している。スズキの湖西工場が100万㎡、相良工場が200万㎡と比べてもスズキ最大級の工場となっている。

3. 雇用機会の創出と地域社会貢献

ももとは、何もない荒野に工場を建設し、事業拡大に伴い、多くの直接的な雇用機会を創出している。さらに工場周辺には、病院や社員寮を建設し住環境への投資も行っている。また製造業、技術職、管理職などさまざまな職種で現地の労働力を積極的に採用し、新しい雇用を提供している。

スズキ株式会社のインド進出は、現地の雇用機会の創出、労働者のスキルアップ、次世代リーダーの育成、地域社会への貢献、経済的支援など、多岐にわたるポジティブな影響をもたらしている。さらに、スズキは教育や医療などの社会貢献活動も積極的に実施しており、地域社会への影響を強化している。これらの取り組みにより、スズキはインド市場でのリーダーシップを確立し、持続可能な成長を支える重要な要素となっている。

■所 感■

滞在先のアーメダバード市からバスで約2時間半の道中は、インドの広大な風景を見せてくれました。スズキ株式会社は40年前にインドに進出し、自動車市場がほとんど存在しない状況下で、低価格の小型車を提供する戦略を採用しました。この「徹底したローカライズ戦略」により、インド市場で成功を取りました。その歴史の一環として、スズキモーターグジャラート工場を視察しました。

広大な敷地内の工場では、日本の工場と同様に、プレス工程、溶接工程など一連の生産ラインが自動化されていました。ただし、完成車の最終検査のラインには多くの従業員が配置され、品質管理が徹底されていました。また、日本式ものづくりを導入し、社員教育においてルールやマナーの徹底により、日本と同等の品質管理が行われています。工場は効率性を高める工夫が施され、生産ラインは一直線に配置され、部品納入のプラットフォームも荷下ろしの段差がありません。単なる生産拠点の拡大に留まらず、品質管理や環境保護にも重点を置き、最新のエコ技術を駆使して環境負荷を低減する取り組みが行われています。

スズキ株式会社はインド人材の本社採用に力を入れており、現在は40名程度のインド人が本社に勤務しています。また、来年度には15名程度の採用を予定しています。製造業が多い本市の課題である人手不足を解消するため、高度人材やワーカーの獲得が必要です。多くのインド人材が浜松で活躍できる体制を整えるため、今後の受け入れ態勢と環境整備を模索していきます。

②令和6年12月23日（月）マンダル工業団地

■目 的■

マンダル工業団地には、多くの日本企業が進出しており、インドの産業発展に大きく貢献している。県内企業も入居するマンダル工業団地において、レンタル工場や日本式のものづくり学校を展開している豊田通商インディア社が運営するテクノパークを視察し、進出のメリットや課題等の現地ビジネス環境や県内企業の現地展開の可能性を探る。

■概 要■

1. 設立の背景

インドのグジャラート州に位置するマンダル工業団地は、産業発展と経済成長を促進するための重要なプロジェクトとして設立された。この工業団地は、日系専用工業団地として日系企業の進出の足掛かりとインフラの整備と産業の集積を通じて地域経済を活性化し、雇用機会を創出することを目的としている。マンダル工業団地の設立は、政府と民間企業の協力の成果であり、多くの先進的な技術と設備を備えている。



2. 役割

マンダル工業団地は、地域経済の発展と産業の多様化を支える重要な役割を果たしている。

豊田通商インディアは、豊田通商株式会社の子会社として、インド市場への本格的な参入を目指し、その第一歩を踏み出しました。当初は、インドにおけるモビリティの発展のために、自動車部品の製造と供給を中心に事業を展開したが、徐々にその範囲を拡大し、地域の産業基盤の強化や交通事故、交通渋滞、大気汚染等々、社会的な課題解決を踏まえた事業展開及び、インドは東西の結節点とも言われ、ここから西側、中東やアフリカとの架け橋を作っている。

また、マンダル工業団地における豊田通商インディアの役割は多岐にわたり、自動車部品だけでなく、電機、化学、物流など多岐にわたる産業のハブとして、インド国内外

への供給拠点となっている。地元の経済発展を牽引する存在として、インフラ整備や教育支援など、多方面での活動、最新技術の導入と研究開発を進め、新しい製品やサービスの創出に努めイノベーションの推進をしている。

3. 企業のインド進出における課題と解決策

インド進出における課題として、慢性的に工業用地が不足し用地取得の難しさ、また優秀な人材の確保の難しさ、複雑かつ不透明な法制度対応の難しさが挙げられる。TBISはこれらの課題に対して、マンダル工業団地内において、土地建屋の取得や電力・水の確保、許認可取得支援、工場周辺サービスなどを整備し、「コンセントにつなぐだけで簡単に操業できる環境やサービスが提供」できる、プラグ&プレイ型工場の提供や人材育成プログラム、法制度対応のサポートを行っている。

インド全土で 60 年以上技術分野の教育を提供している学校があり、NTTF と連携して 3 年間のプログラムを提供し、地域の若年層と日系企業をつなぐ役割を果たしている。また、グジャラート工科大学と提携し、学生にディプロマ（専門士）を発行している。

学校施設では、安全を含む基礎教育や Excel、AutoCAD などのパソコンスキル、工作機械等の取り扱い実習を通じて学ぶことができ、学校は安全品質と日本式ものづくりの考え方を指導し、将来的に現場のリーダーとなれる人材の育成を目指している。

また、地域の労務問題に対しても、テクノパーク内の入居企業や日系企業代表者が定期的集まり、マネジメントの視点で課題や解決策を協議する環境を整えている。さらに、インド人も含めたスポーツフェスティバルを開催し、交流・連携を促進している。

※TBIS: TOYOTSU BHARAT INTEGRATED SERVICES Pvt Ltd

■所 感■

マンダル工業団地では、ASTI や村上開明堂、ROKI などの県内企業が多く入居し、事業展開を行っています。特に、2017 年からプラグ&プレイ工場をコンセプトとした日本企業向けの貸工場事業を行い、企業のインド進出を支援している状況です。

現在、多くの企業がインドに進出していますが、インド進出には多くの課題がありま



す。広大な土地を有するインドでも工業用地の確保が難しく、中小企業ではサプライチェーンの構築や関連会社の支援が必要です。また、現地での人材確保は課題となっており、ホワイトワーカーでは採用に時間がかかり、労働環境により流動性が高くなっています。一方、ブルーワーカーでは農耕地域であるため、工業用人材の確保が困難です。この団地では、人材育成事業を通じて、グジャラートに進出する日本の中堅・中小企業が求める人材の育成と確保、事業運営の支援を行っています。

今回、同団地内の学校を視察しました。パソコンのスキルや工作機械等の取り扱い、安全品質と日本式のモノづくりを指導し、将来的には現場でのリーダーとして後続を指導できる人材の育成を目指しています。

インド市場の成長を鑑みると、日本企業のインド進出は魅力的です。インドでのビジネス展開を模索する日本企業は少なくないでしょう。マンダル工業団地のように日本企業専用の団地の需要は多いと予想されます。また、豊田通商インディア社のように進出の労力を省力化する事業や、人材教育は重要です。本市の企業がインドで活躍できる環境を整え、本市とインドの関係強化につなげる必要があると思いました。

③令和6年12月23日（月）グジャラート国際金融技術都市（GIFT CITY）

■目 的■

インドのグジャラート州に位置する Gift City (Gujarat International Finance Tec-City) は、インド政府の主導で設立されたインド初の特別経済区 (SEZ) である。現地の最先端ビジネスや都市開発の状況、ネクストバーラトベンチャーズ IFS プライベートリミテッドによる社会起業家支援の状況を把握する。

■概 要■

1. GIFT CITY 設立の背景

Gift City は、インドの国際金融センターとしてインド国内外の企業に対して、競争力のあるビジネス環境を提供し、新しい投資と雇用機会を創出するために設立された。HSBC、スタンダードチャータード銀行、シティバンクなどの国際的な銀行が入居、これらの組織は Gift City の戦略的な立地と優れたインフラを活用し、国内の主要銀行であるインドステート銀行 (SBI) や ICICI 銀行も拠点を設けており、インドの金融市場の発展に貢献している。さらに、JP モルガンやゴールドマン・サックスなどの投資銀行も Gift City に進出しており、これにより Gift City は国際金融センターとしての地位を

さらに強固なものとしている。世界中の金融機関や投資家を引き寄せ、インド国内外の資本市場と金融サービスを一体化することを目指している。この取り組みは、外国投資家や多国籍企業から高く評価されており、インドの経済成長に大きく貢献している。特に、規制緩和と税制優遇措置が企業にとって魅力的な条件を提供し、多くの投資を呼び込んでいる。



2. ネクストバーラトベンチャーズ IFSC プライベートリミテッド設立の背景

ネクストバーラトベンチャーズ IFSC プライベートリミテッド (Next Bharat Ventures IFSC Private Limited) は、インドの国際金融サービスセンター (IFSC) に設立された新興企業である。2024 年、スズキ株式会社がインドにおける 100% 子会社として設立し、インド国内外の投資機会を最大限に活用して先進的な金融サービスを提供することを目的としている。

また、ネクストバーラトベンチャーズ社は、インドの社会課題をビジネスの力で解決することを目的に、ファンドを通じて農業や金融包摂、サプライチェーン、モビリティの分野で活動する社会起業家への支援や投資を実施するほか、ベンチャーキャピタルへの投資も予定している。

なお、スズキ株式会社は、ネクストバーラトベンチャーズ社の活動を通じてインドの人々とモビリティ分野を超えたつながりを築き、インドの更なる発展への貢献を目指している。

■所 感■

GIFT CITY は、モディ首相によって構想された国際金融センターであり、インドで最も先進的なスマートシティです。土地面積 3300 エーカーの中に、国際関税地域 (625 エーカー) と特別経済区 (261 エーカー) が含まれています。また、スマートオフィス、住居、病院などの建設が進行中であり、都市としては発展途上にあります。アーメダバード空港から 20 分、新幹線ターミナルから 15 分程度の距離にあるため、交通アクセスの利便性が高いです。

今回の視察で、GIFT CITY を通じてインドの経済成長の本質が見えてきました。インドは 2047 年までに先進国入りを目指しており、国際金融サービスセンター (IFSC) の整

備により経済基盤を強化しています。しかし、インドが輸出国として成長するためには、税制、インフラ、技術、人材育成など多くの課題が残されています。この課題解決には、日本の生産管理の概念や協力が不可欠です。その場合、私たちの企業にとってもインド市場への進出の可能性が高まります。また、インドでは高度 ICT 人材が豊富ですが、多くが欧米での就職を希望している現状があります。日本および本市では高度 ICT 人材が不足しているため、行政、企業、教育機関との連携を深める必要があります。

ネクストバーラトベンチャーズ社の開所式が行われ、40 年以上インドでビジネスを続けているスズキ株式会社が次の 10 億人（Next Billion）と呼ばれる層と関わり、インドのさらなる経済成長に貢献することを目指しています。この組織は、インド各地の社会課題を解決するインパクト起業家の支援を行っています。インパクト起業家の活動事例も紹介され、ビジネスを通じて価値を創出し課題を解決する取り組みが紹介されました。また、日印協業による Next Billion への新たな価値創造と日本企業のインドにおけるビジネス機会の理解を促進し、新市場の共同創造を目指しています。本市もビジネス機会を創造するために、インドの現状把握と情報ネットワークの構築が必要であると感じました。

④令和 6 年 12 月 24 日（火）アーメダバード市長表敬訪問

■目 的■

インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、文化的な交流だけでなく、スポーツ、教育などあらゆる分野の交流の可能性を探る。

■概 要■

1. アーメダバード市

アーメダバード市はインドのグジャラート州に位置しており、同州最大の都市です。サルマティ川沿いに広がるこの都市は、約 750 万人の人口を抱えています。急速な成長と発展を遂げており、インド全体でも重要な経済と文化の拠点となっています。

また、インドの主要な経済都市の一つであり、繊維産業の中心地として「インドのマンチェスター」とも称されおり、近年では IT、製薬、自動車産業など多様な産業が発展し、経済の多角化が進んでいる。また、数多くの企業やスタートアップが集まるビジネスハブとしても知られている。

その豊かな歴史と文化、多様な経済基盤、そして未来への展望を持つ魅力的な都市です

ある。

2. カイト（凧）について

毎年1月中旬に開催されるカイトフェスティバルです。この祭典は「ウッタラーヤン」とも呼ばれ、インド全土から多くの観光客が訪れる一大イベントである。

3. MOU 締結に向けて

浜松市とアーメダバード市との間で MOU 締結に向けて、両市の一層の発展を目指し、多分野での交流をさらに促進させるための書簡をアーメダバード市長へ渡した。

■所 感■

今回の視察では、アーメダバード市との友好協定の締結はインド政府の許可が得られず未達となり、浜松市とアーメダバード市は幅広い分野で連携促進を確認しました。中野祐介市長はアーメダバード市のプラティバベン・ジャイン市長に協力を求める書簡を手渡し、両市は2025年度に友好協定を締結することを目標に交流を開始する予定です。浜松市はインドとの経済交流を強化し、市内企業の海外展開や高度人材の獲得を促進しています。この覚書

は、両市の協力関係を深め、二つの異なる文化と経済圏が理解し合う重要なステップです。持続可能な協力と交流を促進し、国際的な理解と友好を深めたいと思います。



⑤令和6年12月24日（火）グジャラート州政府表敬訪問

■目 的■

グジャラート州政府と強固な関係を築くため、同州政府を訪問し州首相表敬や静岡県との友好協定締結式を行う。

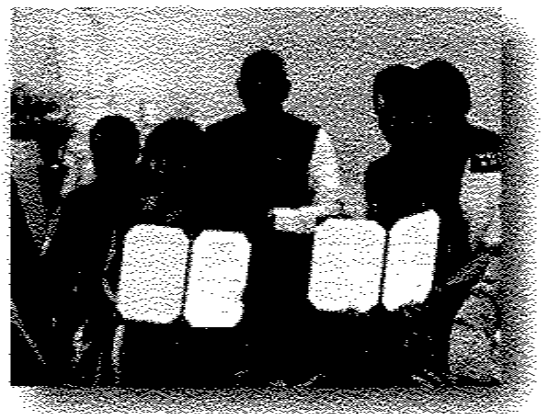
■概 要■

1. グジャラート州

グジャラート州は、インド西部に位置する豊かな歴史と文化を持つ州である。アラビア海に面し、インドで最も工業化され、商業的に発展した地域である。人口約6000万人を擁するインドの主要州の一つであり、人口は多様で、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、ジャイナ教徒、キリスト教徒などが共存している。古代から交易の要所として栄え、多くの商人や探検家がこの地を訪れている。モーリヤ朝、グプタ朝、チャウルキヤ朝、ソルンキ朝、ムガル帝国など、さまざまな王朝の統治下で文化と経済が発展してきた。特にアフマダーバードは、中世イスラム建築の宝庫としてユネスコの世界遺産に登録されている。

2. 静岡県との友好協定の締結について

両地域は過去数年間にわたり、経済的および文化的な交流を続けてきた。グジャラート州はインドの経済的中核地であり、製造業や商業が盛んな地域である一方、静岡県は日本国内での産業と観光の重要な拠点であり、経済交流や文化交流を促進するための友好協定を締結した。この協定は、両地域の持つ豊かな文化と経済力を活かし、相互の発展を図ることを目的している。



■所 感■

今回の視察の目的である静岡県とグジャラート州との友好協定が、無事締結された。この友好協定により、グジャラート州と静岡県は経済的、文化的な結びつきを一層強化し、

互いの発展と繁栄に寄与することが期待されている。特に、両地域の若者たちに新たな学びや経験の機会を提供することで、未来のリーダーを育成できると思われる。

グジャラート州と静岡県との友好協定は、地域間の連携が国際的なレベルでどのように機能し、成功するか今後の動向を見守っていきたい。



⑥令和6年12月24日（火）アーメダバード経営者協会（グジャラート州印日友好協会）

■目的■

インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽、美術、伝統芸能など文化的な交流及びアーメダバード経営者協会と静岡市及び浜松市の経済界の交流の可能性を探る。

■概要■

1. アーメダバード経営者協会

アーメダバード経営者協会（Ahmedabad Management Association、略称AMA）は、インドのグジャラート州アーメダバード市に拠点を置く非営利の経営者団体である。AMAは1956年に設立され、地域のビジネスリーダー、企業経営者、専門家たちのための学習と交流の場を提供することを目的とし活動している。その設立以来、AMAは地域経済

の発展と持続可能な成長を支える重要な役割を果たしてきた。1950年代のインドは、独立後の経済発展と産業化の進展に伴い、経営知識とスキルの向上が求められ、特にグジャラート州は商業と産業活動が盛んであり、ビジネスリーダーたちが集う場所が必要とされてきた。AMAはそのようなニーズに応えるべく、地域の産業界と学術界のリーダーたちの協力によって設立された。



2. グジャラート州印日友好協会

グジャラート州印日友好協会は、インドのグジャラート州と日本の間の関係を強化及び、理解促進を目的に1975年設立された。

事業としては、アーメダバード経営者協会（AMA）と提携して日本の伝統文化や現代文化を紹介するイベントやワークショップを開催し、インドの人々に日本の魅力を伝え、また、インドの文化を日本に紹介する交流イベントも積極的に行っている。その他、グジャラート州と日本の企業間のビジネスマッチングや投資促進イベントを開催し、経済協力を推進し、両国の経済発展に寄与している。会長は、XXXXXXXXXX氏。

■所 感■

AMA は、日本の教育機関や企業と連携し、研修や交流プログラムを実施してきました。これにより、両国のビジネス文化と経営手法の相互理解が深まりました。また、日本文化イベントやフェスティバルも共同開催し、文化交流を推進しています。

これらの活動は、経済的、文化的、教育的な面で重要です。今後も両国の交流が深化し、友好関係が強化されることが期待されます。この協力関係は、他国にも有益なモデルとなるよう、さらに展開していきたいです。



⑦令和6年12月25日（水）全日本空輸株式会社インド総代表訪問

■目 的■

日本とインドとの交流人口の現状と拡大の可能性を学ぶとともに、交流を深めるための秘訣を探る

■概 要■

1. 全日本空輸株式会社インディア支店 インディア総代表兼インディア支店長 XXXXXXXXXX氏

XXXXXXXXXX氏がインド人材に着目したきっかけは、コロナ禍で飛行機が運行再開になると間違いなくお客さん戻ってこないということが想像していた。何とか新しい需要を開拓し

ていかないと、この先厳しいなと思って考えていた矢先に、ベトナム人の技能実習生のネガティブな報道をテレビで見て、インドはどうなっているのかを調べ始めたことでインド人材に徹底的にのめり込むようになった。

日本では、インドの送り出し機関の現状を把握していないと考え、日本にこのインド人材のクオリティの高さ、良さを知ってもらうことを念頭に、まずはインドの各地のセミナーに行って日本を知ってもらう取組や、国や市間とか管理団体と協力しながらマッチングイベントを行っている。

2. インドの人口分布の特徴

インドの場合は、人口ピラミッドが非常にきれいな釣り鐘型で人口ボーナスの形をしている。インドでは、ティアワンという400万人以上の都市が8つあり、ニューデリー、ムンバイ、ベンガルール、チェンナイ、コルカタ、アーメダバード、ハイドラバードなどが、400万人以上の都市と言われている。14億人いて、400万人以上の都市が8大都市を合わせても1億人もいかない。しかも若者の多くは圧倒的に農村部にいて、しかも20代の若者に仕事がなく困っている状況となっている。

3. インドの送り出し機関の特徴

管理団体雇用主さんと送り出し機関との関係では、管理団体雇用主がインドのことをあまり知らない。実績がある国で十分なのでインドをわざわざやらない送り出し機関が存在し、アクティブな送り出し機関がまだ少ない状況である。それと送り出し機関としても、他の国に送り出したほうが楽だし、コミッションも高いし、日本だと日本語を教えなければいけないとのこと。



一方で、今のところブローカーが存在してない。非常にクリーンな送り出しができているという実態である。

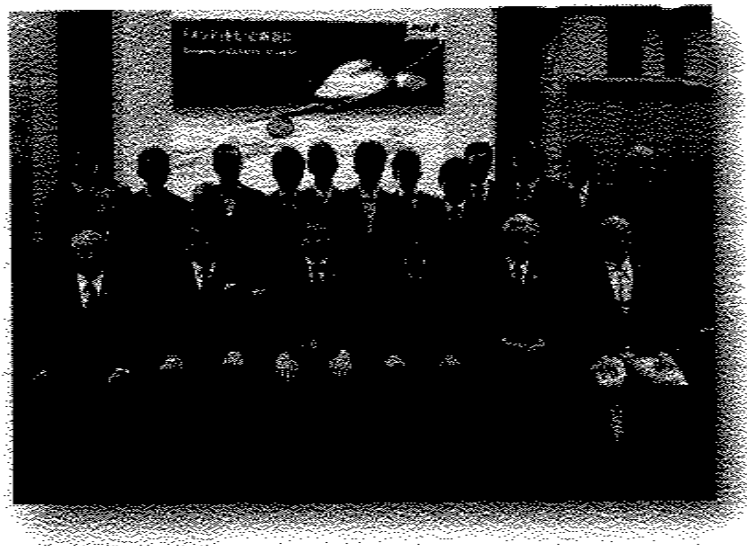
コロナ当時、この送り出し機関を調べると、実績があったのが18社あったが、数が少ない。悪質なブローカーもいないので、今やっていただくと非常にクリーンな送り出しができる。とにかくやっぱり日本側が知らない。

4. インド人材の受け入れについて

横浜市緑区霧が丘の団地にインド人 800 人が住んでいる。横浜市がインドの企業を誘致したためだが、日本人とうまく共生している。公園ではインド人と日本人の子と一緒にサッカー遊びをして英語でコミュニケーションをとっている。また、インド人材が日本に来る上で、受け入れ側として注意点は特にない。

■所 感■

■■■■氏の説明によると、インドは世界で最も急速に成長している経済の一つであり、その豊富な人材は多くの企業にとって魅力的です。特に IT やエンジニアリング分野には高度なスキルを持つ専門家が多く、グローバルな人材市場において重要な位置を占めています。しかし、農村部における若者の失業問題を見ると、インドの送り出し機関の充実と支援の必要性が浮き彫りとなります。また、人材派遣のブローカーも確認されておらず、非常にクリーンな送り出しが可能であることが判明しました。本市としても、インド人技能実習生及び特定技能の受け入れは、人手不足に悩む企業への支援に寄与することが期待されます。現状では、他の都府県でもインド人材の獲得に向けた活動が活発化しています。本市においても、インドとの交流事業の中で人材獲得に向けた働きかけを行政と企業が共同で推進する必要があると感じました。



⑧令和6年12月26日(木) インド工科大学ハイデラバード校訪問 (IITH)

■目 的■

すでに協定を締結している静岡大学との連携の強化及び、市内の他大学との学術交流の可能性を探る。また、IITH で学ぶ目的や今後の人生設計等について学生の意見交換を行う。

■概 要■

1. インド工科大学ハイデラバード校 (IITH)

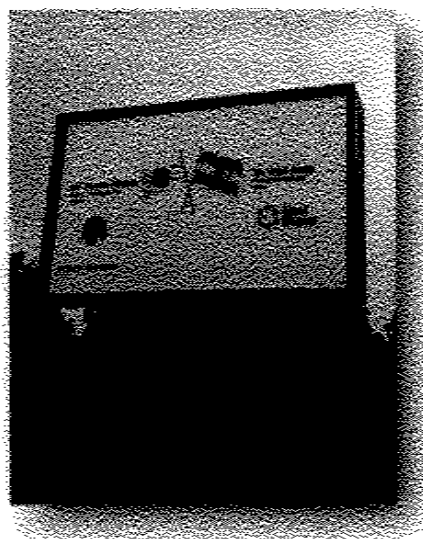
インド工科大学ハイデラバード校 (IITH) は、インド政府によって8番目に設立された工科大学の一つで、2008年にインド南部テランガーナ州ハイデラバード市に設立された。インド工科大学 (IIT) は全国に23校あり、IITHは8番目に設立された。1950年代60年代にIITがシステムとして作られて実際に大学として機能し始めてから約7校が第一バッチとして作られた。初めにできたバッチのIITのことを、伝統校などと呼んでいる。



このIITHは、インド国内の技術教育の質を向上させ、さらには世界的な技術革新の中心となることを目的とし、理工系分野における教育と研究の中心地として広く認知され、エンジニアリング、科学、技術、そして人文社会科学における幅広い学部および大学院プログラムを提供しており、多様な分野での人材育成を行っている。

さらに同大学は、AI (人工知能) 分野において世界で3番目に専門学科を設置した大学であり、スマートモビリティやロボティクスなどの多分野の研究者と連携して先端的な研究を行っている。また、学生の起業支援やインキュベーションセンターの活用など、企業文化の醸成にも力を入れている。

IITHの設立と運営には、インド政府からの多額の資金が投じられているが、多くは日本からの支援である。日本国際協力機構 (JICA) による資金援助を通じて、キャンパスのインフラ整備や研究設備の充実が図られている。この国際的な支援によって、IITHは高度な研究設備とインフラを備えた教育機関としての地位を確立した。



2. 学生の企業支援

IITHでは、学生の起業支援に非常に力を入れている。特に、学生が新しいビジネスアイデアを持ち込むことを奨励しており、確かなアイデアが確認された場合には、大学が資金を提供する。例えば、ビルダプロジェクトというプログラムでは、学生が技術のアイデ

アを持ち込むと、大学がそのアイデアを評価し、確からしいと判断された場合には資金を提供する。

さらに、インキュベーションセンターを活用して、学生が実際に起業するためのサポートも行っている。起業が成功した場合、大学での学位取得を待たずに実業に進むことが奨励されており、その際修了証が発行される。また、起業が失敗した場合でも、セーフティネットとして新卒の採用活動に参加できる仕組みが整っている。

このように、IITH は学生が挑戦しやすいエコシステムを作り上げており、学生が守られながらも挑戦できる環境を提供している。

3. インド工科大学ハイデラバード校と静岡大学との連携

インド工科大学ハイデラバード校と静岡大学は、国際的な研究と教育の協力を強化するための2017年に連携協定を結んでいる。この連携により、両大学は学生交換プログラムや共同研究プロジェクトを推進し、それぞれの強みを活かした相乗効果を生み出している。

具体的には、IITH と静岡大学は、環境技術やエネルギー効率化技術などの分野で共同研究を行っている。これにより、持続可能な開発に向けた新しい技術やソリューションの開発が進められている。さらに、双方の学生や研究者が互いのキャンパスを訪問し、異文化交流や専門分野の知識を深める機会を持つことで、国際的な視野を広げることが期待されている。

この連携は、インドと日本の技術交流と文化理解を促進する重要な枠組みとなっており、両国の未来の技術革新と経済発展に寄与することが期待されている。

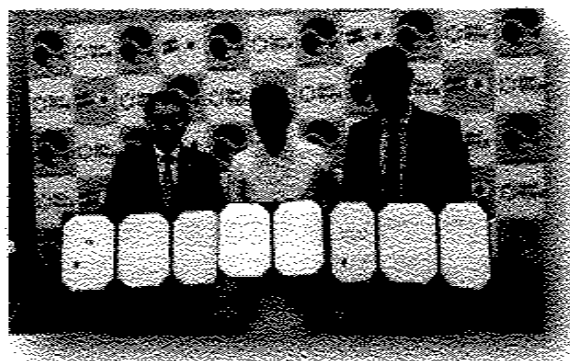
4. MOU 締結式

・浜松市と IITH 校との人的・経済交流に関する覚書を締結。

IITH の学生等や双方地域の企業等が相互に活発に人的交流・経済交流をすることができるよう、双方が共同して支援することを目的とする。

・浜松市とネクストバーラトベンチャーズ IFSC プライベートリミテッドとの間で覚書を締結。

両当事者間の産業交流を促進し、浜松市とインドと日本産業連携の架け橋として位置付け、地域の産業成長に寄与することを目的とする。



■所 感■

MOU 締結式前に IITH の 教授に大学の概要を伺った。同大学の 学長は、1999 年から 2001 年の間に筑波大学で研究者をしていた経歴があり、日本との連携に積極的に取り組んでいた。また、日本の文化に精通していた。

IITH の敷地は広大であり、最新の研究設備と充実したインフラを備えている。学生や研究者が最先端の研究を行う環境が整っており、特にエレクトロニクス、材料科学、機械工学などの分野での研究が盛んである。

また、同大学の学生は、欧米企業への就職を目指している学生が多いと聞いた。MOU 締結式では、 学長が日本は文化的に強い側面があり、インドと似ているところがあるため学ぶべきことが多いと述べ、IITH が日本とインドの架け橋になれると考えていると挨拶した。毎年、日本企業を集めたジャパンデイというイベントを開催している。このようなイベントに行政も積極的に関与することで、日本や浜松に対する関心を高める必要があると感じた。

スズキ株式会社は IITH からの採用を増やしており、日本に興味を持つ学生が増えているとの情報もあった。また、ネクストパーラトベンチャーズ社との覚書も交わし、両者間の産業交流の促進、人材交流、知識共有、機会創出など様々な協力体制を確立することが重要であると考えた。この MOU 締結が浜松の産業や文化の発展につながるよう、行政・企業とともに取り組んでいきたい。

⑨令和 6 年 12 月 26 日（木）スズキイノベーションセンター・ネクストパーラントベンチャーズ

■目 的■

インドとの交流を深める方法やインドの社会課題解決に挑戦している手法を学び、本市の課題解決に横展開できる手法であるか確認する。

■概 要■

1. スズキイノベーションセンター

スズキイノベーションセンターは、インド市場におけるスズキ株式会社の活動の一環として設立された。設立の背景には、現地のスタートアップとの協力が大きく寄与している。スズキ株式会社は、インド国内のスタートアップと積極的に連携し、イノベーションを推進している。

業務内容としては、特に電動車両、自動運転技術、スマートモビリティソリューション

などの分野での協力が重要であり、例えば、電動車両のバッテリー技術や再生可能エネルギーを利用した製造プロセスなどが挙げられる。

また、スズキ株式会社はインドにおける持続可能な発展にも注力しており、環境に優しい製品やサービスの開発が進んでおり、これには低排出ガス車両やリサイクル可能な素材の使用などが含まれる。

スズキ株式会社は、インド国内のスタートアップと積極的に連携し、さまざまなプロジェクトを進めている。例えば、インド国内のスタートアップと連携して、電動車両の開発プロジェクトを進め、これにより、環境負荷の低減とともに、インド市場における電動車両の普及を目指している。また、N: スマートシティプロジェクトの一環として、インドのスタートアップと共同でスマートモビリティソリューションを開発している。これには、自動運転技術や交通管理システムの導入が含まれ、都市の交通問題の解決に寄与している。

2. ネクストバーラトベンチャーズのインパクト起業家について

ネクストバーラトベンチャーズは、社会的課題の解決を目指すインパクト起業家に対して積極的に支援を行っている。具体的には、インパクト起業家はその活動の効果を測定し、評価するための方法を提供している。これにより、起業家は自分たちの取り組みがどのように社会に貢献しているかを明確に示すことができる。資金調達の支援として、インパクト起業家が必要な資金を調達するためのサポートを行っている。これには、投資家とのマッチングや資金調達の戦略策定が含まれる。また、持続可能なビジネスモデルの構築支援として、インパクト起業家が長期的に成功するための持続可能なビジネスモデルを構築する手助けをしている。



これらの支援を通じて、ネクストバーラトベンチャーズはインパクト起業家がその使命を達成し、社会に具体的な変化をもたらすことを支援している。

■所 感■

この度、浜松市とネクストバーラトベンチャーズは覚書を締結し、浜松市とインドおよ

び日本産業連携の架け橋となることが決定いたしました。スズキ株式会社は、インド国内にはまだ10億人もの未開拓の市場が存在すると見込み、社会課題の解決を目指してスタートアップの手法を活用する方針を掲げました。そのため、新たにネクストバーラトベンチャーズを設立し、インパクト起業家の育成や資金支援を通じて、インドの奥深くまで活動を展開しようとしています。インド市場の成長に伴い、日本企業がスタートアップ企業との協業を通じてインド進出を図る選択肢も浮上しております。今後、ネクストバーラトベンチャーズを通じて、インド社会に多様な貢献を果たす浜松の企業が誕生することを期待いたします。

⑩令和6年12月26日（木）アップパールスタジアム

■目 的■

インドにおいて国民的スポーツとなっているクリケットスタジアムを視察し、スポーツ振興の面での連携可能性を探るとともに、クリケットに対する知見を深め、今後の施策に活かす。

■概 要■

1. アップパールスタジアム

ラジーヴ・ガンディー国際クリケットスタジアムは、インドのテランガーナ州ハイデラバードに位置する国際クリケットスタジアムである。このスタジアムは、ハイデラバードクリケット協会が所有および運営しており、一般的には「アップパールスタジアム」としても知られている。スタジアムは16エーカーの土地に広がっており、収容人数は55,000人である。2005年に開業し、インディアン・プレミアリーグ（IPL）やワールドカップの試合など、多くの重要なクリケット試合が開催されている。

スタジアムのデザインは、観客がフィールドのアクションを見やすいように設計されており、最先端の設備を備えており、また、スタジアム内には巨大なスクリーンやサウンドシステムがあり、試合の興奮をさらに高めている。

2. クリケット

インドではクリケットが国民的なスポーツとして非常に人気があり、クリケットはインド人にとって単なるスポーツではなく、生活の一部であるような存在である。道端で子どもたちがバットとボールを手に遊んでいる姿や、テレビの前で熱狂する人々の姿が日

常的に見られる。

クリケットがインドで大人気な理由には、歴史的背景や文化的な影響力、そして商業的成功が深く関係しており、特に、インディアン・プレミアリーグ（IPL）の登場は、クリケットの人気をさらに押し上げた。

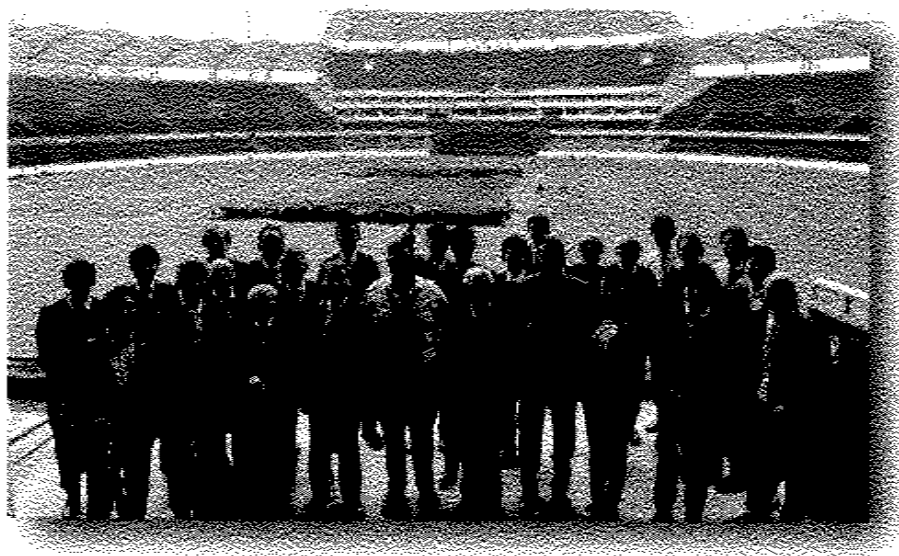
IPL はインド国内外で非常に高い視聴率を誇り、多くのスポンサーが集まる一大イベントとなっている。

また、インドのクリケットチームは数々の国際大会で優勝を果たし、その実績は世界でもトップクラスである。特に、ICC クリケットワールドカップや T20 ワールドカップでの勝利は、インドクリケットの歴史で重要な勝利でした。



■所 感■

クリケットは、イギリスからインドに持ち込まれたスポーツであり、その歴史は19世紀にまで遡ります。インドでは国民的スポーツとして成長しています。クリケットスタジアムの中心には、直径120～150メートルの円形の芝生エリアが広がり、その中央には長さ22ヤード（約20.12メートル）のピッチがあります。これは試合の主要な舞台です。フィールドは楕円形構造であり、どこからでも観戦がしやすく設計されています。この競技は植民地時代から現代に至るまで、多くの困難と成功を経て、インドの文化とアイデンティティの重要な一部となっていると感じました。



■全体所感■

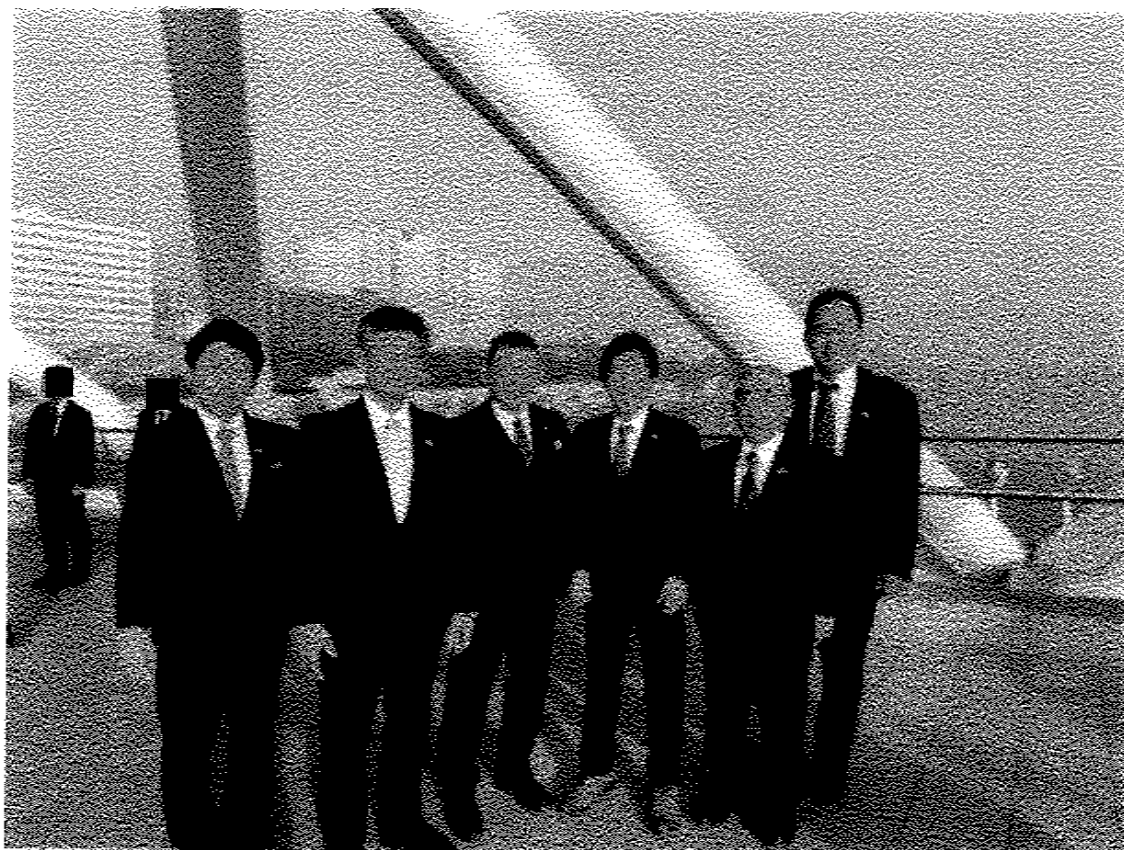
インドは現在、世界で最も急成長している経済の一つとされており、IT 産業、製造業、サービス業など多岐にわたる分野で著しい発展を遂げています。1991 年の経済自由化以来、着実な経済成長を継続しています。特に IT 産業は国際的に評価され、バンガロールは「インドのシリコンバレー」として名高い存在です。また、インドは技術革新とイノベーションの分野で指導的役割を果たしており、スタートアップエコシステムが急速な拡大を見せています。政府は「デジタル・インド」や「メイク・イン・インド」などのプログラムを通じて技術革新を支援しており、多様な分野での成長と発展が予測されています。しかしながら、持続可能な発展を実現するためには、貧困、不平等、環境問題などの重要課題に取り組む必要があると感じました。

さらに、質の高い教育と人材育成はインドの持続的な発展に不可欠です。インド政府は教育インフラの整備と教育の質向上に注力しており、特に農村部や貧困層の教育機会の拡大に取り組んでいます。IITH との覚書締結は将来の人材受け入れ基盤を築くものであり、本市が抱える人手不足の解消および企業の持続可能な経営の安定化につながると期待されます。

今回のインド訪問は、本市とインドの交流の第一歩として位置づけられ、相互交流を本格化させ、産業・文化・教育の発展に寄与する可能性を秘めています。今後の展開が非常に楽しみです。最後に、今回の訪問に際して準備、調査、視察にご協力いただいた多くのインドの関係者に深く感謝申し上げます。

令和7年1月20日
自由民主党浜松

視察報告書



浜松市議会議員

鈴木 裕之

インド出張 全体日程表

2024.12.20現在

No.	期日	曜日	時間	内容	備考
1	12/22	日	10:20	中部国際空港発【SQ671便（シンガポール航空）】	
			16:30	シンガポール・チャンギ国際空港着（シンガポール）	
			18:40	シンガポール・チャンギ国際空港発【SQ604便（シンガポール航空）】	
			21:50	インド・アーメダバード空港着【専用車】（インド・アーメダバード）	
			22:30	ホテル着、チェックイン 【現地ホテル：ハイアットリージェンシーアーメダバード 泊】	
2	12/23	月	7:30	ホテル発【専用車】	
			10:00	スズキ・モーター・グジャラート社訪問	
			13:30	マンドル工業団地視察	
			17:00	国際金融技術都市（GIFT CITY）視察	
			20:45	ホテル着 【現地ホテル：ハイアットリージェンシーアーメダバード 泊】	
3	12/24	火	8:30	ホテル発【専用車】	
			9:00	アーメダバード市役所訪問（アーメダバード市長表敬）	
			11:00	グジャラート州政府訪問	
				グジャラート州首相主催昼食会	
			15:00	アーメダバード経営者協会（ジャパンセンター）訪問	
4	12/25	水	17:30	ホテル着	
			18:00	現地関係者とのネットワーク構築会（夕食会）※宿泊先ホテルにて 【現地ホテル：ハイアットリージェンシーアーメダバード 泊】	
			6:30	ホテル発【専用車】	
			7:00	アーメダバード空港着	
			8:40	アーメダバード空港発【AI2946便（エア・インド）】	
5	12/26	木	10:30	インディガラ・ガンディー国際空港着（デリー）【専用車】	
			11:30	全日本空輸デリー支店WTG（昼食含む）	
			17:35	インディガラ・ガンディー国際空港発【AI2879便（エア・インド）】	
			19:50	ハイデラバード空港（ラジーヴ・ガンディー国際）着【専用車】	
			20:30	ホテル着 【現地ホテル：ル・メリディアン・ハイデラバード 泊】	
6	12/27	金	8:00	ホテル発【終日専用車】	
			9:30	インド工科大学ハイデラバード校/SIC訪問（MOU締結式・視察）	
			14:00	インド工科大学ハイデラバード校出発	
			15:45	アップパールスタジアム（クリケット）視察	
			17:30	アップパールスタジアム（クリケット）発	
7	12/28	土	18:30	ホテル着 【現地ホテル：ル・メリディアン・ハイデラバード 泊】	
			8:00	ホテル発【専用車】	
			9:00	ハイデラバード空港（ラジーヴ・ガンディー国際）着	
			11:15	ハイデラバード空港（ラジーヴ・ガンディー国際）発【SQ519便（シンガポール航空）】	
			18:30	シンガポール・チャンギ国際空港着（シンガポール） 【空港泊】	
7	12/28	土	1:20	シンガポール・チャンギ国際空港発（シンガポール）	
			8:30	中部国際空港着	

【現地ホテル】

■ アーメダバード 12月22日・23日・24日

ホテル名：Hyatt Regency Ahmedabad

住所：17/A, Ashram Road Ahmedabad, 380014 INDIA

電話：+91-079-40171234

■ ハイデラバード 12月25日・26日

ホテル名：Le Meridien New Hyderabad

住所：Plot No 132 Miyapur Road, Gachibowli Hyderabad 500032, INDIA

電話：+91-040-42865550

日時：2024 年 12 月 23 日（月）10：00～12：00

訪問先：スズキ・モーター・グジャラート

目的：インドで圧倒的なシェアを誇るスズキ株式会社（以下、スズキ）の四輪生産会社 スズキ・モーター・グジャラートの工場を視察し、インド進出における課題やインド人従業員の教育などについて把握する。



【要旨】

- ・空港から約 100 キロ、車で 2 時間強のところに立地。近くに港が 3 つあり、当工場が輸出の拠点となっている。高速鉄道新幹線で、アーメダバードからムンバイまで結ぶというプロジェクトも今進めているところ。
- ・敷地面積 300 万㎡の中に 260 万㎡の工場があり、スズキでも最大級の工場。
- ・北側にサプライヤーパークがあり、約 10 社の子会社、工場がある。TDSD という東芝、デンソー、スズキの合併会社では、ハイブリッドカーの電池を製造。
- ・B 工場は 2018 年、C 工場は 2021 年 4 月に生産開始。ABC の 3 工場で 75 万台を生産。そのうち約 20%が輸出用。
- ・順調に生産が伸びているが、2020 年度にコロナの影響で約 40 万 5000 台から 36 万 5000 台と一度だけ下がった。インドでも 2 か月間ロックダウンとなり、全く生産ができなかった。
- ・2023 年 12 月に累計生産 300 万台を達成。2023 年は 82 万 5000 台を生産。2024 年度も 80 万台以上の生産を見込んでいる。
- ・A 工場では、日本では販売していないパレードという車を造っている。トヨタに OEM としてグラウンドという名前で供給。
- ・B 工場では、日本でも生産販売しているスイフトを生産。一部、フロンクスも生産。
- ・C 工場は、フロンクスを生産。そしてトヨタ向けに同じくアーバンクルーザータイガーという形で OEM 供給している。日本向けのフロンクスは全てこの C 工場で生産。
- ・工場内には、バンパーインパネの樹脂成形や塗装、エンジンの鋳造加工や組み立て、トランスミッションも加工や組み立てと、全部一貫で行なっている。

・工程は、プレス→塗装→組立→完成組立の順。プレスや溶接は完全自動化となっており、ロボットが100%行ってくれる。

・プレス工程

車のボンネット、屋根など外観にかかる部分を大型のプレス機で生産。加工したものはパレットに載せられ、フォークリフトで運ぶ。フロンクスのサイドボディ部分を5秒に1枚の速さで生産する。

・溶接

プレス工程で造られたフロンクスのサイドボディやルーフパネルを溶接し、メインボディラインで全ての溶接を行う。FANUCの機械で全自動化されている。ドアパネルをプレスで膨らませる工程を経て、最終的にドアパネルをボディに取り付けて完成。

・組立工場

ファイナルラインは車両に不具合がないか、傷や凹みがないかを確認する。完成検査ラインでは、ドラムテスター(モニターに指定されたパターン)で走行を確認したり、車両重量、悪路走行等を確認する。

・1日約3000台を生産し、約1週間分となる最大23,000台の完成車両を敷地内に置くことが可能。その内の3分の1を鉄道レーンで出荷。

・鉄道レーンの出荷量は、2023年3月～2024年11月までで約37万台。27貨車にそれぞれ10台積み込み、1車両270台を、3～4両編成/日(800-1000台)で出荷。カーボンニュートラルの目的で、鉄道出荷を2030年に約35%まで引き上げたい意向だが、貨車の生産が間に合っていない。

【鈴木俊宏 スズキ自動車代表取締役社長 挨拶】

スズキ・モーター・グジャラート(以下、SMG)のB工場は2017年の2月に創業し、6年11ヶ月の期間をかけ2023年12月にスズキの工場で最速となる早さで300万台の生産を達成した。現在、累計で380万台を生産。

この工場は従来のグルガオン、マネサールと変わって、スズキが出資して作り上げた工場。技術者あるいは工場の指導員を派遣して、もう1回原点に立って工場作り直そうということ、そしてマルチスズキの工場と切磋琢磨して競争するというで立ち上げた。

皆さんがここに来るまでの道中に見ての通り、何にもなかった。草原というより荒野。もう何にもない状況でのスタートだった。今でこそ舗装された道があるが、この工場建設に携わった人たちは本当に何にもないところで、アーメダバードからぬかるんだ道、砂利道、そういうような道を本当に3時間かけて通勤してここを立ち上げた。病院や学校などをマルチスズキが寄付したが、そういうもの何にもないという環境で立ち上げた工場であり、駐在員が本当に大変な努力してくれたなと思っている。今でも多少不便ではあるが、この近郊に住みながら、寮にも入りながらということで日々の生産を支えている。

短い時間だが、今日工場見ていただいて色々気づかれたこと、我々が見慣れて気づかないところ等、コメントいただけたら有り難い。

【鈴木康友 静岡県知事 挨拶】

鈴木俊宏社長はじめスズキの皆様には、快くお迎えをいただいたことに感謝する。

スズキは1980年代前半に、まだほとんど日本企業が進出していなかったインドに進出をし、大変な苦労を重ねる中で、今や圧倒的なシェアとプレゼンスをこのインドで確立をされた。

今回、グジャラート州と静岡県との連携協定についても大変ご支援をいただきましたことを改めて熱く御礼を申し上げたい。

10数年前にインドに来た時にスズキの相談役からお誘いいただき、工場を見学した。その際も直線1キロの生産ラインをみて圧倒されたが、それを凌駕するこの巨大な工場を見て、改めてスズキのこのインドにおけるプレゼンスの高さを感じた。

今年1月に社長がさらに100万台増産をする工場をグジャラート州政府と協定を結んだということであり、2030年までに400万台の生産目標を掲げたということは本当にすごい。これからアフリカや中南米等、広い市場に向けてこのインドが拠点になっていくんだろうと思う。また、この自動車生産だけではなくて、最近Next Bharat Bentureを作られ、スタートアップの育成や連携も始められたり、3億トンの牛の糞を使ってバイオ燃料を作ろうとするなど、意欲的な取り組みも始まっている。まさにインドの社会課題をビジネスで解決をしていく、その新たな領域に入られたのではないか。これからグジャラートと経済、教育、文化、観光など様々な分野で包括連携をしていこうという静岡県にとっても大きなチャンスをいただいていると思っている。今後もスズキとしっかり連携をしながら静岡県全体の発展に向けて連携を強化していきたい。

スズキ、そして関係者の皆様のさらなるご繁栄、発展を祈念し、挨拶とさせていただきます。

【杉山盛雄 静岡県議会団長 挨拶】

鈴木俊宏社長にはこのような視察を受け入れていただき、また関係各位には改めて心から感謝を申し上げたい。

2年以上前から[]と私は毎年、年に数回2人きりで食事をするが、インドと静岡県の友好提携を結びたいと言ったら、それはいいことだ、と非常に喜んでくれて今日に至っている。

グジャラート州との様々な経済との友好提携を実現できたのも、新たな鈴木知事になってからということも感じている。これからのインドに大きな期待を持って、日本と同時に日本と同じように発展をできればと感じている。40年以上前の風景を見ながら、このようにインドに根を張ってインドを1つの拠点として日本一、世界一のスズキにしたということは本当に先見の明があるということを改めて感じた。

ぜひこれからもスズキの皆さん方と、そして静岡県とグジャラートの友好提携をしっかりと行い、ますます日本とインドがお互いに発展できることを私自身も改めて努力することを誓いたい。

【中野祐介 浜松市長 挨拶】

本日はスズキモーターグジャラート、スズキのインド工場を見学をさせていただくという大変貴重な機会をいただいた。鈴木俊宏社長をはじめ皆様方に感謝する。

昨晩インドに到着したばかりだが、改めてこのインドの成長、発展著しいインドの活気、活力、そういったものを強く感じた次第。

今回、そういったインドの経済交流、人的交流、これをより一層深めようということでお邪魔した。この一層の協力関係の構築、深化、これが我々浜松にとっても静岡県にとっても、また日本、インド両国にとっても大いに意味のある、役に立つことではないかと深く感じた。

日印交流のまさにパイオニアとして40年以上前からこの地でご活躍をされているスズキの最新鋭の工場、これを視察させていただくということは、日印交流を深化させるにあたっての成功の秘訣を学べるのではないかと非常に期待をしているところ。

先日、日本でも発売されたばかりで、浜松駅の新幹線のコンコースにも飾ってあるフロンクス、その全量をこの工場で生産をされていると聞いている。スズキの世界戦略の最新鋭、最先端を見せていただけるものと大変期待をしている。改めて我々を受け入れていただいたことに深く感謝を申し上げるとともに、ぜひいろんなものを得て日本へ帰りたい。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

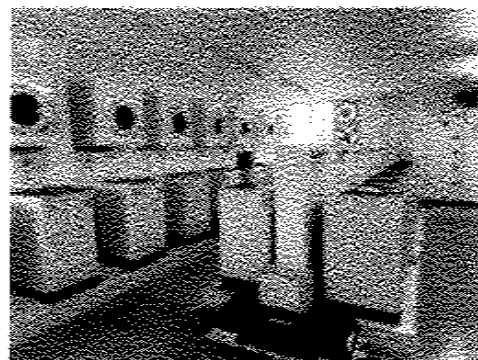
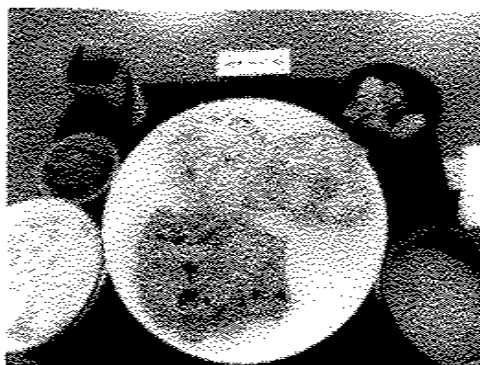
【所感】

グジャラート中心部から車で約2時間30分かけて当地まで来たが、工場の周辺は何もない荒地。40年前にこの何もない地に先見の名を見出したこと、そして今やこの地に日本と同品質かつ最先端のテクノロジーを活用した中で車両が生産されていることに驚く。工場内は綺麗で清潔そのもの。日本人のマナーをインド人に理解してもらうため、「ボケテハナシ」という工場内のルールを定めている。ボは、ポケットに手を入れない。ケは、携帯を見ながら歩かない。テは、手すりを使って階段を登る。ハは、走らない。ナは、斜め横断の禁止。シは、指差し呼称を徹底することだ。他にも、トイレの中にも張り紙がしてあり、マナーの周知がされていた。こういった社員教育が日本と同等の品質を実現できている要因だろう。また、他工場との差別化の一つとして、トラックをそれぞれの工程の真横で荷下ろしをすることができるよう環境が工夫されていた。これによってフォークリフトを使って運ぶ必要がなくなり、省人化及びスピード感をもって必要な部品を必要な工程のところに届けことが可能だ。FANUCのロボットによる自動化然り、日本のテクノロジー技術や工夫が散りばめられた工場だと感じた。

工場を視察後、スズキ・モーター・グジャラートの社員寮で昼食をいただいた。ここでも

日本品質は然りで、インドでは推奨されない生野菜もここでは安心して食べることができた。社員寮のレストランのトップは日本人が務めており、日本と同じ味で安心して日本食を食べることができるのは駐在する日本人にとっても喜ばしいことだろう。

スズキのインドにおける自動車のシェアは41.7%（2024年5月時点）。シェア50%以上奪還に向け、工場新設など今後さらに投資を加速していく予定だ。インドには欠かせないスズキ自動車の助力を得ながら、多くのインド人材が浜松で活躍できるようパートナーシップの構築と環境整備を模索していきたい。



日時：2024 年 12 月 23 日（月）13：30～14：30

訪問先：マンダル工業団地（豊通インディア社）

Toyotsu Bharat Intergrated services PVT.LTD.（以下、TBIS）

目的：静岡県企業も入居するマンダル工業団地において、豊田通商インディア社が運営するテクノパークを視察し、インドへ進出するメリットや課題等の現地ビジネス環境や企業のさらなるインド展開の可能性を模索する。

【要旨】

豊田通商インディア社

- ・ 本社はバンガロール。インド全体で複数拠点持っている。1999 年に駐在事務所としてはじめ、25 年が経った。
- ・ 現在、グループ会社を入れて 24 社、社員数で 1 万人弱ぐらい、駐在員 60 名程度の規模で運営。
- ・ 大きな柱としての事業は 3 つ。1 つは、インドにおけるモビリティの発展。2 つ目が、交通渋滞、交通事故、大気汚染等々、社会的な課題解決の事業。3 つ目は、インドを起点とした中東やアフリカへの架け橋をつくること。インドは歴史的に見ても東西の結節点とも言われている。
- ・ マルチスズキと合併会社にて自動車廃車のリサイクル事業を行なっている。まだ 1 拠点ではあるが、インド全州に拠点を広げるべく行なっている。法律的なところが大きいですが、リサイクルを通じて資源の有効活用ならびにサーキュラエコノミー、そしてカーボンニュートラルに貢献するという目的のもとに進めている。2 つ目は再エネの取り組み。まだまだインドでは遅れているが、非常にチャンスがあり、可能性が高いものと考えている。
- ・ セコムと合併で総合病院をバンガロールで運営している。まずは駐在員の方の生活の基盤になるような事業ということで始めたが、実は患者の 99% が現地のインドの方が利用している総合病院。社会基盤のこの地元への貢献ということで、今はまだバンガロールだけだが、こういった事業モデルを今後も広めていきたいと考えている。
- ・ TBIS は、豊田通商インディアの子会社。
- ・ 豊田通商インディアの全ての事業をテクノパークで行なっていると言っても良い。スズキを主とするモビリティ事業への貢献、当社日本式ものづくり学校を通じた地域人材育成の貢献、また、部品メーカーの支援によるものづくりサプライチェーンへの貢献を行なっている。
- ・ TBIS は、既存の 3 社を統合し、昨年 6 月に TBIS として新たに操業を開始した。テクノパーク事業とそれからロジスティック事業に加え、今後はものづくり分野にもチャレンジしていきたい。
- ・ 現在、インド内で 4 つのテクノパークを運営。立地の良さから、レンタル工場に入っている企業の中には、将来アフリカへの輸出を目論む企業もいる。企業はこういったところにメ

リットを感じ、注目している。過去の実績として、レンタル工場を活用し、最短6ヶ月で創業開始されたケースがある。

- ・インド進出の課題は3つ。用地取得ハードルの高さ、優秀な人材の確保の難しさ、法制部への対応等。

- ・まず、用地取得に関する課題は大きく3つある。慢性的な工業団地不足、複雑かつ不透明な制度・手続き、そして州政府の理解・協力。

- ・このスキームをプラグ&プレイということで案内しており、お客様が本業のものづくりに専念できるよう、支援している。これは土地建物の取得や電力・水の確保、許認可取得支援、工場周辺サービス等を整備し、「コンセントをつなぐだけで簡単に操業できる環境や、サービス」を提供可能とするもの。進出する企業のメリットとしては、進出期間を短縮可能とするだけでなく、インフラ等の初期投資を削減できる。また、日本式ものづくり学校を設置し、人材育成の面でもサポートしている。

- ・工場タイプとしては、大きく2つあり、1つはいわゆる賃貸マンションの形で必要なスペースを活用いただくレンタル型。もう一方が、入居企業様の使用に基づいて、いわば注文住宅のような形でTBISが工場を建設していくオーダーメイド型の2通り。

- ・レンタル工場は2棟あり。2000-3000㎡を一つの建物としている。日印の工業団地の一部を豊通が担い、その大きな枠をプロット（小分け）して中堅企業に貸し出している。レンタル工場に関しては、現在満床。

- ・現在、3棟目を建設することを検討中。

- ・オーダーメイドはフェーズ1、2、3と3つある。3か所合計で約10万㎡の空き地があるが、現在一部商談を進めている状況。

- ・人材確保について、ホワイトカラー、ブルーカラー、各々の重視すべき課題として就業環境の整備がある。通勤手段の確保、食堂、福利厚生など、基本的な設備の完備が必要。

- ・TBISでは、入居企業様にもご利用いただける食堂管理、医務室、安全教育を受けたドライバーによる通勤バスの提供等を提供している。

- ・人材育成の面では、（豊田通商インディアが運営主体となるが、）日本式ものづくり学校を敷地内に設置。

- ・インド全土で60年以上の技術分野の教育をしているNTTFと連携して3年間のプログラムを提供しており、地域の若年層と日系企業をつなぐ役割を果たしている。また、学生が将来の就業に有利になるように、提携先のグジャラート工科大学よりですね、ディプロマを発行してもらう工夫もしている。

- ・採用プロセスにおいては当初100名程度から最終20名〜30名に絞り込み、人材を選抜していく。

- ・クラスルームでは、ものづくりに必要な基礎教育、Excel、CAD等のPCスキル、さらに

は工作機械等の取り扱いを OJT で学べる施設となっている。

- ・成績や企業とのマッチングで採用に繋げていく仕組み。学生の費用は無償で、協賛企業の負担で給与が発生。これまで4期生まで計61名が卒業。そのうち、45名が日系企業に勤務している。

- ・当校としては、安全品質と日本式ものづくり、この考え方を指導し、将来的に現場のリーダーとなり後続を指導できる、こういった人材の育成を目指している。

- ・この地域は他地域と比べると多くはないが、過去をさかのぼると暴動がそこそこ発生している。そこで、テクノパークの入居企業様含め、日系工業団地での日系企業代表者が約9社いるが、JETROの音頭で定期的に集まり、マネジメントの視点で課題やその解決の方向性の協議、そして相互アドバイスできる環境を構築している。

- ・今後は当工業団地のさらなる活性化を目指して、インド人も含めたスポーツフェスティバル等を開催し、交流、連携を促進させていきたい。



【所感】

広大なインドで工業用地が足りていないのは、農地から工業用地に変更しようとする農村部からの猛反対にあうことも理由のようだ。

世界の経済大国第2位に躍り出た中国は、第一次産業から第二次産業、第三次産業へと順調に変化していったのに対し、インドでは、名目GDPでは第一次産業から第三次産業への産業構造の変化が起きているものの、就業構造の変化は追いついていない。インドの経済状況を考えると第一次産業と第二次産業の比重がもう少し高いはずだが、IT産業の発展により第三次産業の比重が非常に高くなっている。この背景には、カースト制度というインドの歴史と、農村地域における教育水準の低さがあり、農業セクターから資本・知識集約型セクターへの移動が限られていることが挙げられると推察する。インド政府としても工業用地を急激には広げられないだろう。

そのような環境の中で、TBISのような事業を行っている企業は重要だ。インドの人口やGDPの成長率を鑑みても、インドでビジネスを展開・参入を模索している日本企業は少なくないだろう。今回視察したTBISの建売の土地はまだ10万㎡ぐらいが余っているが、スズキ関連のサプライヤーが来てくれることを望んでいる、とTBISの代表は話していた。浜松の企業がインドへ活躍できる環境を、本市もインドの関係機関とともに模索していく必要があると感じた。

日時：2024 年 12 月 23 日（月）17：00～21：00

訪問先：グジャラート国際金融都市（GIFT CITY）内、GIFT CITY CLUB

目的：Next Billion FORUM に参加するとともに Next Bharat Ventures IFSC Private Ltd.の社会起業家支援の状況を把握し、本市との企業間の連携を模索する。

【要旨】

GIFT シティ

- ・ナレンドラ・モディ首相によって構想された金融センターは、インドで最も先進的なスマートシティ。
- ・土地面積 3,300 エーカーの中に、国内関税地域 625 エーカー、特別経済区 261 エーカー、計 886 エーカーが存在。
- ・アーメダバード国際空港から 20 分、新幹線ターミナルから 15 分の立地。
- ・最先端の AWCS（自動廃棄物収集システム）や電力などのインフラに加え、あらゆる外貨での取引が許可された IFSC（国際金融サービスセンター）などが整備されている。
- ・スマートオフィス、住居、病院など、現在 30 程度の建物を建設中。
- ・2024 年 10 月までの IFSC の実績として、134 のファンド運用機関が登録し、銀行資産総額は 710 億ドル以上、累積銀行取引額は 1 兆 140 億ドル以上など。
- ・10 年間の免税や運用コストの低さ、優秀な人材が揃っているなど、様々なメリットがある。

インド側発言要旨

- ・インドが 2047 年までに先進国になるためには、日本の生産管理の考え方など日本の協力が不可欠。
 - ・インドは輸出国となる必要があり、税制の整備、インフラの整備、技術、人材育成などを整備する必要がある。
 - ・雇用、生産能力の向上、経済、イノベーションの促進など、スズキがインドで果たした役割は大きい。
 - ・インドの女性たちを組織化すること、そしてマイクロ企業にして女性たちが取り組むことが必要。デジタル決済もスピーディに可能。おかげで 90%の女性が口座を持つことができた。インドでは 80%の人がデジタル決済で完了できる。
 - ・必要なのは資本。何万人の貧困を救うためには大企業ではなくマイクロ企業や零細企業、女性たちへ投資を振り分ける必要がある。
 - ・40 年前にスズキは全てにおいて遅れていたインドへ投資した。この大きなリスクを冒してでもインドに来てくれたスズキに感謝しているし、日本の企業にもリスクを背負ってどんどんインドへ進出してほしい。
- スズキはインドに新しい価値観をもたらしてくれた。スズキはインドの家族。感謝している。

・Next Bharat の実績例として、羊から得た羊毛を住宅用の断熱材に変えたことで収入を3倍に増やすことが出来た。こうした社会起業家に資金とリソースを提供し、インパクト起業家を支援している。

【Next Bharat 挨拶】

40 年以上インドでビジネスをさせていただいている。お客様、お取引先様を含め約 4 億人の方々と関わらせていただいているが、総人口 14 億人のうち、まだ 10 億人の方々と関わっていないというのが現状。これから次の 10 億人と呼ばれる Next Billion の方々と関わり、インドのさらなる経済成長の発展に貢献していきたいと考え、Next Bharat を立ち上げた。

そもそも次の 10 億人というものは何かということだが、例えば税金を納めており、オフィスで働いているような方々を India1、トゥクトゥクのドライバーやストリートで食べ物を販売しているようなインフォーマルセクターの方々を India2、そして農村部に住んでいて農業に関わっているような方々を India3 と区分けしている。Next Bharat は、この India2、India3 にフォーカスして、彼らの収入を上げるようなビジネスをしている起業家を支援していく。

では、どのように次の 10 億人の人たちに価値を創出できるのか。次の 10 億人の人たちは、例えば農作物の価格変動、金融へのアクセスといった多数の課題に直面している。こういった課題に対して、インド各地で問題を解決するためにビジネスを展開しているインパクト起業家と呼ばれる人々がいることがわかってきた。こういったインパクト起業家の人たちを支援していくことによって、この次の 10 億人の人々に対する価値を最大化させることができると考えている。

インパクト起業家の例を挙げる。

1 人目は■■■■さん。この方は、オディサ州のコットン農家の人々が貧困で苦しんでいる、低収入によって苦しんでいるという現実を目の当たりにして、ヤギを商材としたビジネスを展開することによって、コットン農家の人々にとって新たな収入を創出できるようビジネスを展開している。

2 人目の■■■■さん。ラジャスターンの砂漠地帯において羊を牧畜しているコミュニティの人たちにとって羊毛というものが、価値のあるものになっていなかったが、■■■■さんのビジネスによって、その羊毛から新たな建築用の断熱材を商品化することによって、新たな羊毛の価値を生み出している。

このように次の 10 億人の方々の課題を、ビジネスを通して解決し、価値を創出しているインパクト起業家を私たちは支援していきたい。

私たちは、インドにいるインパクト企業家 100 人以上にインタビューをし、現在彼らが享受できる支援において何が欠けているかを調査した。その結果、大きく 3 つのギャップがあることがわかった。

1 つ目は、エージェントキャピタルの役割。インパクト起業家のビジネスは、ゆっくりで

はあるものの着実な成長を進めるようなビジネス体系が多いのに対し、従来の投資機関は急成長できるスタートアップを求めており、このような技術体系のインパクト起業家に投資できる機関が不足している。

2つ目は、インドにおいてインパクト起業家のためのコミュニティがないこと。すでにインドではTechスタートアップのコミュニティがあり、このビジネスのTechスタートアップの起業家はお互いに繋がり、ビジネスノウハウやネットワークなど、助け合いながらそれぞれのビジネスを成長させる好循環なコミュニティができています。一方で、インパクト起業家はインド中、津々浦々に散らばっていて、1つのコミュニティがなく、それぞれが孤立してしまっているのが現状。

3つ目は、インパクト起業家は無名のスタートアップであるため、ビジネスを成長させるための鍵となる外部のネットワークが乏しく、特に国外のネットワークのつながりがほぼないというのが現状。

インパクト起業家がより早く、そして着実にビジネスを成長させ、次の10億人の方々に還元することができるよう、これらの問題を解決するための活動を行っている。その活動の一部を紹介する。

1つは、4ヶ月間のインパクト起業家支援プログラムを通じて、インパクトと起業家のコミュニティの構築や投資などの機会を促進することを目指している。

次に、スズキイノベーションセンターでの活動として、Next Bharatのシンクタンクとしてインパクト起業家が必要とする情報やネットワークを提供することを目指している。

最後にジャパンシナジーについて、日印協業による次のNext Billionへの新たな価値創造と日本企業へインドにおけるビジネス機会の理解と新市場の共同創造の場の提供も目指している。

今後もこのような活動を通じて、また皆様のご意見やアイデアをお聞かせいただきながら、インドのさらなる発展に貢献していきたい。

【鈴木康友 静岡県知事 挨拶】

スズキの次への挑戦として強烈な印象を受けた。このスズキの新たなチャレンジ、挑戦は、これからのグジャラート州と静岡県の連携にとっても大きな意味を持つだろう。

私は静岡県知事に就任する前、16年間浜松市長を務めていた。中でも特に力を入れて取り組んだのがスタートアップ、いわゆるベンチャー企業の育成・誘致。

なぜスタートアップなのか。それには大きく2つの意味がある。1つは、世界的に見てスタートアップが集積している地域は経済が成長していくこと。

2つ目は、スタートアップが今、社会課題を解決のために大変重要な存在であるということ。社会課題が複雑をしていく時代の中で、行政だけではなかなか対応しきれない。課題解決能力のあるスタートアップと連携をするということは、これからの自治体行政にとって大変重要な取り組みだと思っている。私が16年で培った経験を、これから静岡県知事とし

て静岡全体の発展のために活用していきたい。特に私が力を入れていきたいことは、世界のスタートアップとつながること。

明日、パテル州政府首相と協定を締結する。この協定の中にはスタートアップの交流という大変重要なファクターが入っている。グジャラート州あるいはインドの素晴らしいスタートアップ企業に静岡県へ来ていただく。そして、静岡県の素晴らしいスタートアップにグジャラート州へ行っていただき、新たなビジネスチャンスを開く、あるいはグジャラート州の社会課題の解決に貢献をする、そういう交流をしていきたい。そうした中、今回スズキが新たに課題解決に力を入れるスタートアップ、インパクト起業家を支援していくということは、我々にとっても大変心強いメッセージだと感じる。これからスズキとともにグジャラート州と静岡県の素晴らしい交流を深化させていきたい。

今日ここにお集まりの皆様にも一層のご理解とご支援を心からお願いしたい。

【杉山盛雄 静岡県議会団長 挨拶】

本日はご多忙にも関わらず、私たちのために丁寧な説明を賜り、心から感謝を申し上げます。静岡県には富士山があり、そして何よりスズキ自動車の本社がある。本日は、この静岡県を代表し、インドの国内でも先進的な地域である GIFT シティを訪問できたことを大変嬉しく思う。

この GIFT シティは、インドにおける金融、またテクノロジーの中心地として急速に発展をしており、その先進的な取り組みやビジネス環境は、私たち静岡県にとっても大変に参考になった。

特に、外貨での資金調達、また法人税の免除といった優遇に加え、Fintech 分野を中心に、有望なスタートアップ企業の育成支援に力を入れていくことに成長のヒントがあると深く感じた。また、皆様の並々ならぬ意欲を肌で感じることができ、私たちも大いに刺激を受けたところ。今回の訪問が、静岡県とグジャラート州の交流を深め、相互理解を促進するような重要な機会になることを心から期待している。

私は、2年以上前から [] とこの機会を作ることをずっと相談をしてきた。今日これが実現をし、明日いよいよグジャラート州と調印ができることを本当に心から嬉しく思っている。私たちの地域には伊豆半島もあり、温泉と観光に非常に力を入れている。インドの皆様にも心より歓迎をいたしますので、ぜひお越しください。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった関係の皆様にも改めて感謝を申し上げるとともに、今後の交流が実り多きものになることを心より祈念する。

【中野祐介 浜松市長 挨拶】

本日は Next Billion Forum に多くの皆様のご参加のもと、盛大に開催されましたことを心からお祝いを申し上げます。また、静岡県、浜松市訪問団が参加させていただいたことに熱く感謝を申し上げます。

昨晚、インドへ入国し、世界でも有数の発展を遂げるインドの活気、活力を肌で感じているところ。GIFT シティも、Fintech をはじめとする新しい時代の世界金融をリードする地域であると感じた。

日本は戦後、奇跡的な成長を遂げたという風に言われているが、それは単に利益を追求するだけでなく、社会課題の解決を合わせて行ってきたことで今の日本の発展はあると思っている。世界の経済大国の一角となったインド、単に成長遂げているだけではなく、社会課題の解決を目指して新たな企業の参入、これがここからスタートする、これは非常に意味がある。Next Bharat Ventures がこれから素晴らしい活動をされるだろうが、スズキ株式会社の果たす役割が非常に大きいものがあるだろう。浜松市としても、その活動に少しでも貢献できるよう、また連携が取れるようにこれから様々な取り組みを進めていきたい。これからの活動によって、インドのさらなる発展がもたらされること、そして世界全体の繁栄につながることを祈っている。



【所感】

2047 年までに先進国になることを目標としているインド。この目標を達成するためには次の 10 億人と呼ばれる Next Billion の方々が活躍できる社会を作っていくことが重要だ。トクトクのドライバーやストリートで食べ物を販売しているようなインフォーマルセクターの方々である India2、農村部に住んでいて農業に関わっているようなの方々である India3 の層を、どのように India 1 に底上げしていくかが成否を分けるだろう。スズキが立ち上げた Next Bharat 社は、まさにこの India2、India3 にフォーカスして、彼らの収入を上げるようなビジネスをしている起業家を支援しているため、インド政府にとっても、そしてインド国民にとっても恩恵のある魅力的なビジネスだ。

GIFT シティは、Fintech をはじめとする新しい時代の世界金融をリードする地域であり、ここで今回の Forum が開催されたことも意義深い。Next Bharat 社の方に話を聞くと、社会課題があるからこそ、そこにビジネスチャンスがあると熱く語っていた。インドにとって、新しい金融の在り方とそこに社会起業家を支援していきながらビジネスを拡大させていくという新しい取り組みが、今後のインドにとって大きな役割を果たすものと感じた。

日時：2024 年 12 月 24 日（火）9：00～10：00

訪問先：アーメダバード市役所

目的：アーメダバード市と市民レベルでの友好関係を構築するため、文化的な交流だけでなく、スポーツや教育等、多分野での交流の可能性を模索する。

【概要】

- ・2023 年の人口は約 800 万人で世界第 270 位、インド国内では第 7 位。
- ・アーメダバード市は農業や綿織物が盛ん。カイト（凧）を揚げる文化があり、毎年 1 月 14 日には一大イベントが開催される。
- ・今後、浜松市と文化面等での協力関係を構築していくことの覚書を締結することにアーメダバード市長も賛意を示した。



【所感】

やや短い時間であったものの、アーメダバード市長への表敬訪問し、アーメダバード市長は我々を温かく歓迎してくれた。残念ながら今回はインド政府の承認が間に合わず、アーメダバード市との覚書締結はできなかったものの、アーメダバード市も本市との覚書締結について歓迎ムードであり、本市との友好関係や協力関係の構築に期待をしていることが伝わった。会談では、人材交流や産業交流に加え、凧（カイト）の交流など文化的交流を実施していくことで合意した。お互いに凧揚げの文化もあり、今後の両市の協力関係に期待するとともに、私も協力を惜しまずにこの枠組みに参画していきたい。

日時：2024 年 12 月 24 日（火）11：00～14：00

訪問先：グジャラート州政府

目的：グジャラート州政府と強固な関係を築くため、同州政府を訪問し、友好協定を締結する。



【有吉孝史 在インド日本国大使館次席公使 挨拶要旨】

- ・グジャラート州には、日本企業が 40 社進出している。その最大手がスズキ自動車。
- ・ジェットロがイベントを開催し、日本企業の進出をサポートしている。
- ・東京エレクトロンとタタエレクトロンも MOU を締結した。
- ・グジャラート州は貨物線も発展してきている。
- ・二カ国間の発展、静岡県とグジャラート州のパートナーシップが発展することを願っている。

【中野祐介 浜松市長 挨拶】

本日は、グジャラート静岡パートナーシップデイに日印両国の多くの皆様ご参加のもとで盛大に開催されますことを心からお祝いを申し上げます。また、ルベンドラパテル州政府首相閣下をはじめ、グジャラート州の皆様には、我々、静岡県、浜松市の訪問団を温かく受け入れていただきましたことに心から感謝を申し上げます次第。我々は一昨日インドに入国した。成長、発展著しいインドの中でも、最も開発が進んでいる地域の 1 つであるグジャラート州の規模感に圧倒されている。これからさらに飛躍をする、そんなポテンシャルを持ち合わせている国であるということも実感したところ。

先ほど、アーメダバード市長を表敬訪問させていただいた。今後の交流、協力について、大変有意義な有益な対話をさせていただいた。グジャラート州におかれては静岡県と連携を進めるべく、本日調印がなされる。グジャラート州、アーメダバード市、そして静岡県と浜松市が連携をして友好関係を築いていける、そのような関係を作っていただければと思っている。

浜松市では、インド国籍の市内移住者が年々増えている状況。インドからの留学生が増える、またインド国籍の方々の雇用が増える、そしてその一方で、我々浜松市からインドへ進

出を考えている、そのような企業もたくさん現れてきている。このように人材交流、経済交流がより一層進んでいる中にあり、官民ともにインドとの連携、これを一層高めようという機運が高まっているところ。

浜松市には、スズキの本社も所在するという事で、インドの方々も一度は耳にしたことがある都市ではないか。浜松市は製造業を中心に日本の発展、成長を牽引してきた地域。一方で、グジャラート州は成長、発展著しいインドを牽引する、工業の観点から浜松市とも非常に似ているという風に思っている。

今回の訪問を契機として、より一層関係が深まり、その連携協力関係が両地域の、また両国の持続的な発展につながることを期待している。本日は、両国の両地域の新しい歴史の1ページを開く、そんな1日になればと願っている。

【鈴木俊宏 スズキ自動車代表取締役社長 挨拶】

グジャラート州のブベンドラパテル州政府首相閣下、静岡県知事、アーメダバード市長、浜松市長並びにご臨席の皆様にご心より敬意を表す。

スズキは静岡県浜松市で創業した。そして、インドでの長い旅を経て、グジャラート州という新たな故郷にたどり着いた。グジャラート州はスズキにとっても世界へのゲートウェイになっている。

2017年2月にグジャラートで操業を開始して、6年11カ月後の2023年12月には累計で300万台の生産を達成し、スズキの生産拠点として最速の成長を続けている。

スズキ、東芝、DENSOによるリチウムイオンバッテリー製造拠点は、グジャラートへの技術移転を進め、環境車の普及を促進している。また、スズキは、その国や地域に合ったマルチバスウェイの一環で、酪農のプロフェッショナルと協力し、インド政府が目指す牛からのCBG（圧縮バイオメタンガス）事業に参画した。代替燃料の促進、メタンガスの削減と農家の人々の収益向上にも貢献していく。

Made in グジャラートのフロンクスは67カ国へ輸出している。今年10月には日本で発売し、現在納車7か月待ちとなっており、来年には欧州や日本などへのBEV車を輸出する計画。

ところで、工場のある地域には10店以上もの日本料理レストランも比較的多く営業している。グジャラートは日本人にとって住みやすい町になりつつある。

グジャラートへの投資が地域にどのようなポジティブなインパクトを与えたか、インド工科大学アーメダバード校とインド農村経営大学が調査を行った。政府の投資や支援、スズキの事業、マルチスズキが支援する病院と学校の建設や運営などの相乗効果により、87%の方々が生活水準の向上を体感されている。

医療環境についても77%の方々が、また教育環境については67%の方々が良くなったと実感していただいている。学術的にも弊社の事業がグジャラートの発展につながっている評価をいただき大変光栄。

最後に、今後の取り組みについて申し上げる。すでに発表済みではあるが、新たに 100 万台規模の工場を建設する。また、2022 年のスズキのインド進出 40 周年式典において、この会場で発表したスズキ R&D Center India Private Limited が、この度、IACE との間で覚書を締結し、小さくたくましい電動台車で Viksit Bharat 目標に貢献いたします。これをモビリティインフラとしてインドのスタートアップと協力し、その先にある農家、工場、物流の効率化を支援する。さらに、スズキはアーメダバード経営者協会と協力し、1980 年以降、インドの労働文化を変えたとお言葉をいただいている日本式の経営やスズキの考え方についてセミナーや研修を行い、人材育成のお手伝いを始める。

改めて、本日のイベントに招待いただいたことに感謝をすると同時に、今後のグジャラート静岡県、アーメダバードと浜松の長期にわたる友好関係を記念して、私のご挨拶とさせていただきます。

【杉山盛雄 静岡県議会団長 挨拶】

グジャラート州は、豊かな文化を持ちつつも、先進的な取り組み、それによってインド国内で最も工業化が進展している大変に注目すべき地域と認識。

本日は静岡県議会を代表し、本県の有力企業であるスズキ株式会社との関係の深いこのグジャラート州を訪問できたことを大変嬉しく思う。

静岡県議会としては、先日、静岡県と海外の地方公共団体との友好交流に関する条例に基づき、インド共和国グジャラート州との友好協定の締結に満場一致で賛成する議決を行ったところ。

私たちの訪問が静岡県とグジャラート州との友好関係を深め、さらなる交流と協力を促進するための重要な機会になる。このことを心から願っている。また、今回の訪問ではインド初の国際金融経済特区である GIFT シティ、またインド初の高速鉄道現場の視察をさせていただき、温かい歓迎を受けるとともに、力強い発展を間のあたりにし、深く感銘を受けた次第。この感銘を日本に持ち帰り、本県の産業振興に役立てていきたい。

グジャラート州との友好関係を深めることで、経済や文化の交流を促進し、お互いの発展に寄与できると確信をしている。今後のさらなる交流と、皆様の健康と益々のご活躍を祈念する。

【鈴木康友 静岡県知事 挨拶】

本日は、グジャラート州と静岡県、そして浜松市とアーメダバードをはじめとする友好交流のパートナーシップデイが盛大に開催されることを本当に嬉しく思う。パテルグジャラート州首相はじめ、グジャラートの皆様には訪問団を歓迎いただいたことに、心から熱く御礼を申し上げる。今日の協定に至るまでには長い歴史があった。

紐解けば、1982 年にスズキ株式会社がこのインドへ進出したことが始まりであったという風に思う。当時、アメリカやヨーロッパへ進出することはあってもインドへ進出をした。

それを成し遂げたのは[REDACTED]。私も長い付き合いになるが、素晴らしい経営者であり、ものすごい強運の持ち主でもある。先ほどインドの方とお話をしていたら、インドの皆さんもこの運というのはすごく大事にしているという風に伺った。運の強さと、もう1つ大事なことは絶対に決めたらやり遂げる、その強い意思と実行力。私のもう1人の師匠であるパナソニックを創業した松下幸之助翁は、やはり成功するまでやり続けることが大事だと仰っていた。偉大な経営者はやはり共通した思いを持っている。

松下翁は、成功の要点は成功するまで続けるところにあるとおっしゃった。まさにそれを実践されたのが[REDACTED]だと思う。

色々お話を聞くと、進出した頃はもう大変なご苦労があったという風に伺った。しかし、一旦決めたら絶対に諦めない。そうした困難を1つ1つクリアして、克服をして、そしてスズキの素晴らしい社員の皆様と一緒に今のインドの自動車産業、そしてスズキの隆盛を作り上げた。こうした歴史のもとに、私たちは今ここにある。

もう1つは、モディ首相とお会いをしたことにあると思う。グジャラートの奇跡と言われるような大変な経済発展を成し遂げたモディ首相と[REDACTED]は相通ずるところがあっただろう。グジャラート州とスズキがパートナーシップを組んだということも、これは1つの運命だと思う。

そうした長い歴史のもとに、私たちは今、静岡県とグジャラート州と大事なパートナーシップを結ばせていただいた。スズキが作り上げたこの歴史の上に、私たちは新たな歴史を作り上げようとしている。経済、教育、文化、観光、様々な分野でこれからグジャラート州と静岡県は未来に向けて共に歩んでいきたい。

その中でも経済が大事。スズキは、これから自動車の生産を100万、そして200万、そして2030年には400万台にしていきたいという構想を発表された。そのためには、それを支える多くの企業が必要。

静岡県はものづくりの先進県。自動車産業の大きな広い裾野がある。そうした企業がこのインド、そしてグジャラートの成長を1つの大きなビジネスチャンスと見て、どんどんインドに進出をしようとしている。静岡県はこうした企業をしっかりと支援をしていきたい。ものづくりの中心であるモジャラードとものづくりの先進県である静岡が組めば、新たなものづくりの歴史が開かれるだろう。

2つ目は、スタートアップ。私は知事になる前に、浜松市長を16年間務めてきた。その時に、スタートアップの育成、誘致に特に力を入れてきた。理由は2つある。

1つは、スタートアップが集まる地域は必ず経済発展、経済成長すること。これは、シリコンバレーを含めて、世界のどんなスタートアップの集積にも同様。このグジャラートも今スタートアップで、新たな経済成長を必要としている。私もスタートアップを集めて、新たな地域の活性化を図りたい。

2つ目は、スタートアップはこれからのいろんな社会の課題を解決する力を持っているということ。昨日、GIFTシティでスズキが新たにNext Bharat Venturesというファンドを創

設し、インドの様々な社会課題を解決する社会起業家を支援していく取り組みを始められた。とても素晴らしい取り組み。スタートアップにはこうした社会課題を解決する力がある。スタートアップのグジャラートと静岡県との交流、これは新たな未来を開くことになると思う。

静岡の農業の新しい生産技術を持った企業が今度インドへ進出をするという話を聞いた。インドの新しい農業生産の新しい形を自分たちの持つ技術でインドの農業を変えていきたいと、そんな思いで今度インドへ進出するという話を聞いた。スタートアップというのはこういう力を持っている。グジャラートのスタートアップ、そして静岡県のスタートアップ、相互に交流することによっていろんな社会課題を解決する大きな力を発揮すると思っている。

そして、教育や人材交流。今、静岡県ではインドのIT技術者をはじめとする素晴らしい高度人材を県内の企業と結びつけようという取り組みをしている。すでにいくつかの成果が生まれている。

今回、杉山団長のお誘いで静岡県東部にある木村鋳造所という企業の社長が参加してくれた。鋳造技術というのはものづくりにとってすごく大事な技術。その鋳造の技術を、今インドの皆さんに鋳造技術を教えるべく、インドに進出をされるという風に聞いた。こうした人材の交流がすでに始まっている。お互いWin-Winになるよう、こうした人材交流もこれからどんどん進めていきたい。

そして、観光も大事。グジャラート州はとても素晴らしい歴史、自然、そして観光の資源にも恵まれている地域だと伺った。静岡県には富士山がある。無数の温泉や自然資源に恵まれた伊豆半島がある。中部には駿河湾がある。ここにはたくさんの海底資源が眠っているし、素晴らしい魚など、大いにこの地域を潤している。西部には、浜名湖という素晴らしい湖がある。

静岡県東部、中部、西部、それぞれ素晴らしい観光資源がある。これからぜひグジャラートの皆様にこうした静岡県の素晴らしさを感じていただくためにどんどん静岡へお越しいただきたい。バテル州政府首相閣下に来年にでもぜひ静岡へお越しをいただきたい。また、静岡の皆さんにも、どんどんグジャラートへ観光に行きましょうと、こんな取り組みをした。これから経済、教育、観光、文化、様々な分野で、グジャラートと静岡県の未来を作っていきたい。皆さん力合わせて、未来に向けてこれからスタートしましょう。

【所感】

今回、グジャラート州と静岡県が覚書を締結したことの本市に与える影響は大きいだろう。豊かな文化を持ちつつ、先進的な取り組みによってインド国内で最も工業化が進んでいるグジャラート州の活力を静岡県ひいてはグジャラート州の最大都市であるアーメダバード市と提携する本市にその活力を取り込むチャンスだ。バテル州政府首相も我々を歓迎してくれた。今後の静岡県とインド・グジャラート州との協力関係に注視していきたい。

日時：2024年12月24日（火）15：00～16：30

訪問先：アーメダバード経営者協会（グジャラート印日友好協会）（以下、AMA）

目的：インドとの市民レベルでの友好関係を構築するため、音楽、美術、伝統芸能など文化的な交流の可能性を探る。

【グジャラート州印日友好協会 概要】

学術、ビジネス、文化面における日印の協力と理解促進を目的に 197 年に設立。アーメダバード経営者協会（AMA）と提携。会長は、XXXXXXXXXX氏。

【鈴木俊宏 スズキ自動車代表取締役社長 挨拶】

マネージメントアソシエーションの皆様、本日はこのような機会を用意していただき、誠にありがとうございます。NGO である AMA が、1967 年からアーメダバードの未来を担う若い経験層や地域の方々に研修の機会を提供し、学術、産業、文化、それと多岐にわたる交流の場を設けられていることに心より敬意を表します。

2017 年にスズキ・モーター・グジャラートが操業を開始いたしました。この会社を作るにあたり、改めて日本式、スズキ式の働き方を研修に取り入れ、多くの日本人指導員を派遣しました。1982 年にインド政府と契約し、当時のマルチウドヨグ社へスズキ式を伝道しました。今回、AMA より、日本式、スズキ式の考え方を AMA でも検討したいお声がけをいただきました。私としても、スズキの考え方や働き方について、インドの皆様に限らず、社員にもしっかりと検証していかなければならないと考えましたので、大変良い機会だと賛同いたしました。セミナーの開催など協力していきたいと存じます。皆様のご支援をお願い申し上げます。

AMA にはグジャラート州と日本の友好をこれまで応援していただいております。今回訪問されている静岡県、浜松市の皆様とグジャラート州、アーメダバード市の友情とご来場の皆様のご多幸をお祈りして、私からのご挨拶とさせていただきます。



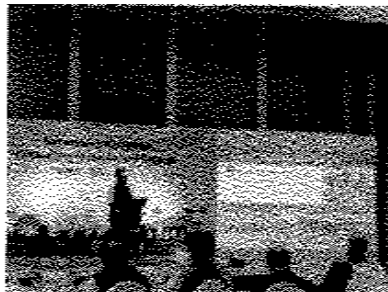
【所感】

アーメダバード経営者協会は、日本で言えば商工会議所のようなところであると思う。会長である■■■■氏は、グジャラート印日友好協会の会長でもあり、非常に新日だ。今回の訪問は、我々の訪問団を歓迎いただき、静岡県ひいては浜松市の企業やとアーメダバード経営者協会に加盟する企業や団体等との友好的な発展に寄与するものと感じた。インド企業は日本式の経営手法やカイゼンなどを求めており、そういった中で日本企業が進出することも大いにあり得るだろう。両国が win-win になるためにもこういった協力関係を大切にし、今後の本市とアーメダバード市の企業間協力について引き続き模索していきたい。

日時：2024年12月24日（火）18：00～19：30

訪問先：ハイアットリージェンシーアーメダバード

目的：現地機関とのネットワークを構築する。



【マルバン グジャラート州政府産業大臣 挨拶】

皆さんを心よりこの晩餐会に歓迎を申し上げます。ご出席いただいたということは、皆さんがこの関係を強化するために特別な努力をされている証であり、私にとって非常に誇らしいことだと思います。日本からだけではなく、本日インドからも多くの参加をいただきまして、この協力関係をさらに構築できることは私たちにとって誇りです。

インドと日本の関係は、国民に愛されている尊敬すべきモディ首相の長年のたゆまない努力のおかげです。モディ首相は私たちの関係を強化しただけではなく、世界に対してこの友情の新しい模範を表してくれました。バケル州政府首相も同じ道を歩んでいます。この晩餐会は単なるイベントではなく、両国、両地域の協力と連携の新しい時代の幕開けでもあります。この友情を祝福し、新たに共に前進する決意をいたしましょう。日本の企業がグジャラートを自分の故郷とってくれるような努力を、我々州政府もやっていきます。

【 在インド日本国大使館次席公使 挨拶】

本日、グジャラート州と静岡県、アーメダバードと浜松市の友好関係を実際に立会人として見せていただき感銘を受けました。このグジャラート州と静岡は、インド、日本、それぞれ非常に力のある地域であり、それぞれの経済を引っ張っている地域とも言えるかと思います。さらに本日は友好協定も締結されたということで、もちろんスズキ自動車を代表とする自動車産業だけではなく、再生可能なエネルギー、クリーン技術、そして半導体といった分野においても、2カ国間の間では大いに進展が期待できるものではないかと思います。そして、本日ここに来るまで多くの方々にご尽力いただいていること、本当に皆さんの努力を、在インド日本大使館を代表して、あらためて感謝したいと思います。

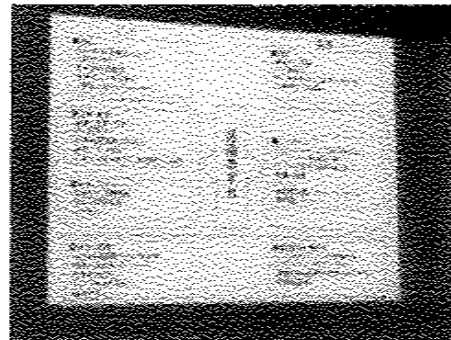
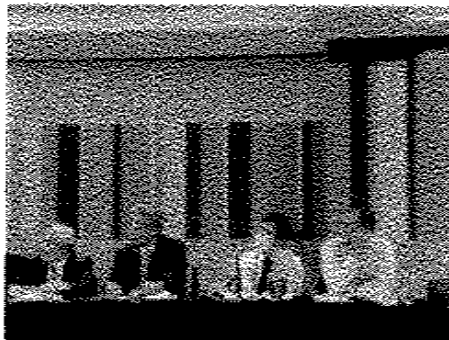
【所感】

開始時間が遅れ、短い時間ではあったが、現地企業やJETROなどの現地日本機関などとも参考になる意見交換が実施でき実りある時間だった。こういった交流の場を重ねることが重要であると感じた。

日時：2024 年 12 月 25 日（火）11：30～14：30

訪問先：IBIS NewDelhi Aerocity

目的：全日本空輸株式会社インド総代表兼デリー支店長にインドから日本に來ているワーカー層の現状及びインドの送り出し機関の現状等を把握し、本市へインド人材を呼び込むための可能性を模索する。



【中野祐介 浜松市長 挨拶】

今日は、全日空インドの■■■■総代表兼デリー支店長に大変貴重なお時間をいただき、本当にありがとうございます。

今回、インドとの人材交流、人的交流の拡大を大きなミッションとしているわけでございます。浜松市はものづくりの街と言われており、ホンダ、楽器のヤマハ、ヤマハ発動機、そして何よりインドと大変縁の深いスズキ自動車、これも浜松発祥。非常にものづくりの盛んな町でございます。かつ、日本のその時々、時代の流れに応じて常に最先端の産業が起こり、成長、発展を遂げてきた街となっております。これからの日本の産業発展、経済発展を引き続き牽引できる地域だと思っている一方で、他の地方都市と同じく、人口の減少、それによる産業の担い手、これが今大きく制約を受けているところであり、様々な技術的な蓄積もあり産業の蓄積もある浜松ではありますけれども、人手不足が大きな制約となって産業、経済の発展、地域全体の発展の足を引っ張るような格好になりかねない状況にあるところでございます。そういった中、浜松のもう 1 つ特徴として外国人の皆さんと共生してきた街ということも言えるわけでありまして、1990 年の入管法改正以来、南米の日系人の方々が大変多く浜松に入ってきていただきまして、その多くはブラジル人、そういった方々と共にこの地域の産業をまた地域全体を活性化するというのを始めてからもう 30 年以上になっております。

現在、浜松市の人口は 79 万人ぐらいいますが、そのうちの 3 万人、大体 4%弱が外国籍の方ということで、日本の国内においても国際化が進んでいる代表的な都市の 1 つだと思っております。そういったポテンシャル、利点も生かしながらかぜひこの海外から多くの有利な人材を浜松に呼び込む、それによって浜松の経済、産業の発展をさらに進め、日本全体の

発展につながってくる、そういったような環境をぜひとも作っていききたいということで、今回インドを訪問させていただいたということです。

コロナまでは、浜松市のインド系住民の方は 200 人台ぐらいで推移をしていましたが、昨年で 400 人、それから今年、2024 年で 800 人ぐらいに増える見込みで、倍、倍とインドからの入ってきていただける住民の方が増えて、より一層インドからの人材を呼び寄せたい、それに向かって人材交流を進めていきたいところであります。

我々のミッションの後半は、インド工科大学ハイデラバード校などと協定を結ばせていただくということであります。高度人材、理工系の人材あるいは IT 人材を浜松に、ということで協定を結ばせていただくことに先立ち、今回こちらをお邪魔いたしましたのは、14 億人という世界最大の人口を持つインドの高度人材だけでなく、工場の現場、産業の現場、あるいは観光、介護、医療、運輸、そういったサービス産業の現場を支える人材も足りない。さらに、農業、林業といった一次産業の現場でも人手不足が非常に深刻であり、そういった現場の人材をインドからぜひお招きをしたい思いがあり、その世界の第一人者であります、■■■■ 総代表のお話をぜひ伺わせていただきたいということで、今回お邪魔をした次第でございます。インドは、極めて親日の国だと伺っておりますし、語学も長けた方々、習得が非常に早い方々が多いというお話も伺っているところでございます。

ぜひそういったインドの特性なども色々お聞かせをいただきながら、いかにインドから多くの皆さんに来ていただける環境を築いていくにはどうしたらいいのか、その知恵をぜひともいただきたいという風に思っております。ぜひ我々にとって有意義なお話をいただけたらという風に思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【■■■■ 全日本空輸株式会社インド総代表兼デリー支店長 要旨】

- ・■■■■氏がインド人材に着目したきっかけは、コロナで新しい需要を開拓していかないとこの先は厳しいと考えていた矢先に、ベトナム人技能実習生のネガティブな報道を見て、インドはどうなっているのかを調べ始めたのがきっかけ。
- ・できるだけ日本にインド人材のクオリティの高さ、良さを知っていただきたいと思い、インド各地のセミナーに行って日本を知ってもらう取組や、送り出し機関や管理団体と協力しながらマッチングイベントを行なっている。その他、日印協会の月刊インドに寄稿したり、Pivot 等の Youtube への出演、ANA 社の公式 Youtube チャンネル、インド国内、日本全国で日本とインドの魅力を講演も行っている。

インドの特徴

- ・インドは、コルカタ、ニューデリー、ムンバイ、ベンガルール、チェンナイ、アーメダバード、ハイデラバード、この 8 都市が Tier1 という 400 万人以上の都市。8 大都市を合わせても人口 1 億人もいかない。インド人は圧倒的に農村部にいる。しかも 20 代の若者が、仕事がなく困っている状況。

・インド人は基本的に悪いことをしない。凶悪犯罪はなく、鞆をその辺に置いておいても誰も盗んだりしない。性格は、温厚、誠実、そして明るい。語学習得が極めて早い特徴もある。

・インドの親も、子どもを外国に出稼ぎ労働に出すということに対して当然不安があるが、日本は安全で親切的な国だという理解が進んでいる。

インドの送り出し機関の現状

・インドから日本へアクティブな送り出し機関が少ない。日本よりも他国へ送り出した方が楽で、コミッションも高い。日本だと日本語を教えなきゃいけない、コミッションも安い。最初日本もやってみようかと思って手をつけてもやらなくなるところも多い。

・ベトナムとかネパールでは、借金漬けにさせられるとか暗躍するブローカーがいると言われているが、インドでは今のところブローカーが存在してない。非常にクリーンな送り出しができています。

・インドの送り出し機関をコロナ当時に調べてみたら 33 社あり、どの送り出し機関がどういうことやっていて、どういう業種に強いのか、どこの国がやっているかなどを徹底的に調べた。現在の送り出し機関数は 24 社。インド政府も肝いりの事業。

・NAVIS というバンガロールの送り出し機関は、看護師の資格を持っているインド人を日本で介護士として送っている。しかし、日本で 3 年ぐらい働いたら、インドに帰国させ、次はヨーロッパに送ったりしている。日本でがつつりやってもらえないということで敬遠される事業者もいる。現地のトヨタの従業員の教育も担っており、日本語の先生をちゃんと置いて教育はものすごくしっかりやっている。給料が安く、日本語の先生はなかなかインドに来てくれないが、NAVIS は確保できている。

・LOHIA はインドのカンパールにある。機械、金属、溶接、建設等の職種が多い。土曜のプラスチックバックを作っており、世界のマーケットシェア 6 割〜7 割のシェアも持っている。また、組み立てラインを組み立てラインごと世界中に輸出している。そこに従業員も含めて送り込んでいる。日本人もいるので、比較的安心して頼める。

・ジャイプールにある Bhushan ITI という職業訓練校はスズキとも提携している。また、ヤマハの教室もあり、バイクの仕組みを教えている。良い学生がいたらヤマハへの就職の斡旋もしている。

・インドの北東州は、外資がほぼ入っておらず、日系企業もほとんどいない。メガバンクや総合商社も誰もいない。ネパールのカトマンズと風景が一緒で、外国に労働、出稼ぎ労働に行く人が多い。他方、外国への行き方がわからない、日本はアニメが好きだから興味はあるがどうやって行ったらいいかわからないという人たちが埋もれている。仕事がないから大学へ行く、大学を出ても仕事がないから大学院まで行く、大学院を出ても仕事がないという優秀な若者がいっぱい余っている。

・北東州は、ビジュアルが日本人に近く、モンゴロイド系。食事習慣も近い。日本人的にも感性が近いので受け入れやすい。

・ダージリン地域はネパール国境が近く、ネパール語やヒンディー語を話すなど語学リテラシーが高く、この辺の人材も結構好んで採用され始めている。

・NSDC international は、49%政府出資、51%民間出資の会社。送り出し機関の認証会社だったが、日本行きの送り出し機関が頼りないため、NSDC が学校を作って送り出しを始めた。資金的余裕があるため、教育費や食費等、半年～9 ヶ月にかかる教育費を7 万ルピー以外は全部出している。NSDC は最もコストパフォーマンスがいい。

・NSDC は、2024 年8 月に日本の介護業界トップの損保ホールディングスと契約を結んだ。大手であれば、20 名のクラスを今年は何クラス作ってほしい、来年は何クラス作ってほしい、とこういう話ができる。NSDC はそうやってある程度規模があると喜んで契約してくれる。

・福井県のさくら荘という介護施設は、経営危機のところで一気に15 人のインド介護人材を特定技能で採用したら数ヶ月後に経営が軌道に乗った。福井県の勝山市という田舎に立地しているがインド人の退職者はいない。理事長が彼女たちの福利厚生面や祝日の過ごし方等、色々考え、楽しみながら仕事をしてもらっている。

・高知県もインド人材を積極的に受け入れており、農業分野でも喜んで来日するインド人材は多い。しかし、大学院まで出て農業という物足りない感があって辞めたインド人もいる。

・日本旅館協会は、業界全体でインド人を受け入れ始め、インド人材はレベルが高いと評判。そういう取組もあり、2024 年3 月からインドで特定技能試験が始まった。

・ジェンライズという送り出し機関は、北東州の1 つのアルナチャルプラデッシュ州政府と組んでアルナチャルプラデッシュの看護学校の人に無償で日本語を教えて日本に送るということを始めた。

・トヨタはキルロスカと組んで送り出し機関をやっている。実績として、技能実習と特定技能で1,600 名。スズキも送り出し機関を作ることに期待したい。

インド人材の受け入れについて

・横浜市緑区霧が丘の団地にインド人が800 人住んでいる。横浜市がインドの企業を誘致したためだが、日本人とうまく共生している。公園ではインド人と日本人の男の子が一緒にサッカーで遊び、当然英語でコミュニケーション取っている。国際的な子どもたちを育成していくという観点でも、こういった共生は素晴らしい。

・インド人材が日本に来る上で、受け入れ側として注意点は特にない。ベジタリアンは野菜しか食べないが、日本では野菜が売っているし、問題ない。

・受け入れる側の行政としての役割は、ゴミの分別とか、同じ地域の住民の方との軋轢が出ないような緩衝材。

・インド人は家族を非常に大切にしている人たちで、単身で長期に働きに行くことに抵抗がある。家族を連れてくると病院の対応、子どもの学校など環境整備が重要。病院における症状の説明、運転免許の取得、車のリース提供、インターナショナルスクールなど、インドの

人たちが今後の将来の自分たちの家族のことも考えながら 浜松に来て、子供の病気も含めて、家族の生活も含めて、入りやすい環境を作ると、他の都市に行っているところよりもやっぱり浜松がいいということに繋がるだろう。

その他

・在インド日本国際大使館の厚労アタッシェが NSDC の窓口をやっているが日本語の何らかの意向を NSDC に提言しているという感じではない。

・インドはとにかく仕事がない。円安だとか給料他の国の方がいいのではないとか色々言われるが、インド人はとにかくインドにいても仕事がなく給料がもらえないから、外国へ行ったら給料がもらえるのは魅力。

【所感】

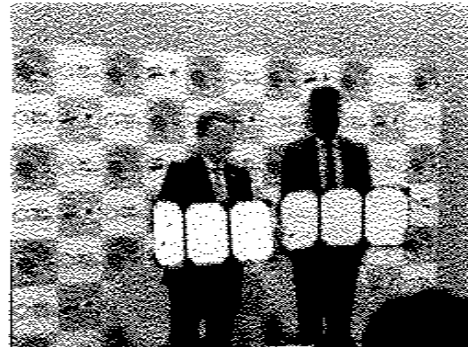
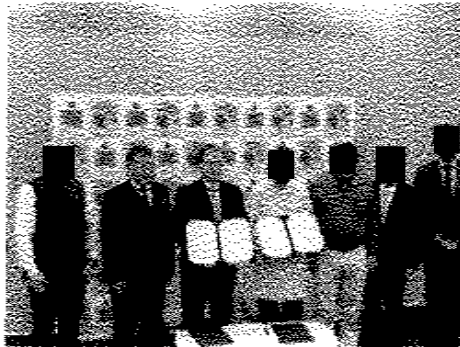
本市は長年に渡って多文化共生を進めてきたこともあり、多様な背景を持つ人々がお互いの文化を尊重し合い、共に暮らし、働き、地域社会に貢献できる環境が整っている街だ。地域の人手不足、様々な業界の人手不足が課題の本市にとって、インドの方々が私たちの地域社会に新たな視点と活力をもたらす貴重な存在になることを期待したい。今回のお話の中で、インド人の温厚な人柄や語学習得の速さなど、インド人材の魅力を新たに知る機会となったと同時に、インド人材を受け入れる本市のハードルはそこまで高くないと感ずることができた。本市市民にとってもインド人材は受け入れやすいのではなかろうか。

今回得られた知見を浜松の多文化共生施策に反映させ、インド人材が家族帯同で本市へ定住し、より活力ある本市地域社会の実現に向けて、努力していきたい。

日時：2024 年 12 月 26 日（木）9：00～14：00

訪問先：インド工科大学ハイデラバード校

目的：インド工科大学ハイデラバード校及び Next Bharat Ventures と覚書を交わし、本市との今後の連携について模索する。



【IIT ハイデラバード校 要旨】

- ・IIT は全国 23 校存在。IIT ハイデラバード校は、全 IIT23 校ある中で 8 番手です。IIT ハイデラバードを含めた 8 校が 2008 年以降に設立され、2016 年以降にさらに 7 校が追加された。各州に 1 校 IIT があるが、新しい IIT は、伝統校に比べてインフラの工事や教員の採用もまだこれから。ハイデラバード校は、伝統校の 7 番目とランキングが一瞬だけ逆転したことがある。
- ・ランキングは入ってくる学生の質に直結する。したがって、良い研究をしたかったら良い学生を取らなきゃいけない。良い学生を取るためには、常に大学のランキングが 1 番高くなければならない。これが IIT のシステム。
- ・ランキングにはいくつか分野があるが、イノベーション分野に関してはハイデラバード校の方が伝統校よりも上で、インド全体で 3 番目。大学全体の規模であるとか、キャンパシティではまだ太刀打ちできないけれども、勝てるところは勝っていくというのがハイデラバード校の方針。
- ・ハイデラバード校の学長は筑波で研究者をしていた経歴がある。日本との連携には非常に前向きに取り組んでいる。
- ・教員数は、約 320 名、学生数は 5000 人以上。
- ・様々な学科があるが、コンピューターサイエンス、シビルエンジニアリング、電気工学、この 3 つが、IIT ができた時に大体作られる学科。そういうところを中心にどんどん学科を太らせていって、新しい学科をどんどん設立し、現在は約 18 の学科がある。これにプラスして大学院プログラム等が柔軟に作られるシステムがある。
- ・大学の世界ランキングは、600 番台後半のところで、これを上げていきたい。
- ・大学として取り組んでいる重要な研究分野は AI。IIT ハイデラバードは世界で 3 番目に

人工知能の専門の学科を作った。AI を発展させると、スマートモビリティやロボティックスなど、他の分野の研究者と一緒に先端的にするかというようなことができる。そういう背景もあり、AI の分野で権威と呼ばれるような先生方がたくさん在籍している。

・伝統的なプログラムに加え、気候変動や文化遺産の研究、IT 系の廃棄物など、社会課題に直接アプローチをするような大学、学科、大学院、または学科のプログラムも存在している。また、企業にファンディングしてもらっている。

・世界中である研究分野で最前線を走っている権威と呼ばれる皆さんに声を掛けて教授になっていただいている。日本からは、慶応義塾大学の教授と京都大学の教授の2人が卓越教授になっている。

・伝統的な学科だけでなく、さらなる教員科、博士課程、学生インターンのコラボレーションなどをやろうとして、その案件が採択されると学内で研究資金が支給され、具体的なインセンティブが紐づくシステム。

・IIT ハイデラバード校の中で、特に起業文化をどう醸成するかということにかなり力を割いている。IIT は大学に入って、良い職種に就くこと。先生になりたい人がIITに来るは殆どない。

・基本的にジョブマーケット。採用のマーケットにおいてシートを取っていく方法で、企業はそれぞれの大学から何人取りますというのを決めて応募する。その決められた数のシートを、奪い合って取っていくというのが基本的な学生のスタンスになるが、IIT ハイデラバード校が学生に強く言っているのは、そのシートを競い合って取り合うのではなく、シートを新たに生み出して、他の学生がたくさん就職できるように社長になりなさいと強く言っている。

・リードプロジェクトというものがある。大学が学生にこれをやったら面白い、なんかビジネスになりそうだから技術アイデアを持ってきたと。それが本当に確からしいと確認されたら開発のためのバジェットを10万ルピー程度出す。それをスタートアップにする場合はインティベーションセンターに入って実際に起業を進める。うまくいく場合は、別に大学で学位取るまで頑張らなくていいので卒業証書(Graduation certificate)じゃなくて修了証(diploma)は出してあげるから大学を辞めてさっさと実業に行っていっていいと言っている。自分で会社を作って忙しい方に大学で勉強する意味なんかないので、大学としてはよくやったって言って diploma の証明書を出して、じゃあもうビジネス頑張って将来儲かったら寄付してね、と言って出そうとしている。大学ではあるが、大学っぽくないこともやっている。もし会社を作って失敗してもその年の新卒の採用の就活に混ざっていいというセーフティネットは作ってある。うまくいかなかったとしても IIT ハイデラバード校のブランドがあるので、学生時代に会社作って潰しちゃいましたと言ったら逆に企業は採用したが。そのように学生が守られながらも挑戦できるようなエコシステムを作っているというのが、

IIT ハイデラバード校の特徴としてかなり力を入れているところ。

- ・ハイデラバード校は JAPAN desk もあり、建物の多くは日本政府の ODA を活用して建てられ、図書館、インキュベーションセンターと大事な建物は日本の円借款で造られている。日本の企業や大学にどんどん活用してもらいたい。図書館は東大の ■■■ 先生の設計。
- ・IIT ハイデラバード校の卒業生が日本で働いているケースはたくさんある。楽天、NTTAT アドバンステクノロジー、メルカリ、Yahoo、スタートアップの企業など。
- ・毎年、JAPAN DAY という日本の企業を集めた日本の企業への採用促進イベント、就職促進イベントとをハイデラバード校で行っている。大講堂で実施するが立ち見が出るくらい、日本の企業に関心のある学生が多い。

・Next Bharat の社長もこの卒業生で、スズキに就職して 5 年で社長という学生にとっても夢がある。浜松市は自動車産業だけの街ではない。より多くの産業分野で、どうやってインド人材を上手に使いこなすのか、そのノウハウを水平展開したい。

・ハイデラバード校では日本語を勉強しなさいということは言っていない。なぜならば、言語障壁が言語障壁でなくなる日がすぐ来るから。別に英語喋れないから雇えないとか、日本語が喋れないから雇えないということはなくなってくるだろう。日本語を強制されるより、日本語が楽しいと思って自発的に勉強する方がよい。

・日本は優しくて行ける国、アメリカは憧れの国だけど行きにくい国。

・IIT ハイデラバード校は、1 名の日本語の教員がセメスターに大体 2~3 週間滞在し、短期集中で講座をしている。通年（それぞれの学期）で日本語教育ができるように確保もしている。

【MOU 締結式】

中野祐介 浜松市長 挨拶

インド工科大学ハイデラバード校 ■■■ 学長をはじめ多くの教職員の皆様、そしてご参加をいただいた皆様には、このような記念すべき覚書締結式にお集まりをいただきましたことを心から感謝を申し上げます。学長には、去年、今年と日本にお越しをいただきました。改めて深く感謝を申し上げる次第。その際の有意義な対話が今日のご締結への大きな一歩となったと思っております。

本日の覚書締結は、浜松市とインド工科大学ハイデラバード校との間で新たな協力関係の扉を開くものでございます。特に、人材交流を中心とする協力関係の構築、これは両者にとって大きな可能性を秘めているものだと感じております。

このような素晴らしい協定の締結にあたりましては、■■■ 教授の大変なお力添えをいただいたところでございます。■■■ 教授の橋渡しがなければ、本日、私もこの場に立つことはなかったと思っており、心から感謝を申し上げます。

IIT ハイデラバード校は、世界的にも高い評価を受ける教育機関、教育機関であることは

もう今更申し上げるまでもないわけでありましてけれども、特に工学あるいは技術の分野において卓越した人材を多数輩出されているわけでございます。

一方、浜松市は、チャレンジスピリットやらまいか精神で知られる産業都市でありまして、多くのイノベティブな企業が集積をしております。

今回締結する協力関係を通じて、浜松市内企業とインド工科大学ハイデラバード校の卒業生とのマッチングや学生の皆さん、研究者の皆さんの相互交流による知識と経験の共有などを大いに期待をしているところでございます。浜松市は、今回のこの協力関係を通じて、グローバルな視点を持つ人材の育成とその受け入れに全力を尽くしてまいります。同時に、インド工科大学ハイデラバード校の皆様にも日本の文化や技術に触れる機会を提供できることを大変嬉しく思っております。

結びに、本日の覚書締結を新たな出発点といたしまして、両者の関係がさらに深まり、実り大きなものになることを心から願う次第でございます。

ハイデラバード校と静岡大学の学生交流は既に始めております。また、来年■■■先生に浜松へお越しをいただき、浜松の高校生向けに講演をしていただく予定でおります。次の時代のこの両地域を引っ張っていく若者同士の交流、これをぜひとも盛んにさせていきたいと思っております。スズキイノベーションセンターなどを通じて、産業、経済の発展にも、この両都市間の連携が貢献できるように進めていきたいと思っております。

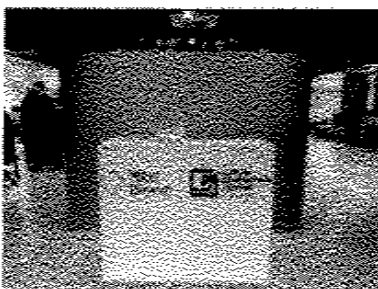
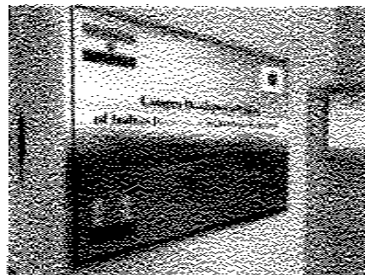
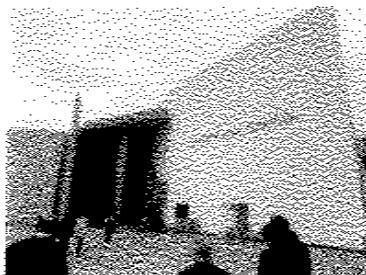
■■■学長 挨拶

スズキは浜松に本社を構えており、ハイデラバード校の卒業生 40 人がスズキに就職している。1 社だけでこれだけ多くの IIT の学生が働いているのは非常に稀。他の日本の企業にも我々の卒業生が働けるようになればと思っています。色んな企業との連携を通して両国の将来のためになるような新しい技術開発をしていきたい。また、浜松や静岡の企業とハイデラバード校の博士課程の研究生との共同研究及びスタートアップ企業間の連携を期待している。

アメリカにみんな行きたがるが、文化的に学ぶことは多くない。それに対して、日本は文化的に非常に強い側面があってインドと似ているところもある。そういった文化面で学べることが大きいと思っている。

私は、1999 年から 2001 年まで 2 年間日本に行って日本が大好きになった。インドに帰国してから、どうやったら私たちが日本とインドの架け橋になれるか、そういうことを常に考えている。

インドの学生が日本から学べることは、規律正しさや謙遜さなど、お金よりもそういう側面が大事。お金にもなるけど、同時にその文化面など色々な側面も学べることから、それが IIT ハイデラバード校にとって大きなメリットをもたらすと思っている。



【所感】

インド工科大学はインド最高峰の大学であり、本市としてこのインド工科大学のハイデラバード校と提携できる意義は大きい。他方で、高度人材を求める都市は日本全国だけでなく、世界各国が獲得競争を行っているのも事実である。本市とインド工科大学ハイデラバード校が覚書を締結したが、ここからどれだけ本市の若者や企業と交流し、どれだけのインド人材が本市を選んでくれるかは重要なポイントである。そのためには、本市としての魅力をインドの方々に知っていただく必要があると同時に、本市企業の魅力も知っていただく必要がある。中国の企業や自治体は年に何度も訪れて関係構築をしていくのが常だというが、本市も決して年に1回だけの交流にとどまらず、今回の覚書を有効に利用し、実りある果実を本市にもたらすよう努力を重ねることが重要であると感じた。日本のODAを活用し、JICAの支援によって建てられたことのハイデラバード校を、他国ではなく、日本の都市や日本企業がうまく活用していただいたい。日印の企業がイノベーションを創出したり、日本のプレゼンスが高まるような本市の取組みに期待するとともに、私もハイデラバード校を定期的に訪れ、本市に資する建設的な議論をしていきたい。

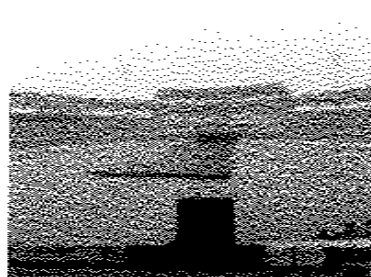
日時：2024 年 12 月 26 日（木）16：30～17：30

訪問先：Rajiv Gandhi International Cricket Stadium（ラジブ・ガンディー国際クリケットスタジアム）

目的：インドにおいて国民的スポーツとなっているクリケットスタジアムを視察し、スポーツ振興の面での連携の可能性を探るとともにクリケットに対する知見を深め、今後の施策に活かす。

【概要】

- ・当スタジアムは、インドのテランガナ州ハイデラバードにある国際クリケットスタジアム。一般的にはウッパルスタジアムとして親しまれている。
- ・ハイデラバードクリケット協会が所有し、運営している。
- ・ハイデラバードクリケットチーム（サンライザーズハイデラバード）とハイデラバード女子クリケットチームのホームグラウンドとなっている。
- ・東部地域のウパルに位置し、敷地面積 15 エーカーの中に 55,000 人の収容人数を誇る。
- ・2004 年にピサカ国際クリケットスタジアムと命名されたが、インドのラジブ・ガンディー元首相を記念し、スタジアム名をラジブ・ガンディー国際クリケットスタジアムに変更した。
- ・IPL2019 と IPL2024 にハイデラバードクリケット協会がベストグラウンドとピッチ賞を受賞した。



【所感】

クリケットと言っても日本人には馴染みがないだろう。かくいう私もその一人であり、クリケット場を見たことも今回が初めてであった。旧イギリス領であった国々にとっては、クリケットは人気のスポーツでインドでも大人気のスポーツだ。国際大会を開催することはあっても、日本で大会を開催することは実現の可能性は高くないだろうが、インドの文化や伝統を知るうえで、今回ラジブ・ガンディー国際クリケットスタジアムを視察させていただいたことは有意義だった。今後のインドとの関係性に活かしていきたい。